令和 5（2023）年度 コミュニケーションデザイン研究科 開設科目一覧

科目区分	科目コード	科目名	担当教員	講義演習	単位数	標準履修年次	DP	学期	曜日	備考
基礎科目	CDPA0112L	コミュニケーションデザイン概論	吉國 浩二	講義	2	1	②③	前期	土A①②	選択必修
	CDPA0113L	実践研究法Ⅰ	オムニバス	講義	2	1	④	前期	火B	選択必修／PE共通
	CDPA0114S	実践研究法Ⅱ	富井 久義	演習	2	1	④	後期	火B	選択必修／PE共通
	CDPA0116L	経営学基礎理論	滝沢 創	講義	2	1・2	①	前期	土B③④	
	CDPA0106L	マーケティングの理論と実践	高広 伯彦	講義	2	1・2	③	前期	火A	
	CDPA0105L	組織論	坂本 文武	講義	2	1・2	②	後期	水B	PE共通
	CDPA0115L	社会学基礎理論	富井 久義	講義	2	1・2	①	前期	水B	PE共通
	CDPA0103L	情報・文化・コミュニケーション	橋本 純次	講義	2	1・2	①	前期	土A③④	
	CDPA0117L	現代社会論	富井 久義	講義	2	1・2	①	後期	木A	PE共通

基礎科目から選択必修2単位以上を含む6単位以上を履修する

科目区分	科目コード	科目名	担当教員	講義演習	単位数	標準履修年次	DP	学期	曜日	備考
専門基礎科目	CDPB0201L	企業理念・経営哲学	広木 隆	講義	2	1・2	②	後期	土B③④	
	CDPB0202L	コーポレート・コミュニケーション	二木 真	講義	2	1・2	②③	後期	土A①②	
	CDPB0206S	リスク・マネジメント	白井 邦芳	演習	2	1・2	③	前期	金A	
	CDPB0203S	公共政策	橋本 純次	演習	2	1・2	①	前期	火A	
	CDPB0204S	公共コミュニケーション	牧瀬 稔	演習	2	1・2	②③	後期	土B①②	
	CDPB0211L	サステナビリティ・コミュニケーション	伊吹 英子	講義	2	1・2	②③	前期	土B①②	
	CDPB0212L	現代社会と人的資本	川山 竜二	講義	2	1・2	①	後期	木B	
	CDPB0209S	デジタル・コミュニケーション	渡邉 順也	演習	2	1・2	①③	前期	月A	
	CDPB0210L	マスメディア論	橋本 純次	講義	2	1・2	①	前期	木B	
	CDPB0213S	デジタル・シティズンシップ	橋本 純次	演習	1	1・2	①③	夏季集中	－	

専門基礎科目から4単位以上を履修する

科目区分	科目コード	科目名	担当教員	講義演習	単位数	標準履修年次	DP	学期	曜日	備考
専門科目	CDPC0302L	インターナル・コミュニケーション	柴山 慎一	講義	2	1・2	②③	前期	木A	
	CDPC0303L	広報マネジメント	北見 幸一	講義	2	1・2	②③	後期	月B	
	CDPC0312L	IR（財務広報）	柴山 慎一	講義	2	1・2	②③	後期	木A	
	CDPC0316S	リスク・コミュニケーション特論A（組織）	白井 邦芳	演習	2	1・2	③	後期	金A	
	CDPC0318L	ブランド・コミュニケーション	谷口 優	講義	2	1・2	③	後期	火B	
	CDPC0315S	プロダクト広報特論	谷口 優	演習	2	1・2	②③	前期	月B	
	CDPC0314L	スタートアップ・コミュニケーション	佐藤 直樹	講義	1	1・2	②③	夏季集中	－	
	CDPC0323S	パブリック・アフェアーズ	北島 純	演習	2	1・2	①③	後期	火A	
	CDPC0306S	シティ・プロモーション	牧瀬 稔	演習	2	1・2	③	前期	土A①②	
	CDPC0309L	ソーシャル・コミュニケーション	坂本 文武	講義	2	1・2	②③	前期	火B	
	CDPC0324L	サイエンス・コミュニケーション	山口 健太郎	講義	2	1・2	①③	後期	金B	
	CDPC0325S	リスク・コミュニケーション特論B（災害）	橋本 純次	演習	2	1・2	③	後期	月A	
	CDPC0311L	ICTと広報	鶴野 充茂	講義	1	1・2	①③	春季集中	－	
	CDPC0313L	グローバル・コミュニケーション	伴野・関	講義	2	1・2	①③	前期	木A	
	CDPC0307L	SDGsの理論と実践	鶴田 佳史	講義	2	1・2	②③	後期	火A	
	CDPC0319S	オーディエンス・リサーチ	橋本 純次	演習	2	1・2	①④	後期	木A	
	CDPC0321L	情報戦略論	北島 純	演習	2	1・2	①	前期	水A	

専門科目から6単位以上を履修する

科目区分	科目コード	科目名	担当教員	講義演習	単位数	標準履修年次	DP	学期	曜日	備考
演習科目	CDPD04n1T	コミュニケーションデザイン演習 1	川山 竜二	演習	2･2	1・2	④	前期・後期	月B	選択必修
	CDPD04n2T	コミュニケーションデザイン演習 2	柴山 慎一	演習	2･2	1・2	④	前期・後期	木B	選択必修
	CDPD04n3T	コミュニケーションデザイン演習 3	伊吹 英子	演習	2･2	1・2	④	前期・後期	土B③④	選択必修
	CDPD04n4T	コミュニケーションデザイン演習 4	牧瀬 稔	演習	2･2	1・2	④	前期・後期	土A③④	選択必修
	CDPD04n5T	コミュニケーションデザイン演習 5	広木 隆	演習	2･2	1・2	④	前期・後期	土B①②	選択必修
	CDPD04n6T	コミュニケーションデザイン演習 6	高広 伯彦	演習	2･2	1・2	④	前期・後期	水A	選択必修
	CDPD04n7T	コミュニケーションデザイン演習 7	白井 邦芳	演習	2･2	1・2	④	前期・後期	火A	選択必修
	CDPD04n8T	コミュニケーションデザイン演習 8	北島 純	演習	2･2	1・2	④	前期・後期	水B	選択必修
	CDPD04n9T	コミュニケーションデザイン演習 9	谷口 優	演習	2･2	1・2	④	前期・後期	月A	選択必修
	CDPD04n0T	コミュニケーションデザイン演習 10	橋本 純次	演習	2･2	1・2	④	前期・後期	金A	選択必修

演習科目から6科目（12単位）を選択必修とする
各学期で履修する科目数は、1年次は1科目（2単位）、2年次は2科目（4単位）とする（2年次は2科目を通年で履修する）

※「DP」欄は「修了認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」との対応関係を示しています。

令和 5(2023)年度 コミュニケーションデザイン研究科 時間割

前期 A	月	火	水	木	金	土
1・2限 10:30 – 12:00 12:10 – 13:40						CDPA0112L コミュニケーションデザイン概論 吉國 浩二
						CDPC0306S シティ・プロモーション 牧瀬 稔
3・4限 14:40 – 16:10 16:20 – 17:50						CDPA0103L 情報・文化・コミュニケーション 橋本 純次
						CDPD04n4T CD演習 4 牧瀬 稔
5・6限 18:30 – 20:00 20:10 – 21:40	CDPB0209S デジタル・コミュニケーション 渡邉 順也	CDPB0203S 公共政策 橋本 純次	CDPC0321L 情報戦略論 北島 純	CDPC0302L インターナル・コミュニケーション 柴山 慎一	CDPB0206S リスク・マネジメント 白井 邦芳	
	CDPD04n9T CD演習 9 谷口 優	CDPA0106L マーケティングの理論と実践 高広 伯彦	CDPD04n6T CD演習 6 高広 伯彦	CDPC0313L グローバル・コミュニケーション 伴野 崇生　関 正雄	CDPD04n0T CD演習 10 橋本 純次	
		CDPD04n7T CD演習 7 白井 邦芳				

前期 B	月	火	水	木	金	土
1・2限 10:30 – 12:00 12:10 – 13:40						CDPB0211L サステナビリティ・コミュニケーション 伊吹 英子
						CDPD04n5T CD演習 5 広木 隆
3・4限 14:40 – 16:10 16:20 – 17:50						CDPA0116L 経営学基礎理論 滝沢 創
						CDPD04n3T CD演習 3 伊吹 英子
5・6限 18:30 – 20:00 20:10 – 21:40	CDPC0315S プロダクト 広報特論 谷口 優	CDPA0113L 実践研究法Ⅰ オムニバス	CDPA0115L 社会学基礎理論 富井 久義	CDPB0210L マスメディア論 橋本 純次		
	CDPD04n1T CD演習 1 川山 竜二	CDPC0309L ソーシャル・コミュニケーション 坂本 文武	CDPD04n8T CD演習 8 北島 純	CDPD04n2T CD演習 2 柴山 慎一		

後期 A	月	火	水	木	金	土
1・2限 10:30 – 12:00 12:10 – 13:40						CDPB0202L コーポレート・コミュニケーション 二木 真
3・4限 14:40 – 16:10 16:20 – 17:50						CDPD04n4T CD演習 4 牧瀬 稔
5・6限 18:30 – 20:00 20:10 – 21:40	CDPC0325S リスク・コミュニケーション特論B(災害) 橋本 純次	CDPC0323S パブリック・アフェアーズ 北島 純	CDPD04n6T CD演習 6 高広 伯彦	CDPA0117L 現代社会論 富井 久義	CDPC0316S リスク・コミュニケーション特論A(組織) 白井 邦芳	
	CDPD04n9T CD演習 9 谷口 優	CDPC0307L SDGsの理論と実践 鶴田 佳史		CDPC0312L IR(財務広報) 柴山 慎一	CDPD04n0T CD演習 10 橋本 純次	
		CDPD04n7T CD演習 7 白井 邦芳		CDPC0319S オーディエンス・リサーチ 橋本 純次		

後期 B	月	火	水	木	金	土
1・2限 10:30 – 12:00 12:10 – 13:40						CDPB0204S 公共コミュニケーション 牧瀬 稔
						CDPD04n5T CD演習 5 広木 隆
3・4限 14:40 – 16:10 16:20 – 17:50						CDPB0201L 企業理念・経営哲学 広木 隆
						CDPD04n3T CD演習 3 伊吹 英子
5・6限 18:30 – 20:00 20:10 – 21:40	CDPC0303L 広報マネジメント 北見 幸一	CDPA0114S 実践研究法Ⅱ 富井 久義	CDPA0105L 組織論 坂本 文武	CDPB0212L 現代社会と人的資本 川山 竜二	CDPC0324L サイエンス・コミュニケーション 山口 健太郎	
	CDPD04n1T CD演習 1 川山 竜二	CDPC0318T ブランド・コミュニケーション 谷口 優	CDPD04n8T CD演習 8 北島 純	CDPD04n2T CD演習 2 柴山 慎一		

夏季集中	CDPB0213S デジタル・シティズンシップ 橋本 純次	CDPC0314L スタートアップ・コミュニケーション 佐藤 直樹

春季集中	CDPC0311L ICTと広報 鶴野 充茂

シ ラ バ ス

（コミュニケーションデザイン研究科）

※ シラバスの変更、追加等が生じた場合は、Teams・掲示等でお知らせいたします

授業名称	コミュニケーションデザイン概論			科目コード	CDPA0112L
担当教員	吉國 浩二	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1 年次	開講学期	前期	曜日	土 A（1・2 限）
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択必修

授業の目的

本授業の目的は，コミュニケーションデザイン研究科の対象とする教育・研究領域に関する網羅的な学修を通じて，履修者が本研究科における 2 年間の学びの基盤となる知見や考え方を修得することにある。本授業では，本研究科の教育課程における 3 つの柱である「コーポレート・コミュニケーションデザイン」，「公共コミュニケーションデザイン」，「サステナビリティ・コミュニケーションデザイン」の三者について核となる知見を提供しつつ，その前提としての「広報・PR」に関する考え方についても学修する。さらに，それぞれの履修者が平時の業務において直面している課題や考えている事柄について対話する機会を通じて，同分野における「正解のなさ」の認識や，そうした分野を学ぶ際に求められる基本的な態度についても実践的に身につけていく。

到達目標

① 履修者がコミュニケーションデザイン研究科で学ぶ具体的な領域について説明できるようになる。
② 履修者がコミュニケーションデザイン分野における学習方法を説明できるようになる。
③ 履修者がコミュニケーションデザイン分野における先進事例の特徴を説明できるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講／吉國浩二）オリエンテーション	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業での質問事項の検討（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h）
第 2 週	（第 2 講・第 3 講／橋本純次）「コミュニケーションデザインの課題」をめぐる対話	事前	授業資料の確認（1.5h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h） ディスカッションの復習（4h）
第 3 週	（第 4 講・第 5 講／二木真）広報・PR 概論	事前	授業資料の確認（1.5h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h）
第 4 週	（第 6 講・第 7 講／二木真）コーポレート・コミュニケーション概論	事前	授業資料の確認（1.5h） 指定された文献の精読（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h）
第 5 週	（第 8 講・橋本純次）公共コミュニケーション概論 （第 9 講・橋本純次）サステナビリティ・コミュニケーション概論	事前	授業資料の確認（1.5h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h） ディスカッションの復習（5h）
第 6 週	（第 10 講・第 11 講／ゲスト講師・吉國浩二）	事前	授業資料の確認（1.5h） ゲスト講師に関する事前調査（5h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h） ディスカッションの復習（2h）
第 7 週	（第 12 講・第 13 講／ゲスト講師・吉國浩二）	事前	授業資料の確認（1.5h） ゲスト講師に関する事前調査（5h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h） ディスカッションの復習（2h）

第 8 週	（第 14 講・第 15 講／ゲスト講師・吉國浩二）	事前	授業資料の確認（1.5h） ゲスト講師に関する事前調査（5h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h） ディスカッションの復習（2h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため，本授業は講義とディスカッションを中心に進行する。また，いくつかの授業ではゲスト講師を招聘し，最先端の実践を学ぶ。

教科書・参考書

教科書は指定しない。

参考書として，

- 社会情報大学院大学 編（2016）『広報コミュニケーション基礎』，宣伝会議.
- 関谷直也ほか（2022）『広報・PR 論：パブリック・リレーションズの理論と実際』，有斐閣.

評価方法

① 各回の授業でのディスカッションへの貢献

② コメントペーパーの提出

以上，①（40%），②（60%）の総合評価により判定する。

その他の重要事項

広報・PR をはじめとするコミュニケーション系業務の実務経験がない学生のほか，自らの業務を理論的視座を踏まえつつ改めて省察したいと考える学生による履修を推奨する。各教員のオフィスアワーおよび予約の方法については初回の授業で説明する。

ゲスト講師の都合により第 5 週から第 8 週の授業計画に変更が生じる可能性がある。その場合は，直ちに Teams を通じて案内する。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	○	○	−

授業名称	実践研究法 I			科目コード	CDPA0113L
担当教員	オムニバス	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1 年次	開講学期	前期	曜日	火 B
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択必修

授業の目的

本授業の目的は，履修者が社会構想大学院大学の専門職学位課程において，修士論文相当の最終成果物を作成するにあたり必要となるアカデミック・スキルズを身につけることにある。社会人学生が大学院において効率的に実りある学びを得るためには，これまでに蓄積された学術知にアクセスし，それらを読み解き，自ら新たな知を生み出し，他者に伝達するための一連の能力を高い水準で有することが必要不可欠である。
本授業ではまず「研究」や「調査」とはいかなる営みか整理し，それらを支える思考法を学び，そのうえで文献調査の技法や，アカデミックコンテンツを読み・書き・伝える能力を身につけていく。併せて，適切な倫理性を備えた研究計画を立案するための基礎的な考え方を習得する。

到達目標

① 履修者が「研究」や「調査」といった概念や，その前提となる思考法・倫理について説明できるようになる。
② 履修者が書籍や論文といった学術的リソースを利活用できるようになる。
③ 履修者がアカデミックなコンテンツを読み・書き・伝える能力を身につける。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講／橋本純次）研究とはなにか，調査とはなにか：オリエンテーション	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業での質問事項の検討（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 指定された文献の精読（2h）
第 2 週	（第 2 講・第 3 講／橋本純次）論理的思考とデザイン思考：高度専門職業人の基礎となる世界の捉え方	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 指定された文献の精読（2h）
第 3 週	（第 4 講・第 5 講／眞崎光司）文献調査の技法：学術情報を体系的に検索する方法	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 指定された文献の精読（2h）
第 4 週	（第 6 講・第 7 講／眞崎光司）クリティカル・リーディングの基礎と実践：文献レビューのための読書法	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 指定された文献の精読（2h）
第 5 週	（第 8 講・第 9 講／伴野崇生）アカデミック・ライティングの基礎	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 指定された文献の精読（2h）
第 6 週	（第 10 講・第 11 講／全教員）アカデミック・ライティング演習：パラグラフ・ライティングの実践	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（6h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 指定された文献の精読（2h）
第 7 週	（第 12 講・第 13 講／橋本純次）アカデミック・プレゼンテーションの基礎と実践：ビジネス・プレゼンテーションとの違いを中心に	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）

第 8 週	（第 14 講・第 15 講／富井久義）研究計画と研究倫理：調査依頼状にあらわれるリサーチ・デザインと調査倫理	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 授業内課題のブラッシュアップ（2h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため，本授業は講義とディスカッションを中心に進行する。併せて，アカデミックな方法論を履修者全体に内在化する観点から，いくつかのテーマでは課題へのフィードバックを全体で共有しながら授業を進める。

教科書・参考書

参考書として以下 3 点を挙げる。履修者の状況に応じていずれかを手元に置くことが望ましい。

- 戸田山和久（2022）『最新版 論文の教室』, NHK 出版.
- 鹿島茂（2003）『勝つための論文の書き方』，文藝春秋.
- ウェイン・ブース（2018）『リサーチの技法』，ソシム.

評価方法

① 毎回の授業でのディスカッションへの貢献とコメントペーパーの提出
② 各回で課せられる課題の提出
③ 最終課題の提出
以上，①（40%），②（30%），③（30%）の総合評価により判定する。

その他の重要事項

論文等，アカデミックな文章の執筆経験がない学生のほか，そうした技術を改めて習得したいと考える学生に履修を推奨する。各教員のオフィスアワーおよび予約の方法については初回の授業で説明する。
本授業は 1・6・8 週をハイフレックス、2・3・4・5・7 週をオンラインで実施する。
成績評価教員：橋本純次

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	−	−	○

授業名称	実践研究法Ⅱ			科目コード	CDPA0114S
担当教員	富井 久義	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1 年次	開講学期	後期	曜日	火 B
年間開講数	1 回	授業種別	演習	授業区分	選択必修

授業の目的

本授業の目的は、社会調査の発想法や具体的な方法論を理解し、みずから有する課題を探究するにあたって適切な調査方法を選択し、調査の設計・実施・集計・分析・解釈・報告ができるようになることである。

とくに、研究科所属大学院生を対象とした調査票調査である学習時間調査と、修了生を対象とした大学院での学習効果にかんする聞き取り調査を題材に取り上げた演習を取り入れることで、社会調査の手法を実践的に習得することをめざす。

到達目標

① 社会調査の主要なねらいや発想法を理解し、調査にもとづく報告書や論文を適切に読み解くことができる。
② 社会調査の設計・実施・集計を適切な手法をもちいておこなうことができる。
③ 社会調査の分析・解釈・報告を適切な手法をもちいておこなうことができる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）社会調査とはなにか（イントロダクション） ——社会調査史、社会調査の種類と実例、調査倫理	事前	シラバスを読み課題や評価方法等についての疑問点をまとめる（1h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、選択するグループの検討（1.5h）
第 2 週	（第 2・3 講）社会調査の設計と実施方法 ——調査企画と設計、質問文・調査票のつくりかた、調査の実施とデータの整理	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、グループでの調査計画検討（2h）
第 3 週	（第 4・5 講）調査データの分析 ——記述統計データの読みかた、基礎的統計概念、グラフの読みかたと作成方法	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、グループでの調査票・質問案検討（2h）
第 4 週	（第 6・7 講）質的な調査と分析 ——質的調査の方法、質的データの分析法、質的データ分析ソフトの使用法	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、グループでの調査票・質問案検討（1.5h）
第 5 週	（第 8・9 講）社会調査の実践① ——学習時間調査のリバイズと実査、学習成果にかんする聞き取り調査の設計	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、グループでの調査票・質問案完成（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、学習時間調査・聞き取り調査の実査（8h）
第 6 週	（第 10・11 講）社会調査に必要な統計学 ——基本統計量、検定、相関係数	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、グループでの調査データの入力・整理（2h）
第 7 週	（第 12・13 講）多変量解析の方法 ——重回帰分析、ロジスティック回帰分析、分散分析	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、グループでの調査データの分析（1.5h）
第 8 週	（第 14・15 講）社会調査の実践② ——分析、仮説検証、報告書作成	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、グループでの知見の整理（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、最終レポート課題への取り組み・執筆（8h）、最終レポート課題相互レビュー（2h）

授業の進め方と方法
本授業は、第 2 週目以降、2 講連続で実施する。社会調査の発想法や方法論についての講義と、調査票調査または聞き取り調査の設計・実施・集計・分析に取り組む演習の双方を取り入れて授業を進める。授業外にグループで協力して課題に取り組むことも求められる。 毎週の授業終了時には、授業で学んだこと、意見・質問・感想、演習課題への貢献を記すコメントペーパーの提出を求める。コメントペーパーには教員からフィードバックのコメントを返す。このうち重要なものについては、次週の授業冒頭のふりかえりの際に紹介する。 授業で取り組んだ調査結果をもとにした、大学院での学習にかんする考察を求める最終レポート課題を課す。最終レポート課題は提出期限後、履修者が相互に閲覧可能な期間を設ける。
教科書・参考書
【教科書】指定しない 【参考書】 ● 社会調査協会，2014,『社会調査事典』丸善出版. ● 佐藤郁哉，2015,『社会調査の考え方［上・下］』東京大学出版会. ● 大谷信介ほか編，2013,『新・社会調査へのアプローチ――論理と方法』ミネルヴァ書房. ＊このほか、初回および毎回の授業で参考書・参考資料を提示する。
評価方法
● コメントペーパーの内容 30% ● 演習課題への貢献 30% ● 最終レポート課題の内容 40%
その他の重要事項
担当教員のオフィスアワーおよび授業時間外での相談方法については、第 1 週の授業で説明する。
2022 年度科目との読替え
CDPA1110S　社会調査法 A と CDPA1111S　社会調査法 B を 2022 年度までに履修で読替え。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	−	−	○

授業名称	経営学基礎理論			科目コード	CDPA0116L
担当教員	滝沢 創	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	土 B（3・4 限）
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は企業が経営を行なっていくうえでの、その手法やルールが学術的にまとまった経営学というものの基礎知識や思考方法・手段の基本的な理解を履修者が深めていくことにある。
経営学は様々な観点から構成されており、そのためなぜそういう成り立ちとなっているのかその関係性、そしてその構成理論が実際の企業経営の現場においてはどのように活用され、どんな効果や影響を生み出し、さらにどういった成果や結論を導き出すに至ったかを本授業で明らかにしていく。
したがって実際の企業を題材としたディスカッションを通じて、履修者がそういった経営の動きというものを自分事として理解し、現在の企業が直面する経営課題に対して語れる力を身に付けていくことを目指す。

到達目標

① 履修者が経営学の各構成要素およびその関係性、またそこで展開される理論/セオリー、フレームワーク運用を始めとした分析手法を理解来るようになる。
② 履修者が学問としての経営学を捉えることで終わるのではなく、実際に実務の場面で経営活動がなされた時に、事象把握をどう行なった上で事由や対策を認識し、そこからどう行動すべきかをイメージ出来、そして評価→判断が可能となるような『軸』を、自身の中で形成/活用することが出来るようになる。
③ 履修者が自身の業務においてコミュニケーションデザイン担当として、企業内外の様々なステークホルダーと、同じ目線で経営課題を共有し自覚性を持って対応出来る力を身に付けることが出来るようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）オリエンテーション（本授業の目的・到達点・授業の進め方、経営学の必要性と全体像把握）	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業での質問事項の検討（0.5h）
		事後	授業内容のハンドアウトを使った復習（1h） コメントペーパーの提出（1h）
第 2 週	（第 2・3 講）経営戦略：企業経営の根幹である企業理念・ビジョン/ミッションの理解～経営戦略における事業特性/経済性把握、競争優位戦略の立案と意思決定、戦略分析方法の理解	事前	授業資料の確認（1h） 事前課題準備（2.5h）
		事後	ディスカッションおよび授業内容のハンドアウトを使った復習（1h） コメントペーパーの提出（1h）
第 3 週	（第 4・5 講）マーケティング：マーケティング戦略の立案とその具体的な実行プロセス（＝課題発見～STP 策定～マーケティングミックス(4P)）の理解	事前	授業資料の確認（1h） 事前課題準備（2.5h）
		事後	ディスカッションおよび授業内容のハンドアウトを使った復習（1h） コメントペーパーの提出（1h）
第 4 週	（第 6 講）アカウンティング（財務会計）：ビジネスの諸活動と財務諸表とのつながり （第 7 講）アカウンティング（管理会計）：事業構造の把握と損益分岐点分析	事前	授業資料の確認（1h） 事前課題準備（2h）
		事後	ディスカッションおよび授業内容のハンドアウトを使った復習（2h） コメントペーパーの提出（1h）
第 5 週	（第 8・9 講）ファイナンス：企業経営におけるファイナンスの目的と全体像、キャッシュフロー(CF)と金銭の時間的価値の理解、事業価値の測定と事業投資における意思決定	事前	授業資料の確認（1h） 事前課題準備（2h）
		事後	ディスカッションおよび授業内容のハンドアウトを使った復習（2h） コメントペーパーの提出（1h）

第 6 週	（第 10 講）組織行動とリーダーシップ : 企業戦略に沿った組織目標に向けてメンバーを導くリーダーの取り組みとは何か？ （第 11 講）人材マネジメント : 企業理念/経営戦略を踏まえ、組織構造・人事システム・組織文化といった人を効果的に動かす各仕組みの関係性理解	事前	授業資料の確認（2h) 事前課題準備 （計 3.5h）
		事後	ディスカッションおよび授業内容のハンドアウトを使った復習（2h） コメントペーパーの提出（1h）
第 7 週	（第 12・13 講）オペレーション : オペレーション戦略の理論とプロセス分析、競争優位性のあるオペレーションマネジメント（生産計画・品質/プロセス改善・人材活用等）	事前	授業資料の確認（1h) 事前課題準備（2.5h）
		事後	ディスカッションおよび授業内容のハンドアウトを使った復習（1h） コメントペーパーの提出（1h）
第 8 週	（第 14・15 講）レポート課題の発表と全体ディスカッション・講評～授業総括	事前	レポート課題（＝下記「授業の進め方と方法」欄参照）の作成（18h）
		事後	ディスカッションおよび授業内容の復習（1h） コメントペーパーの提出（1h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義とディスカッションやプレゼンテーション等を使用した参加型授業とし、課題も出し考察を求める。したがい第 2 週以降は事前に配布する資料を熟読し、その準備をきちんと実施した上で参加することが必要となってくる。また履修者は、学んだ内容が自らの実務とどう関係するのか、どのように役立つ可能性があるのか、といった事柄についてコメントペーパーに記入し、毎回の講義終了後に提出をする。第 8 週に提出してもらうレポート課題は以下の内容を想定している。

『第 7 週までに学んだ 7 つのテーマ授業内容を使い、自身が属する企業や自身の担当業務における課題、或いは今後取り組む予定のことや取り組んでみたい案件について、経営分析を行ない自分なりの回答を出す。テーマ授業内容全てを使用しても構わないが、最低限 3 つのテーマは使って考察取り組みを行なうものとする』

教科書・参考書

教科書は特に指定しない。

参考書 : 井坂　久光（2013）『テキスト経営学　基礎から最新の理論まで』, ミネルヴァ書房

三谷　宏治（2019）『新しい経営学』, 株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン

評価方法

・授業中のディスカッションへの参加や発言内容などの貢献度・コメントペーパーの内容（30%）

・第 2 週～7 週の授業前提出の事前課題（30%）

・第 8 週目提出レポート課題（40%）

その他の重要事項

・毎回、次回の資料及び課題は基本 Teams で事前配布するので、各自でダウンロードのうえ使用すること。

・本授業の各回講義を欠席する場合は、Teams 等を通じて事前に連絡することが望ましい。

・担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回の授業で説明する。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	–	–	–

授業名称	マーケティングの理論と実践			科目コード	CDPA0106L
担当教員	高広 伯彦	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	火 A
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、履修者がマーケティングに関する基礎的な知識を理論と実践の双方の観点から理解し、それぞれの実務或いは研究において有用な知見として身につけることにある。そのため本講義では、具体的な例をもって基礎的なマーケティング用語・概念の説明を行うとともに、学術的な観点からのマーケティングの諸概念を近年の理論的な変化など、非常に抽象度の高いトピックも扱う。こうした授業の背景には、実務家でもある社会人大学院生が、実践を理論的に説明または理論を実践に活かすことを目指すことにある。単に「マーケティングを学ぶ」だけではなく、本講義を通じて、履修者個々人が理論と実践を行き来できる高度専門職職業人になる基礎的なスキルを身につけることも目的とする。

到達目標

① 履修者が、現代マーケティングの基礎的な概念・理論について説明できるようになる。
② 履修者が、現代マーケティングにおける学術的な論文を読解できるスキルを身につける。
③ 履修者が、抽象度の高い理論と実践を行き来できるような思考を身につける。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）マーケティングの定義とその役割	事前	シラバスの精読（1h）
		事後	課題の提出（2h）
第 2 週	（第 2 講）マーケティングの計画とマネジメント （第 3 講）B2C 市場の分析と理解	事前	参考資料の購読（4h）
		事後	課題の提出（2h）
第 3 週	（第 4 講）B2B 市場の分析と理解 （第 5 講）マーケティングリサーチの実務と方法論	事前	参考資料の購読（4h）
		事後	課題の提出（2h）
第 4 週	（第 6 講）市場戦略の策定 （第 7 講）ポジショニングと顧客価値提案	事前	参考資料の購読（4h）
		事後	課題の提出（2h）
第 5 週	（第 8 講）価値設計論 （第 9 講）サービスとサービスマーケティング	事前	参考資料の購読（4h）
		事後	課題の提出（2h）
第 6 週	（第 10 講）ブランド論 （第 11 講）セールスプロモーションと価格戦略	事前	参考資料の購読（4h）
		事後	課題の提出（2h）
第 7 週	（第 12 講）マーケティングコミュニケーション （第 13 講）デジタルマーケティング	事前	参考資料の購読（4h）
		事後	課題の提出（2h）
第 8 週	（第 14 講）リレーションシップ・マーケティング （第 15 講）まとめ	事前	参考資料の購読（4h）
		事後	課題の提出（17h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は参考資料を中心に複数の文献を講読し、かつ授業内で積極的な

質問や討議を行なうこととする。事前に示された文献を精読することは必須とする。
教科書・参考書
教科書は指定しない。 参考書 : フィリップ・コトラー, K.L.ケラー, A. チェルネフ（2022）『マーケティング・マネジメント 第 16 版』, 丸善出版. 他、授業内で適宜論文などを提示する。
評価方法
本講義では毎回の講義においてコメントペーパーの提出を義務付ける。 評価は、コメントペーパー60%・最終レポート 40%とする。
その他の重要事項
Teams 他を用いた面談などを中心とするため、定期的なオフィスアワーは設けないが、履修者の希望により時間を設けて随時オフィスアワーを設定する。具体的な方法については、第 1 講にて説明する。
2022 年度科目との読替え
なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	–	–	○	–

授業名称	組織論			科目コード	CDPA0105L
担当教員	坂本 文武	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	水 B
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、組織というものの構成要素や構造的課題を理解することで、広報及び人材育成担当者として企業と社員との関係性を再考する。組織と社員の成長を促す観点に軸足をおいて、「どのような組織デザインが望ましいのか」、「企業理念や社内外のステークホルダーとの関係性をどのように設計することが望ましいのか」などの問いに応えられるよう授業を進行する。「組織は人の集合体」である以上、人を扱う担当者は、組織の本質やジレンマを俯瞰して理解する必要がある。株式会社とは何か、ガバナンスの意義は何か、企業は何のために存在しているのか、など本質的な問いに向き合うことで、企業と社会、企業と社員の関係性を整理できるようになることを目指す。なお、本授業で扱う組織は、営利企業を主たる対象とする。ただし、組織の本質を理解するため、敢えて非営利組織や行政機構との共通点や相違点を確認しながら討議する。

到達目標

① 履修者が組織の可能性と課題を分析する基本的な視点を獲得する。
② 履修者が組織と社会の関係を体系的に説明することができる。
③ 履修者が組織を設計する際に重視すべき点について、自らの考えを述べることができる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）企業と社会の関係性導入―「unsocial」な企業は存在しているのか、なぜ存在しうるのか	事前	シラバスの精読と 授業での質問事項の検討（0.5h）
		事後	ディスカッションの復習（1h）
第 2 週	（第 2 講）企業と社会の歴史的解釈―企業は人をどう扱ってきたのか、サステナビリティに至る経緯を重ねて検討する （第 3 講）企業と社会の現代的解釈―企業は「トランスフォーメーション」できるのか、SDGs の背景を読み解く	事前	授業資料の確認（1.5h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4 講）企業の基本と株式会社制度の可能性と課題―責任ある企業は幻想なのか （第 5 講）ガバナンスの考え方と意義―支援と監視のメカニズムになりうるには	事前	授業資料の確認（1.5h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 4 週	（第 6 講）企業価値へのまなざし―企業は何によって評価されるべきなのか （第 7 講）非財務価値の創出と強化―それを高めるコミュニケーションの必要と意義とは	事前	授業資料の確認（1.5h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 5 週	（第 8 講）企業文化の理解と変革へのアプローチ―何をどの程度どのように変革するのか （第 9 講）企業の社会適応能力を高める―理念浸透からダイバーシティマネジメントまで	事前	授業資料の確認（1.5h）
		事後	ディスカッションの復習（2h） グループで事例研究と発表準備（22h）
第 6 週	（第 10 講）事例研究①－履修者による事例報告とそれに基づく理想の組織に関する討議 （第 11 講）事例研究②－前講の続き	事前	発表資料の確認（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）

第 7 週	（第 12 講）事例研究③－前講の続き （第 13 講）事例研究④－前講の続き	事前	発表資料の確認（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 8 週	（第 14・15 講）総括討議―理想の組織論、現代社会における組織の役割と要点	事前	過去講義資料とノートの確認（3h）
		事後	ディスカッションの復習（1.5h） 最終レポート課題の作成（10h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は基礎知識の習得を狙いとする講義と、派生する問いに関するディスカッションを中心に進行する。なお、重点的に取り扱う具体的なテーマについては、履修者の関心を踏まえて調整していく。なお、第 6 週及び第 7 週は、履修者グループによる発表があるため、発表班は事前の事例調査及び分析作業が発生する予定。

教科書・参考書

教科書は指定しない。
参考書：佐藤真久・広石拓司（2020 年）『SDGs 人材からソーシャル・プロジェクトの担い手へ 持続可能な世界に向けて好循環を生み出す人のあり方・学び方・働き方』，みくに出版.

評価方法

① 講義中もしくは Teams でのディスカッションへの貢献
② 最終課題の提出（文字数は 3,000 文字程度、提出期限は第 8 週後 2～3 週間程度）
以上、①（40%）、②（60%）の総合評価により判定する。

その他の重要事項

担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回の授業で説明する。
ハイフレックス形式にて開講するが、教員の都合等により一部オンラインのみで開講する可能性がある。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	－	○	－	－

授業名称	社会学基礎理論			科目コード	CDPA0115L
担当教員	富井 久義	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	水 B
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、社会学の基本的な理論や視座、発想法を理解し、社会学的想像力を身につけることにある。

社会課題や経営課題に取り組み、実行可能な解決策を見いだしていくためには、その課題の社会的な位置づけを見定める俯瞰的な視点や、課題を多角的にとらえる複眼的思考が求められる。「より大局的な歴史的場面を、個人ひとりひとりの内的な精神生活や外的な職業経歴によってそれがどのような意味をもっているのか」（C. W. Mills, 1959＝2017: 19）を考える社会学的想像力を身につけることは、そうした能力を身につける一助となるだろう。

本授業では、主要な社会学理論をその射程の別に取り上げるなかで、社会学的想像力の多様な発揮のしかたについて検討し、履修者の関心や課題に近しい社会学理論を習得することをめざす。

到達目標

① 社会学的想像力について理解し、みずから関心をもつ社会課題や経営課題に関連する事例に関連づけて説明することができる。
② 社会学の基本的な理論をもちいて、みずから関心をもつ世の中のさまざまな事象を解釈・説明することができる。
③ みずから関心をもつ社会課題や経営課題に関連することがらについて、社会学の理論をもちいて説明することができる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）社会学とはなにか（イントロダクション） ――社会学、社会学的想像力、近代社会	事前	シラバスを読み課題や評価方法等についての疑問点をまとめる（1h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）、予習・復習スケジュールの割当検討（1h）
第 2 週	（第 2・3 講）初期の理論家に学ぶ社会学的視座 ――ウェーバー、デュルケム、マルクス	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）
第 3 週	（第 4・5 講）ミクロ・レベルに照準する社会学の基礎理論 ――象徴的相互作用論、相互行為、自己	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）
第 4 週	（第 6・7 講）メゾ・レベルに照準する社会学の基礎理論 ――官僚制、中間集団、社会関係資本	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）
第 5 週	（第 8・9 講）マクロ・レベルに照準する社会学の基礎理論 ――機能主義、顕在的機能と潜在的機能、 中範囲の理論	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）、課題発表のテーマ検討（1.5h）
第 6 週	（第 10・11 講）社会学は社会変動をいかにとらえているのか ――葛藤理論、テクノロジーと社会変動、 変化への意志と社会変動	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）、課題発表の構成検討（1.5h）

第 7 週	（第 12・13 講）社会学は時間と空間をいかにとらえているのか ――歴史、記憶、都市	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）
第 8 週	（第 14・15 講）課題発表と討論 ――関心のある社会課題／経営課題についての社会学の概念をもちいた考察の発表と討論	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、課題発表準備（8h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、発表者へのフィードバックシートの記入（2h）、授業内容の復習（1.5h）

授業の進め方と方法

本授業は、第 2 週目以降、2 講連続で実施する。

第 2 週から第 7 週の授業は概ね、前回のふりかえり、授業のねらいの確認、講義（話題提供）、ディスカッション（演習課題）で構成される。教員が用意するスライド資料に沿って進行する。質問は随時、発言またはチャットで受け付ける。ディスカッションは、毎週のテーマに関連する主題について、グループで検討して全体発表をする方法か、各自コメントペーパーに記入して教員が次週に紹介する方法をとる。毎週の授業終了時には、授業で学んだこと、意見・質問・感想、演習課題への貢献を記すコメントペーパーの提出を求める。コメントペーパーには教員からフィードバックのコメントを返す。このうち重要なものについては、次週の授業冒頭のふりかえりの際に紹介する。

第 8 週については、関心のある社会課題／経営課題について社会学の概念をもちいた考察をする発表を各履修者に求め、相互に討論するかたちで進行する。

教科書・参考書

【教科書】指定しない

【参考書】

- アンソニー・ギデンズ，2006＝2009,『社会学 第五版』而立書房.
- 長谷川公一ほか，2019,『社会学 新版』有斐閣.
- 田中正人編，2019,『社会学用語図鑑』プレジデント社.

＊このほか、初回および毎回の授業で参考書・参考資料を提示する。

評価方法

- コメントペーパーの内容　30%
- ディスカッションへの貢献　30%
- 第 8 週の課題発表の内容　40%

その他の重要事項

担当教員のオフィスアワーおよび授業時間外での相談方法については、第 1 週の授業で説明する。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	－	－	－

授業名称	情報・文化・コミュニケーション			科目コード	CDPA0103L
担当教員	橋本 純次	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	土 A（3・4 限）
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、履修者が「情報」・「文化」・「コミュニケーション」という 3 種類のキーワードと、それに紐付く学術的知見から現代社会を分析するための知見を身につけることにある。複雑な現代社会において人間やコミュニティ、組織などのあり方について考えるためには、複眼的・学際的な視点・思考が必要不可欠である。本授業では具体的に、「情報化社会とはどこから来て、なにをもたらしたのか」、「現代の文化にはどのような特徴があるか、そもそも文化とはなにか」、「コミュニケーションのあり方はこれまでどのように変容し、今後どうなっていくのか」といったテーマについて、関連する諸科学の理論的蓄積を参照しつつ検討していく。

到達目標

① 履修者が情報・文化・コミュニケーションに関連する理論や視点を説明できるようになる。
② 履修者が他者との対話に基づき現代社会の諸側面について検討できるようになる。
③ 履修者が修得した理論や視点をもとに現代社会を説得的に分析できるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）ガイダンス：「情報・文化・コミュニケーション」と「ネガティブ・ケイパビリティ」	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業での質問事項の検討（0.5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 2 週	（第 2 講）「AI 美空ひばり」から考える情報技術による人間の擬似蘇生と倫理的課題 （第 3 講）ネット炎上と誹謗中傷の現状と課題：マスメディアが発端となった炎上事例を端緒として	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h） ビデオ視聴（0.5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4 講）学校教育における情報教育・メディアリテラシー教育の変遷と社会人の身につけるべき能力 （第 5 講）情報社会が民主主義にもたらしうる変化とその限界：電子投票を中心に	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 4 週	（第 6・7 講）文化と社会の緊張関係：炎上事例から考える現代アートと表現の自由	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 5 週	（第 8 講）「文化の定義」とその捕捉可能性 （第 9 講）文化を対象とする研究領域から捉える企業文化・組織文化・コミュニティの文化	事前	授業資料の確認（1.5h） 「文化の定義」の提出（1h） ディスカッション準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 6 週	（第 10 講）コミュニケーションの理論：社会構成主義から捉える「会話」と「対話」の異同を中心に （第 11 講）対面コミュニケーションと遠隔コミュニケーションの「ふさわしさ」：「空気を読む」とはなにか	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h） ビデオ視聴（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 7 週	（第 12・13 講）関心の持たれづらい領域における公共コミュニケーション：リスク・コミュニケーションを手がかりに	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）

第 8 週	（第 14・15 講）情報・文化・コミュニケーションの結節点：総合ディスカッション	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h） 最終レポート課題（15h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義とディスカッションを中心に進行する。
また履修者は、学んだ内容が自らの実務とどう関係するか、どのように役立つ可能性があるか、といった事柄についてコメントペーパーに記入し、毎回の授業の最後に提出する。

教科書・参考書

教科書は指定しない。
参考書：井川充雄・木村忠正編著（2022）『入門メディア社会学』，ミネルヴァ書房.
辻泉ほか（2018）『メディア社会論』，有斐閣ストゥディア.
西垣通・伊藤守編（2015）『よくわかる社会情報学』，ミネルヴァ書房.

評価方法

① 毎回の授業での議論への参加とコメントペーパーの提出
② 最終レポート課題
以上、①（50%）、②（50%）の総合評価により判定する。

その他の重要事項

担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回の授業で説明する。
本授業は第 1 週と第 8 週をハイフレックス、第 2 週から第 7 週をオンラインで実施する。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	−	−	−

授業名称	現代社会論			科目コード	CDPA0117L
担当教員	富井 久義	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	木 A
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、現代社会における教育や人材育成、コミュニケーションの位置づけを明らかにするために、社会学の主要な概念と方法をもちいて現代社会の分析をおこなうことである。

現代社会はどのような社会なのか。どのようにすれば現代社会を分析的にとらえることができるのだろうか。現代社会について理解を深めることは、私たちが生きる社会についての複眼的な視座を身につけ、解像度を高めていくことにつながる。そしてそれは、履修者各自が関心を有する社会課題や経営課題についての社会的位置づけを明らかにする一助となる。

本授業では、社会階層・グローバル化・資源の分配をめぐる議論を中心に、現代社会を論じる社会学の議論を検討することで、履修者各自が現代社会を論じる視座を身につけることをめざす。

到達目標

① 現代社会を分析するための主要な概念や発想法を理解し、説明することができる。

② 現代社会を分析する議論について、みずから関心をもつ社会課題や経営課題に関連づけて説明することができる。

③ 現代社会を分析する議論について、分析視角、知見、課題を正しく読解することができる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）現代社会をとらえるための視座と方法① ——イントロダクション	事前	シラバスを読み課題や評価方法等についての疑問点をまとめる（1h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）、予習・復習スケジュールの割当検討（1h）
第 2 週	（第 2・3 講）現代社会をとらえるための視座と方法② ——現代社会をめぐる理論と社会学の調査方法	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）
第 3 週	（第 4・5 講）少子高齢化の進展と人びとの行動・意識の変容 ——家族の戦後体制、同類婚、少子化対策	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）
第 4 週	（第 6・7 講）グローバル化と移動 ——再帰的近代化、マクドナルド化、 観光のまなざし	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）
第 5 週	（第 8・9 講）クリエイティブ・クラスと知識 ——クリエイティブ資本論、知識社会、格差社会	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）、課題発表文献の選択（2h）
第 6 週	（第 10・11 講）福祉国家をめぐる議論の展開と資源の分配 ——福祉国家論、資源配分様式、 ボランティア・NPO	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）、課題発表文献の精読（3h）
第 7 週	（第 12・13 講）地域をとらえるまなざしと実践 ——地方創生、地域おこし、地（知）の拠点	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、授業タイトル・キーワードの予習（1.5h）
		事後	コメントペーパー記入（0.5h）、授業内容の復習（1.5h）

第 8 週	（第 14・15 講）現代社会論を読む――課題発表と討論	事前	フィードバックコメントの確認（0.5h）、課題発表準備（6h）
		事後	コメントペーパー（発表へのリアクション含む）記入（2.5h）、授業内容の復習（1.5h）

授業の進め方と方法

本授業は、第 2 週目以降、2 講連続で実施する。

第 2 週から第 7 週の授業は概ね、前回のふりかえり、授業のねらいの確認、講義（話題提供）、ディスカッション（演習課題）で構成される。教員が用意するスライド資料に沿って進行する。質問は随時、発言またはチャットで受け付ける。ディスカッションは、毎週のテーマに関連する主題について、グループで検討して全体発表をする方法か、各自コメントペーパーに記入して教員が次週に紹介する方法をとる。毎週の授業終了時には、授業で学んだこと、意見・質問・感想、演習課題への貢献を記すコメントペーパーの提出を求める。コメントペーパーには教員からフィードバックのコメントを返す。このうち重要なものについては、次週の授業冒頭のふりかえりの際に紹介する。

第 8 週ついては、各履修者の関心に近い現代社会についての論文について、その分析視角・知見・課題等を発表し、討論をおこなうかたちで進行する。

教科書・参考書

【教科書】指定しない

【参考書】

- 本田由紀編，2015,『現代社会論』有斐閣.
- アンソニー・ギデンズ，2006＝2009,『社会学 第五版』而立書房.
- 長谷川公一ほか，2019,『社会学 新版』有斐閣.

＊このほか、初回および毎回の授業で参考書・参考資料を提示する。

評価方法

- コメントペーパーの内容　30%
- ディスカッションへの貢献　30%
- 第 8 週の課題発表の内容　40%

その他の重要事項

担当教員のオフィスアワーおよび授業時間外での相談方法については、第 1 週の授業で説明する。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	－	－	－

授業名称	企業理念・経営哲学			科目コード	CDPB0201L
担当教員	広木 隆	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	土 B（3・4 限）
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、履修者が「企業」「理念」「経営」「哲学」という 4 種類のキーワードをベースとして、これらに紐付く複眼的な見地から現代社会を分析するための知識を身につけることにある。これらのワードは授業名の表記にもある通り、「企業理念」・「経営哲学」と組み合わされた言葉として普及している。しかし、当たり前のことだが、「企業」とは何かを語らずに、その「理念」を語ることはできない。同様に、「経営」とは何かを知らずして、その「哲学」を議論しても無意味であろう。それゆえ、本授業では「企業」「理念」「経営」「哲学」とはそれぞれ何かという原点に立ち返って講義を始める。そうしたベーシックな議論に加えて、企業や経営は「生き物」であるという認識に立ち、最新の時事問題にもフォーカスしながら授業を進めていく。当分野における第一人者を招くなど外部講師による講演も行う予定である。ややもすると「きれいごと」になりがちな「理念/哲学」について、企業経営にとっての本質的な意義を議論することが本授業の主眼である。
本授業の担当教員は 35 年間にわたり日本の上場企業の企業価値についての調査・研究・分析を行ってきた。その知見を活かして他にないリアルなケーススタディを提示する。企業においては、素晴らしい企業理念・経営哲学があってもそれをすべてのステークホルダーに伝え、共有し、さらに共感を得ることが重要である。それを成し得る「コミュニケーション・デザイン」についても議論する。

到達目標

① 履修者が企業理念や経営哲学について適切な捉え方を理解できるようになる。
② 履修者が企業の社会的な存在意義について理解し、具体的に言語化できるようになる。
③ 履修者が自ら所属する組織に対して訴求するべき提言をまとめられるようになる。
④ 履修者が自ら所属する組織のすべてのステークホルダーに対して企業理念や経営哲学について的確に語り相互理解を得られるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）ガイダンス： 本授業のアウトラインと特徴	事前	シラバスの精読（1h） 授業での質問事項の検討（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 2 週	（第 2 講）大きな舞台装置としての資本主義 （第 3 講）「企業」とは何か「企業理念」とは何か	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4 講）理念・哲学の見地から企業経営を考える （第 5 講）経営哲学とリーダーシップ	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 4 週	（第 6 講）パーパス経営：パーパスが求められる時代背景 パーパス、ビジョン、ミッション、バリュー （第 7 講）ケーススタディ・前半の総括	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 5 週	（第 8 講）渋沢栄一『論語と算盤』を読む （第 9 講）『論語と算盤』から導出される企業理念/経営哲学	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 6 週	（第 10 講）（第 11 講）理念/哲学をいかに語り、伝えるか：「ストーリー」としての統合報告書の分析	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）

第 7 週	（第 12 講）外部講師による講演： 企業経営者から理念・哲学について聞く （第 13 講）外部講師の講演についての考察と議論	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 8 週	（第 14 講）理想と現実、課題、チャレンジ （第 15 講）ケーススタディ・総合議論～総括	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h） 最終レポート課題（16.5h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義とディスカッションを中心に進行する。また履修者は、学んだ内容が自らの実務とどう関係するか、どのように役立つ可能性があるか、といった事柄についてコメントペーパーに記入し、毎回の授業の最後に提出する。状況に応じてグループワーク等を行い、各自でケーススタディ作成に取り組む。

教科書・参考書

教科書は指定しない。

参考書：アダム・スミス, 高哲男訳（2013）『道徳感情論』, 講談社学術文庫.

トーマス・セドラチェク, 村井章子訳（2015）『善と悪の経済学―ギルガメシュ叙事詩』, 東洋経済新報社.

渋沢栄一（2008）『論語と算盤』, 角川ソフィア文庫.

ユベール・ジョリー, 樋口武志訳（2022）『THE HEART OF BUSINESS「人とパーパス」を本気で大切にする新時代のリーダーシップ』, 英治出版.

評価方法

① 毎回の授業での議論への参加とコメントペーパーの提出、ケーススタディへの取り組み

② 最終レポート課題

以上、①（50%）、②（50%）の総合評価により判定する。

その他の重要事項

担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回の授業で説明する。

2022 年度科目との読替え

CDPB0201L　次世代社会の企業理念・経営哲学

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	○	−	−

授業名称	コーポレート・コミュニケーション			科目コード	CDPB0202L
担当教員	二木 真	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	土 A（1・2 限）
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、企業の経営戦略におけるコミュニケーションの役割と重要性を理解し、ステークホルダー（利害関係者）との良好な関係を築き、レピュテーション（評判）を向上させるための広報戦略構築について学修することにある。

商品の機能的価値や価格だけでモノが売れる時代は終焉を向かえ、顧客はその企業への信頼や愛着といったエンゲージの強さを重視する傾向が強まっている。また、従来型の企業発信による広告プロモーションに加え、メディアやインフルエンサー等による第三者発信や信頼する人からのクチコミなどの情報が消費行動を促すきっかけとなっている。企業経営においては、いかに環境変化に対応し、広報・宣伝・CSR など社内のコミュニケーション機能を融合させ、発信力を高めることが出来るかが課題となっている。同時に、コミュニケーション部門に対しては、従来の「話題づくり」の発信に加え、マネジメント視点での「価値づくり」の発信が求められている。

本授業では、企業が直面するコミュニケーション課題について、講師と履修者各々の知識・経験・視点を共有し、共に「気づき、学び、考える」機会を提供したい。また、先行研究（論文）の学習、企業の具体的実践事例（ケーススタディ）、自治体のコミュニケーション戦略（地域活性・観光等）等についてディスカッションやゲストスピーカーとのセッションなどを通じた多面的な指導を行う。

到達目標

① 履修者が、コーポレート・コミュニケーションの概念と企業経営における使命（ミッション）を理解する。
② 履修者が、企業価値向上を目的とする戦略思考のコミュニケーション手法について構想できる。
③ 履修者が、企業の経営戦略に基づく、基本的なコミュニケーション戦略の策定能力を身につける。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）オリエンテーション ポストコロナに求められるコミュニケーションとは	事前	シラバスの精読（0.5h） 参考文献の概観（0.5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h）
第 2 週	（第 2・3 講）コーポレート・コミュニケーションとは何か コーポレート・コミュニケーションのミッションを考える	事前	参考文献の精読（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 授業内容の復習・参考論文精読（2h）
第 3 週	（第 4・5 講）戦略的コミュニケーション 戦略的とは何か、企業理念・ビジョンとコミュニケーション	事前	参考文献の精読（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 授業内容の復習・参考論文精読（2h）
第 4 週	（第 6・7 講）インターナル・コミュニケーション ブランドパーパスと社員のエンゲージメントの関係	事前	参考文献の精読（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 授業内容の復習・参考論文精読（2h）
第 5 週	（第 8・9 講）ブランド・コミュニケーション ブランドとレピュテーションの関係を考える	事前	参考文献の精読（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） セッション・授業内容の復習（3h）
第 6 週	（第 10・11 講）シティ・プロモーション 自治体広報・PR のあり方と地域コミュニケーションを考える	事前	参考文献の精読（2h） 中間レポート作成（10h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） セッション・授業内容の復習（3h）
第 7 週	（第 12・13 講）話題づくりから価値づくりの広報へ 経営戦略に基づく、これからの広報・PR のあり方	事前	参考文献の精読（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 授業内容の復習・参考論文精読（2h）

第 8 週	（第 14・15 講）プレゼンテーション発表とまとめ 履修者によるプレゼンテーションと講評、授業の総括	事前	プレゼン資料作成（10h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 総復習及び参考論文精読（5h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義とディスカッション、プレゼンテーション等による参加型の構成とする。また、実践的な理解を深めるため、適宜、企業や自治体（コミュニケーション領域）の最前線で活躍するキーマンをゲストに迎え、履修者とのセッションを実施する。

教科書・参考書

教科書は使用しない。参考書は以下の通り。その他、適宜講義にて紹介する。

・社会情報大学院大学編（2016）『広報コミュニケーション基礎』，宣伝会議.

・企業広報戦略研究所編（2020）『新・戦略思考の広報マネジメント』，日経 BP.

・ポール・A・アージェンティ（2019）『コーポレート・コミュニケーション』，東急エージェンシー.

評価方法

・講義中のディスカッションでの発言内容などの貢献度・ミニットペーパーの内容（50%）

・期中レポート課題（20%）

・期末プレゼンテーション課題（30%）

の総合評価。

その他の重要事項

初回の授業（ガイダンス）で、講義の進め方・ゲストスピーカー・評価方法等について説明する。合わせて履修者の関心領域についても確認のうえ、講義内容に可能な限り反映してゆく。

各回の講義を欠席する場合は、Teams 等を通じて事前に連絡することが望ましい。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	○	○	−

授業名称	リスク・マネジメント			科目コード	CDPB0206S
担当教員	白井 邦芳	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	金 A
年間開講数	1 回	授業種別	演習	授業区分	選択

授業の目的

近年、ソーシャルメディアの急速な発展に伴い、風評被害や憶測、ディープフェイクニュースが横行し、不祥事や災害後の対応の失敗も重なって、ガバナンスへの批判が高まり、大きな危機に結びつく事例も少なくない。同時にステークホルダーの多様化・複雑化によるリスクコミュニケーションの重要性も高まっている。本授業の目的は、その本質や基礎を学ぶためも、自然災害、人為的自己、事件、不祥事を含めた現代社会のリスクの諸相を学ぶことにより、リスクマネジメントの専門領域に関する十分な知識と実践力を身につけ、専門的な見識を醸成することにある。

到達目標

① 履修者がリスクマネジメントの基本的知識を運用し、個別リスク事象に対するリスクイベントの選択、ステークホルダーマネジメント、リスクの全体的俯瞰（ヘリコプタービュー）、プライオリティ・ジャッジメント（優先行動の取捨選択）を習得する。

② 履修者がリスクイベントに対して Reactive（ヒヤリハッと）型から Proactive（予兆管理）型の対応を実践でき組織に提言できる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）ガイダンス（講義計画とリスクマネジメントの基礎知識）	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）
第 2 週	（第 2・3 講）リスクマネジメントと危機管理の概念（講義＋討議）	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（4h）
第 3 週	（第 4・5 講）ソーシャルメディア社会における情報管理の重要性（討議＋講義）	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（4h）
第 4 週	（第 6・7 講）有事のステークホルダーマネジメント（討議＋講義）	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（4h）
第 5 週	（第 8・9 講）自然災害における事例検証（討議＋講義）	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（4h）
第 6 週	（第 10・11 講）事故における事例検証（討議＋講義）	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（4h）
第 7 週	（第 12・13 講）事件における事例検証（討議＋講義）	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（4h）
第 8 週	（第 14・15 講）リスクコミュニケーションの役割と効果（討議＋講義）、総括講義とレポート課題について	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出、レポート作成（10h）

授業の進め方と方法
上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義を主として、状況に応じて履修者参加やクイズ形式で行う。事例研究、グループ研究も随時、取り入れる。テーマによりゲスト講師による特別授業を行う。
教科書・参考書
教科書は指定しない。 参考書：白井邦芳（2006）『ケーススタディ 企業の危機管理コンサルティング』，中央経済社. 小川真人・白井邦芳（2011）『会社の事件簿！危機管理 21 の鉄則』，東洋経済新報社. リスクマネジメント協会（2015）『リスクの認識力を高める リスクマネジメント基礎講座』，一般財団法人リスクマネジメント協会. その他の参考書は適宜授業内で案内する。
評価方法
① 事前に配布する授業資料の読み込みと、毎回行うクイズなどに対する回答内容を評価する。 ② 毎回の授業におけるトピックス、ディスカッション、模擬討議等の参加度を評価する。 ③ 最終レポート課題の提出を求める。 以上、①（40%）、②（30%）、③（30%）の総合評価により成績を評価する。
その他の重要事項
① 初回の授業で、オフィス・アワーについて説明する。 ② 遅刻や欠席をする場合は、メール等を通じて事前に連絡すること。 ③ 本授業に関する疑問点や不明点は、担当教員へメールで確認すること。 本授業は第 1 週と第 8 週をハイフレックス、第 2 週から第 7 週をオンラインで実施する。
2022 年度科目との読替え
なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	−	○	−

授業名称	公共政策			科目コード	CDPC0203S
担当教員	橋本 純次	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	火 A
年間開講数	1 回	授業種別	演習	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、公共政策に関連する基礎的な理論を修得するとともに、具体的な公共政策の分析を通じて、現代社会における公共政策の課題とその解決策について検討することにある。本授業では、受講者が自らの関心に応じて選択した具体的な政策分野に関する調査を行い、解決策を検討するグループ課題および個人課題に取り組む。

公共政策に関する課題解決のプロセスは他業種・他分野においても応用可能なものであり、本授業は法学・政治学・公共政策学の初学者による履修を歓迎する。

到達目標

① 履修者が、公共政策に関する基礎的な理論や視点について説明できるようになる。
② 履修者が、政策分析のための技法を実践的に身につける。
③ 履修者が、政策形成プロセスの疑似体験を通じて、公共政策のあり方について考える能力を身につける。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）公共政策とはなにか／政策過程論の基礎：オリエンテーション	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業での質問事項の検討（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 指定された文献の精読（1h）
第 2 週	（第 2 講）高校「公共」から考える「公共性」 （第 3 講）法学・行政法の基礎	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4・5 講）公共政策はどのように展開されるかⅠ：政策類型／政策主体／政策目標／政策手段	事前	授業資料の確認（1.5h） 指定された文献の精読（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 4 週	（第 6・7 講）公共政策のグランドデザイン：「都市の時間政策」と「高等教育のグランドデザイン答申」を端緒として	事前	授業資料の確認（1.5h） 指定された文献の精読（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 5 週	（第 8・9 講）政策調査の技法と実践：行政文書の調査法とオーラルヒストリーを中心に	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 6 週	（第 10・11 講）グループプレゼンテーション：具体的な政策分野における問題点の指摘	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 7 週	（第 12・13 講）公共政策はどのように展開されるかⅡ：政策決定／政策評価／費用便益分析（CAB）／EBPM	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 8 週	（第 14・15 講）個人プレゼンテーション：具体的な政策分野における問題点と改善策の指摘	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）

授業の進め方と方法
上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義とディスカッションにより進行する。第 5 週については実践形式で政策調査の方法論を修得する。また、公共政策に関する理解を深めるため、履修者は以下二種類の課題について、調査および発表資料の作成を行う。 ● 第 5 週：特定の政策分野について、① 概要を把握し、② 政策課題を指摘する（グループ発表）。 ● 第 7 週：受講者個人の選択した政策分野について、① 概要を把握し、② 政策課題を発見し、③ 解決策を提言する（個人発表）。
教科書・参考書
教科書は指定しない。 参考書：秋吉貴雄ほか（2020）『公共政策学の基礎［第 3 版］』，有斐閣ブックス. 山本哲三（2017）『公共政策のフロンティア』，成文堂. 中央教育審議会（2020）「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」
評価方法
① 毎回の授業での議論への参加とコメントペーパーの提出 ② グループプレゼンテーションでの発表 ③ 個人プレゼンテーションでの発表 以上、①（30%）、②（30%）、③（40%）の総合評価により判定する。 ※ 個人プレゼンテーションに出席できない場合は、別日で調整する。
その他の重要事項
担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回授業で説明する。 本授業は第 1・6・8 週をハイフレックス、第 2・3・4・5・7 週をオンラインで実施する。
2022 年度科目との読替え
なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	–	–	–

授業名称	公共コミュニケーション			科目コード	CDPB0204S
担当教員	牧瀬 稔	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	土 B（1・2 限）
年間開講数	1 回	授業種別	演習	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、公的団体の中でも、地方自治体や地方議会を中心に、住民とのコミュニケーションの現状を把握し、その意義や今後の可能性を考察することにある。もちろん考察するだけではなく、フィールド自治体を設定し政策提言をすることで、履修生が何かしらの結論（政策づくり）を導出することも目的である。そうすることで、履修生が取り組む調査研究の洞察力や構想力等を深めていく。

到達目標

① 履修者が政策形成のための基本的視点を修得できるようになる（政策力）。
② 履修生が公共コミュニケーションの背景や具体的事例の理解を深められるようになる（考察力）。
③ 履修生が公共コミュニケーションの方向性と考察を経て提言する力を身につけるようになる（提言力）。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）ガイダンス、公共コミュニケーションを学ぶ意義	事前	シラバスの精読（1h） 授業での質問事項の検討（1h）
		事後	授業の復習（2h）
第 2 週	（第 2 講）地方自治体の広報・広聴の取組み概要 （第 3 講）地方自治体の政策づくりの基本的視点	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 3 週	（第 4 講）地方議会の広報・広聴の取組み概要 （第 5 講）地方自治体の政策づくりの技法	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 4 週	（第 6 講）事例研究：公共コミュニケーションの実際（ゲスト講師・予定） （第 7 講）事例研究をもとに意見交換、討論	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 5 週	（第 8 講）シビックプライドの経緯と現在 （第 9 講）履修生の政策提言案の発表（中間発表）、意見交換	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h） 発表資料準備・作成（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 6 週	（第 10 講）フィールドとする自治体の公共コミュニケーションの研究 （第 11 講）履修生の政策提言案の発表（中間発表）、意見交換	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h） 発表資料準備・作成（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 7 週	（第 12 講）住民参加と協働の現状と課題 （第 13 講）履修生の政策提言案の発表（中間発表）、意見交換	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h） 発表資料準備・作成（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 8 週	（第 14 講）フィールド自治体への政策提言 （第 15 講）本授業のまとめ	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h） 最終発表資料準備・作成（2h）
		事後	本授業全体の復習（3h） 最終発表資料の修正（5h）

授業の進め方と方法
上記目的・到達目標を達成するため、最終的に本授業は地方自治体に対して履修生が政策提言を行う。過年度は、島本町（大阪府）、磐田市（静岡県）等の市長からテーマ（課題）を提示していただき、最終回に履修生が直接、市長、副市長等に対して政策提言を行った。今回も地方自治体と連携して政策提言を進める予定である。 毎回の授業は、原則として講師による講義と意見交換（ディスカッション）の双方向性を基本とする。 授業計画（15 講）の前半は講師の講義をもとに、履修生と意見交換を中心に進める。実際に公共コミュニケーションを推進している当事者をゲスト講師として招き、共同で講義を実施する。後半は、フィールドとした自治体から提示されたテーマについて履修生が発表し、意見交換を中心に進める。 別講義「シティ・プロモーション」との関係を言及しておく。シティ・プロモーションは、地方自治体の「外」を対象としている。一方で本授業は地方自治体の「内」である住民等が中心となる。住民等が対象となるため、住民参加、協働に加え、政策づくりに関する内容も講義する。
教科書・参考書
教科書は指定しない。参考書は、下記のとおりである。 ・牧瀬稔（2021）『地域づくりのヒント 地域創生を進めるためのガイドブック』，社会情報大学院大学出版部 ・牧瀬稔ほか編（2020）『SDGs を実現するまちづくり』，プログレス ・牧瀬稔ほか編（2019）『シティプロモーションとシビックプライド事業の実践』，東京法令出版 ・牧瀬稔著（2017）『地域創生を成功させた 20 の方法』，秀和システム
評価方法
① 毎回の授業での議論の参加（30%） ② 中間的な政策提言資料（20%） ③ 最終的な政策提言資料（50%）
その他の重要事項
担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回の授業で説明する。 本授業は第 1 週と第 8 週をハイフレックスとする。第 2 週から第 7 週をオンラインで実施する。なお、ゲスト講師を招致する回は、ゲスト講師の希望によりハイフレックスになることがある（改めて授業でアナウンスする）。
2022 年度科目との読替え
事務局記入欄

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	○	○	−

授業名称	サステナビリティ・コミュニケーション			科目コード	CDPB0211L
担当教員	伊吹 英子	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	土 B（1・2 限）
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、履修者が、サステナビリティ（社会の持続可能性）を取り巻く外部動向変化やステークホルダーの価値観の変容への理解を深めると共に、リスクヘッジと機会獲得の双方の観点からサステナビリティ・コミュニケーションの目的や方法論について実践面で活用できる知見と視座を獲得することである。

近年、サステナビリティを取り巻く外部動向は大きく変化し、経営の中核テーマに組み入れられるようになった。サステナビリティは一見コストになりがちで、経営・事業計画といった管理サイクルとの時間軸の違いから、なかなか理解が進まず、組織内に組み込まれにくいという特性もある。しかし、企業等への社会からの期待・要請が高まるなか、サステナビリティを経営に組み入れることは今後必須となる。組織内外のコミュニケーション活動や、ブランディングやマーケティング、従業員エンゲージメント、IR などの各経営テーマにおけるコミュニケーションのゴールを達成するためにサステナビリティを戦略的に活用していくこともできる。

到達目標

① 履修者が、サステナビリティ（社会の持続可能性）を中心テーマとして、近年注目が高まっている諸テーマ（ESG、SDGs、CSV、CSR、パーパス、気候変動 TCFD 等）への正しい知識・見識を身に付ける。

② 履修者が、企業をはじめとする組織を取り巻く多様なステークホルダーとのコミュニケーションにおいて、サステナビリティの観点から留意すべき（もしくは、戦略的に活用すべき）ポイントを理解する。

③ 履修者が、ケースに基づく討議を踏まえて、実際のサステナビリティ・コミュニケーションに関わる課題や方法論など、実践的な場面で応用できるような思考力・判断力を高める。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）サステナビリティとは何か？なぜ今、サステナビリティなのか？　～サステナビリティ概論～	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業での質問事項の検討（0.5h）
		事後	ディスカッションの復習（2h） 関連書籍・レポート等*の読書（2h） *履修者の関心に合わせて各自選択
第 2 週	（第 2 講）サステナビリティ経営実践の枠組みとサステナビリティ・コミュニケーションの位置づけ・目的・先進企業動向 （第 3 講）講義を踏まえた意見共有・ディスカッション（サステナビリティ経営の課題・位置づけ・意義・課題とは？）	事前	授業での質問事項の検討（1h）
		事後	ディスカッションの復習（2h） 関連書籍・レポート等の読書（2h）
第 3 週	（第 4 講）「投資家」の変化と期待されるコミュニケーション－ESG 投資の動向を踏まえて、統合思考・統合報告 （第 5 講）講義を踏まえた意見共有・ディスカッション （投資家の真の期待とは？将来の企業経営へ及ぼす影響とは）	事前	授業での質問事項の検討（1h）
		事後	ディスカッションの復習（2h） 関連書籍の読書（2h）
第 4 週	（第 6 講）「「顧客」の変化と期待されるコミュニケーション－サステナビリティ＆パーパス重視のマーケティング・ブランディング、エシカル消費、CSV、SDGs （第 7 講）講義を踏まえた意見共有・ディスカッション（競争力を高められるか？市場特性の違い、CSV 戦略は成立するか）	事前	授業での質問事項の検討（1h）
		事後	ディスカッションの復習（2h） 関連書籍の読書（2h）

第 5 週	（第 8 講）「取引先」の変化と期待されるコミュニケーション－サステナブル調達の動向、求められる対応（調達方針・調達先へのコミュニケーション、情報プラットフォーム） （第 9 講）講義を踏まえた意見共有・ディスカッション（どこまで対応するか？ 企業成長につなげる可能性・方法は？）	事前	授業での質問事項の検討（1h）
		事後	ディスカッションの復習（2h） 関連書籍・レポート等の読書（2h）
第 6 週	（第 10 講）「従業員」の変化と期待されるコミュニケーション－エンゲージメント、理念経営、パーパス （第 11 講）講義を踏まえた意見共有・ディスカッション（求心力醸成のためのイコミュニケーションとは？ CSR コミュニケーションの役割とは？）	事前	授業での質問事項の検討（1h）
		事後	ディスカッションの復習（2h） 関連書籍・レポート等の読書（2h） 最終課題準備（10h）
第 7 週	（第 12 講）「SDGs」「気候変動」などの新たな展開への対応と期待されるコミュニケーション※トピックは変更可能性あり （第 13 講）講義を踏まえた意見共有・ディスカッション（SDGs や気候変動問題に関連して必要なコミュニケーションとは？）	事前	授業での質問事項の検討（1h）
		事後	ディスカッションの復習（2h） 関連書籍・レポート等の読書（2h） 最終課題準備（10h）
第 8 週	（第 14 講）総括：CSR コミュニケーションの課題と意義 （第 15 講）講義を踏まえた意見共有・ディスカッション（履修者によるレポート発表と相互意見共有、総括）	事前	授業での質問事項の検討（1h）
		事後	ディスカッションの復習（2h） 関連書籍・レポート等の読書（2h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は、毎回の授業を講義とディスカッションにより構成する。欠席をした履修者は、動画を視聴した上でコメントペーパーを提出する。

教科書・参考書

教科書は使用しないが、参考となる文献やレポートは授業内で、適宜紹介する。参考図書として、
・伊吹英子（2014）『新版 CSR 経営戦略:「社会的責任」で競争力を高める』，東洋経済新報社.
・伊吹英子・古西幸登（2022）『ケースでわかる 実践パーパス経営』，日本経済新聞出版.

評価方法

到達目標に掲げる観点を踏まえた上で、①本授業での議論への参加 、②本授業後半でのレポート課題（800 字）の提出内容による。以上、①（50%）、②（50%）の総合評価により判定する。

その他の重要事項

必要に応じて、授業時間外での質問・相談に応じる。本授業は、2 回程度（予定では、第 1 週、第 8 週）をハイフレックス、第 2 週から第 7 週をオンラインで実施する。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	－	○	○	－

授業名称	現代社会と人的資本			科目コード	CDPB0212L
担当教員	川山 竜二	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	木 B
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、現代社会の潮流と人的資本の関係性について理解することである。そのために本授業では、会計学上で議論されている「人的資本」の諸説だけでなく、社会学や経済学の知見を敷衍することで複眼的な観点から「人的資本」について理解すること目指す。本授業では、人的資本そのものの議論だけでなく、人的資本から能力開発や社会的投資国家まで、人的資本という考え方がどのように社会制度に影響を与えるのかという観点もふくめて考究することを予定している。

到達目標

① 履修者が現代社会と人的資本の基礎的な知識を身につけており、人的資本の考え方を理解することができる。
② 履修者が、本授業でとりあげる現代社会と人的資本の理論枠組みを理解し、すくなくとも２つの観点から現代社会と人的資本を説明することができる。
③ 履修者が現代社会の潮流と人的資本の関係性を捉えた上で、自らの所属している組織あるいは我が国における人的資本政策に対する提言ができる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	**（第 1 講）** *Positioning for the Journey* 本授業の探究の旅路を深めるとともに、現代社会においてなぜ人的資本が着目されるに至ったのかを検討する。	事前	シラバスを読み、参考文献リストを見て本授業の見取り図を描く（3h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h）
第 2 週	**（第 2・3 講）経済社会学** 現代社会と人的資本を論ずるにあたり、社会における経済システムあるいは労働についての知識を概観する。	事前	事前配布資料を読む（3h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） リサーチワーク（3h）
第 3 週	**（第 4・5 講）人的資本論概説** 人的資本に関わる諸学説について考究し、人的資本の考え方について議論する。	事前	事前配布資料を読む（3h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） リサーチワーク（3h）
第 4 週	**（第 6・7 講）労働経済学** 人的資本を労働経済学（とりわけシグナル理論との比較）の観点から概観する。	事前	事前配布資料を読む（3h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 総括討論に向けた資料探索（1h）
第 5 週	**（第 8・9 講）教育経済学** 人的資本を教育経済学の観点から概観する。あわせて認知資本主義論についても考究する。	事前	事前配布資料を読む（3h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 総括討論に向けた資料探索（1h）
第 6 週	**（第 10・11 講）能力開発論** 企業や組織における人的資本投資の一つとしての能力開発について、特に OJT と Off–JT の比較について考究する。	事前	事前配布資料を読む（3h） 総括討論に向けた資料探索（2h）
		事後	総括討論に向けた資料作成（2h） コメントペーパーの提出（1h）
第 7 週	**（第 12・13 講）社会的投資国家** 人的資本と社会的投資国家の関係性について概観し、今後の人への投資のありようについて考究する。	事前	事前配布資料を読む（3h） 総括討論に向けた資料作成（3h）
		事後	総括討論に向けた資料作成（3h） コメントペーパーの提出（1h）

第 8 週	（第 14・15 講）総括討論 人的資本にかかわる様々な議論において、履修者の問題関心から報告する。	事前	総括討論に向けた資料作成（10h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） リサーチワーク（3h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義法とグループワーク法ならびにペアワーク法を用いる。本授業については、それぞれの授業週でひとつのトピックを深く考究するため、90 分×２コマ連続で実施する。また、授業終了ごとにコメントペーパーを提出することを求め、履修者の関心を維持する。
※リサーチワークとは、本授業内容をもとにして履修者の関心に応じて研究活動を実践することである。

教科書・参考書

教科書は指定しない。それぞれの授業で Lecture Note を配布する。
以下、参考図書を列記する。
・マーク・グラノヴェター（2019）『社会と経済：枠組みと原則』，ミネルヴァ書房.
・伊藤邦雄編著（2006）『無形資産の会計』，中央経済社.
・ゲーリー・ベッカー（1976）『人的資本――教育を中心とした理論的・経験的分析』，東洋経済新報社.
・猪木武徳（2017）『モダン・エコノミックス 24　経済思想』，岩波オンデマンドブックス.
・ジョナサン・ハスケル（2020）『無形資産が経済を支配する』，東洋経済新報社.
・清家篤・風神佐知子（2020）『労働経済』，東洋経済新報社.
・三浦まり（2018）『社会への投資――〈個人〉を支える〈つながり〉を築く』，岩波書店.

評価方法

以下の観点ごとに評価し、100 点満点になるように換算する。
60 点を超えるものに単位を付与する。
１．授業ごとにコメントを書き提出を求める「コメントペーパー」（35%）
　本評価は、とくに到達目標の①と②の到達度を測るためのものである。
２．最終授業回でのディスカッションならびに発表（65%）
　本評価は、とくに到達目標の③の到達度を測るためのものである。

その他の重要事項

コンタクトならびにオフィスアワーについて
〇メールではなく、Microsoft Teams のチャット機能で連絡をすること（相談内容については問わない）。
〇授業 Team のタブにオフィスアワー予約ページを作成しているので、そちらから予約を取ること（予約優先）。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	－	－	－

授業名称	デジタル・コミュニケーション			科目コード	CDPB0209S
担当教員	渡邉 順也	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	月 A
年間開講数	1 回	授業種別	演習	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は理念を基軸にしたコミュニケーションの実現に必要な情報技術（IT）の理解と、それらを活用したデジタル・コミュニケーションの習得である。
企業活動においてデジタル・コミュニケーションは欠かすことのできないものとなった。また日常生活にもデジタル・コミュニケーションは深く浸透しており、インターネットやスマートデバイスの活用なしに生活者とコミュニケーションすることは難しい。本学で理念を基軸にしたコミュニケーションを学ぶためには、情報技術を全般的に理解し、実際にデジタル・コミュニケーションに落とし込む体験が有用である。

到達目標

① 履修者がデジタル・コミュニケーションの背景にある情報技術を理解すること。
② 履修者が企業・組織のコミュニケーションをデコンストラクションし、応用できるようになること。
③ 履修者がステークホルダーごとに適切なデジタル・コミュニケーションを構築できるようになること。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）オリエンテーション	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業での質問事項の検討（0.5h）
		事後	講義の復習（1h） 履修前アンケートへの回答（1h）
第 2 週	（第 2 講）情報と情報の表現 「情報」とは何か？ 「デジタル」とは何か （第 3 講）コンピュータの技術とハードウェア コンピュータを構成するハードウェアとその歴史	事前	ICT 関連トピックスの収集（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h） 講義・ミニワークショップの復習（2h）
第 3 週	（第 4 講）ソフトウェアとデータベース ソフトウェアとアルゴリズム、リレーショナルデータベース （第 5 講）ネットワーク ネットワークの基礎技術とインターネット	事前	ICT 関連トピックスの収集（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h） 講義・ミニワークショップの復習（2h）
第 4 週	（第 6 講）情報システムの開発と応用 情報システム開発のモデル、情報システムの応用事例 （第 7 講）デジタル・コミュニケーション演習①（模擬開発） WEB 構築ワークショップ	事前	ICT 関連トピックスの収集（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h） 講義・ミニワークショップの復習（2h）
第 5 週	（第 8・9 講）デジタル・コミュニケーションの最先端 ① 履修生の興味・関心に沿う実務家講師を招聘	事前	ICT 関連トピックスの収集（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h） 講義・ミニワークショップの復習（2h）
第 6 週	（第 10・11 講）デジタル・コミュニケーションの最先端 ② 履修生の興味・関心に沿う実務家講師を招聘	事前	ICT 関連トピックスの収集（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h） 講義・ミニワークショップの復習（2h）
第 7 週	（第 12 講）デジタル・コミュニケーションの応用 オウンドメディア、SNS、CRM・MA、検索エンジン （第 13 講）デジタル・コミュニケーション演習②（リサーチ） デジタル・コミュニケーションの事例リサーチ	事前	ICT 関連トピックスの収集（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（2h） 講義・ミニワークショップの復習（2h）

第 8 週	（第 14 講）デジタル・コミュニケーション演習③（発表） デジタル・コミュニケーションの事例リサーチ結果発表 （第 15 講）ラップアップ 全講義の振り返り、ミニテスト	事前	事例リサーチ発表準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 講義・ミニワークショップの復習（2h） 最終レポート課題（16h）

授業の進め方と方法
上記目的・到達目標を達成するため、本授業は、毎回の授業を講義とワークショップにより構成する。 また、適宜ゲスト講師を招聘して、より実践的なケーススタディを学ぶ。
教科書・参考書
下記に基づいた講義資料を毎講義後に配布する。 ・伊藤俊彦（2015）『情報科学基礎 -コンピュータとネットワークの基本』，ムイスリ出版. その他、参考文献を各回のテーマに応じて適宜紹介していく。
評価方法
講義およびグループ演習におけるプレゼンテーション（70 点）とテスト（30 点）による総合評価を行い、60 点以上を合格とする。
その他の重要事項
初回の授業で、オフィス・アワーについて説明する。 遅刻や欠席をする場合は、メール等を通じて事前に連絡すること。 本授業に関する疑問点や不明点については、担当教員までお問い合わせください。
2022 年度科目との読替え
なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	–	○	–

授業名称	マスメディア論			科目コード	CDPC0210L
担当教員	橋本 純次	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	木 B
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、現代社会の様々な場面において、マスメディアがどのような役割を担い、どのような機能を有し、どのように作用しているかという問題について検討するための道具を提供することにある。本授業ではとりわけ、われわれが普段メディアを通じて「あたりまえ」に受け入れているものの不自然さや恣意性を暴き出し、言語化し、克服するための思想と方法の集積である「メディア論」の領域において蓄積されてきた知見を扱う。こうした理論を学ぶうえでは、座学はもとよりそれらを実践的に活用するプロセスを内在化することが肝要である。したがって本授業では、履修者による毎回のディスカッションへの参加とともに、個人プレゼンテーションでの発表を求める。

到達目標

① 履修者が、マスメディアに関する知見を継続的にアップデートできるようになる
② 履修者が、マスメディアに関する基礎理論を修得する。
③ 履修者が、修得した理論に基づきマスメディアを分析するための方法を実践的に身につける。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）メディアとはなにか、マスメディアとはなにか	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業での質問事項の検討（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 指定された文献の精読（1h）
第 2 週	（第 2 講）メディアが前提とする社会：モダニティ・ポストモダニティ・リキッドモダニティ・ポストメディア論 （第 3 講）マスメディア研究の歴史と方法	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4・5 講）現代社会におけるマスメディアの「公共性」：構造的に変容する公共圏におけるマスメディアの使命と実情	事前	授業資料の確認（1.5h） 指定された文献の精読（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 4 週	（第 6 講）メディア・リテラシーの考え方：送り手と受け手の「循環構造」を中心に （第 7 講）インターネット時代のメディア・イベント：人はメディアを通じてなにを経験するのか	事前	授業資料の確認（1.5h） 指定された文献の精読（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 5 週	（第 8 講）インターネット時代のメディア・イベント（発表） （第 9 講）ナショナリズムとアイデンティティ：モバイル社会における'imagined community'と'banal nationalism'	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 6 週	（第 10 講）ナショナリズムとアイデンティティ（発表） （第 11 講）マスメディアとジェンダーに関わる諸問題をどのように捉えるか	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 7 週	（第 12 講）マスメディアとジェンダー（発表） （第 13 講）グローバルメディアとローカルメディア：'media scape'と法制度を手がかりに	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）

第 8 週	（第 14 講）グローバルメディアとローカルメディア（発表） （第 15 講）集中発表日	事前	授業資料の確認（1.5h） 課題への取り組み（5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は前後半で運営の方法を変更する。

・第 1 講から第 7 講までは、講義とディスカッションによりマスメディアに関する基礎理論の修得をはかる。

・第 8 講から第 15 講までは、上記に加え、履修者は下記 4 種類の課題に取り組む。うち任意の 2 種類以上については授業内で報告する。課題は以下の通りである。

- 第 8 講：具体的なメディア・イベントをひとつ取り上げ、その概要を説明したうえで、それがマスメディアにおいてどのように報じられ、人々に受容されたか論じてください。
- 第 10 講：日常的なテレビ・新聞による報道がナショナリズムを惹起しようとする具体例を提示し、講義のなかで紹介した方法により分析してください。
- 第 12 講：マスメディアが特定のジェンダー・バイアスを強化している具体的な事例をひとつ取り上げ、講義のなかで紹介した方法、あるいはその他の方法により分析してください。
- 第 14 講：任意のローカルメディアを選択し、どうすれば現代のメディア環境のなかで当該メディアの持続可能性を担保することができるか、具体的に提案してください。

教科書・参考書

教科書は指定しない。初回授業にて参考資料集を示す。

参考書：井川充雄・木村忠正編著（2022）『入門メディア社会学』，ミネルヴァ書房.

辻泉ほか（2018）『メディア社会論』，有斐閣ストゥディア.

評価方法

① 毎回の授業での議論への参加とコメントペーパーの提出

② 課題の提出

③ 個人プレゼンテーションでの発表（2 回以上）

以上、①（30%）、②（40%）、③（30%）の総合評価により判定する。

※ 個人プレゼンテーションに出席できない場合は、別日で調整する。

その他の重要事項

担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回授業で説明する。

本授業は第 1 週と第 8 週をハイフレックス、第 2 週から第 7 週をオンラインで実施する。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	–	–	–

授業名称	デジタル・シティズンシップ			科目コード	CDPB0213S
担当教員	橋本 純次	実施方法	一部オンライン	単位数	1 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	夏季集中	曜日	–
年間開講数	1 回	授業種別	演習	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、履修者が「デジタル・シティズンシップ」をめぐる基本的な考え方を修得するとともに，それが現代社会において注目される背景を理解することにある。そのため本授業では，情報倫理，情報哲学，社会情報学といった多様な観点から現代情報社会を分析するための視座を提供する。併せて、デジタル・シティズンシップ教育や情報教育の現状と課題についても解説し、情報社会の負の側面を克服するためにいかなる教育やコミュニケーションが必要かという点についても議論する。

到達目標

① 履修者が、情報社会の現状と社会情報学の意義について自身の言葉で説明できるようになる。
② 履修者が、デジタル・シティズンシップをめぐる歴史的展開に関する基礎知識を修得する。
③ 履修者が、デジタル・シティズンシップをめぐる教育のあり方について自らの考えを述べることができる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週 8/23（水）	（第 1・2 講）情報社会はいかにして理性を剥奪し，社会の分断をもたらすか	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業での質問事項の検討（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 指定された文献の精読（3h）
第 2 週 8/30（水）	（第 3・4 講）情報倫理と情報哲学 : 情報社会における共生とウェルビーイングの手がかりとしての社会情報学	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 3 週 9/6（水）	（第 5・6 講）教育機関における情報教育とデジタル・シティズンシップ教育の現状と課題	事前	授業資料の確認（1.5h） 指定された文献の精読（3h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 4 週 9/13（水）	（第 7・8 講）いかなるデジタル・シティズンシップ教育とコミュニケーションが情報社会の現状を克服しうるか	事前	授業資料の確認（1.5h） 指定された文献の精読（3h）
		事後	ディスカッションの復習（2h） コメントペーパーの提出（1h） 最終小レポートの提出（4h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義とディスカッションにより進行する。とりわけ第 4 週では履修者各自が調査に基づき資料を作成し，それに基づく全体討論を行う。

教科書・参考書

教科書は指定しない。

参考書 : 西垣通・伊藤守 編著（2015）『よくわかる社会情報学』，ミネルヴァ書房.
木村忠正（2018）『ハイブリッド・エスノグラフィー-NC 研究の質的方法と実践』，新曜社.
柴田邦臣（2019）『<情弱>の社会学ポスト・ビッグデータ時代の生の技法』，青土社.
岡野一郎（2022）『共生のための社会情報学』，農林統計出版.
common sense education ウェブサイト

評価方法

① 毎回の授業での議論への参加とコメントペーパーの提出
② 最終プレゼンテーション
③ 最終小レポート

以上、①（40%）、②（30%）、③（30%）の総合評価により判定する。 ※ 最終プレゼンテーションに出席できない場合は、別日で調整する。
その他の重要事項
担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回授業で説明する。 本授業は第 1 週と第 4 週をハイフレックス、第 2 週と第 3 週をオンラインで実施する。
2022 年度科目との読替え
なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	−	○	−

授業名称	インターナル・コミュニケーション			科目コード	CDPC0302L
担当教員	柴山 慎一	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	木 A
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、企業や団体、自治体などのあらゆる組織の抱える課題が、組織内のコミュニケーション、すなわち「インターナル・コミュニケーション（以下 IC と略）」によって解決できると学ぶことにある。そもそも IC とは、社内報の制作にはとどまらない。より上位にある経営課題、組織課題を解決するための IC 課題を見極め、プライオリティをつけて IC 施策にブレークダウンすることが求められる。「戦略が組織を規定する」という経営学者チャンドラーの有名な命題があるが、この授業においては、「組織（課題）が IC（課題）を規定する」という前提にたつ。IC とは、広報戦略の一部というよりは、より上位の経営戦略の一部と位置づけられるべきもので、経営そのものとも言える。組織をあるべき方向へ導き、組織のパフォーマンスを高めるための活動であり、経営者の重要な仕事であり、サポートする経営スタッフの役割も大きい。IC の巧拙は組織内の文化や風土といった見えざる資産における成果だけでなく、組織構成員の満足を通じて顧客の満足や自組織の成果にも影響する。組織内の上位層と下位層間の縦関係だけでなく、同階層同志の横の関係、さらには斜めの関係も IC の対象になる。また、組織外での評価や期待が、組織内に還ってくる「ブーメラン効果」、さらには組織内の文化や習慣が時間を超えて伝承されていくような四次元の IC も対象になる。

また、最近のソーシャルメディアの進化とともに、組織構成員一人ひとりが組織を代表するコミュニケーション・パーソン化してきている背景もあり、IC の重要性は一層高まってきている。あるべき IC が展開されて、はじめてその他の広報戦略・施策の有効性が担保されるものでもある。日々進化し続けている IC について相互に学び合い、様々な気づきが履修者の日常に生かされていくことが本授業に対する期待と受け止めている。

到達目標

① 履修者が、現在、そして未来の所属組織における組織課題に対応した IC 課題を見極め、IC によって組織課題を解決できる知見を身に着けられるようになる。
② 履修者が、授業内で紹介される様々な組織理論や IC 理論を通じて、現実の事象を一般化して理念的、普遍的に捉える知見を身に着け、また紹介される様々な事例を通じて、それらの疑似体験を積み上げ、今後の実務や研究に生かせる知見を体得できるようになる。
③ 履修者が、上記の知見を得ることを通じて、組織課題を発見（中間レポートの課題）し、解決する IC 戦略・施策（最終レポートの課題）に関わる企画書を作成できるようになる。
④ 履修者が、経営者との間で、IC を切り口にした組織課題について有効な対話ができるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）授業計画の説明と全体を通して伝えたいキーメッセージの共有（経営・組織課題、IC 課題、ｲﾝﾀｰﾅﾙとｲﾝﾅｰ）	事前	シラバスの理解、キーワードの確認（2h）
		事後	初見の専門用語の再確認と授業資料の復習（2h）
第 2 週	（第 2 講）組織論の入り口～（組織論、組織成長、組織慣性） （第 3 講）ミクロ組織論：個人～チーム（モチベーション、集団凝集性、内集団バイアス、リーダーシップ）	事前	キーワードの確認、参考図書による予習（1h）
		事後	初見の専門用語の再確認と授業資料の復習（2h）
第 3 週	（第 4 講）マクロ組織論その 1（組織設計、組織成長、組織デザインとコミュニケーション、ティール組織） （第 5 講）マクロ組織論その 2（組織文化、組織学習、SECI モデル、組織は戦略に従う、組織戦略）	事前	キーワードの確認、参考図書による予習（1h）
		事後	初見の専門用語の再確認と授業資料の復習（2h）

第 4 週	（第 6 講）組織論から IC へ（IC と業績、ブーメラン効果） （第 7 講）IC（らしさ、理念浸透、SUPP ﾓﾃﾞﾙ、IC 経営）	事前	キーワードの確認、参考図書による予習（1h）
		事後	初見の専門用語の再確認と授業資料の復習（2h）中間レポートの作成（15h）
第 5 週	（第 8・9 講）ベンチャー・中堅企業の IC 事例研究 ゲスト講師（組織成長と IC、集権と分権、対話と報奨）	事前	事例企業の調査（2h）
		事後	初見の専門用語の再確認（1h）
第 6 週	（第 10・11 講）大企業の IC 事例研究：ゲスト講師 （経営危機・成長戦略と IC、効率か創発か）	事前	事例企業の調査（2h）
		事後	初見の専門用語の再確認（1h）
第 7 週	（第 12・13 講）公益組織等における IC 事例研究 ゲスト講師（貢献意欲・共通の価値観、意識改革）	事前	事例企業の調査（2h）
		事後	初見の専門用語の再確認（1h）
第 8 週	（第 14 講）IC 経営（IC 戦略から IC 経営へ） （第 15 講）総括（ビジョン・理念の浸透、コンテンツとロジスティックス、コミュニケーションモデル）	事前	今までの授業資料の振り返り（3h）
		事後	最終レポートの作成（20h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は IC 活動を展開する上で必要な組織と人的資源の理論と実務について習得した上で、IC の理論と実務を学ぶ。グループディスカッション、クラスディスカッションや質疑応答を活用しながら、履修者の発言を重視した双方向型の授業とする。授業終了時には、履修者毎の学びや疑問をチャットに記入し次回につなげる。

教科書・参考書

教科書は指定しない。参考書として

・田尾雅夫編著（2010）『よくわかる組織論』，ミネルヴァ書房.
・清水正道編著（柴山慎一共著）（2019）『インターナル・コミュニケーション経営』，経団連出版.
・柴山慎一（2011）『コーポレートコミュニケーション経営』，東洋経済新報社.

評価方法

① 授業への貢献（40%）、②中間レポート「私が関わる組織の良い所・悪い所、課題」（20%）、③最終レポート「私が関わる組織の課題を解決する IC 戦略、IC 施策」（40%）をもとに 60 点以上を合格とする。

その他の重要事項

オフィスアワーは原則土曜日（要予約）

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	○	○	−

授業名称	広報マネジメント			科目コード	CDPC0303L
担当教員	北見 幸一	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	月 B
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、広報プロフェッショナルに必要な広報のマネジメントに関連する理論と応用、および、広報戦略を実践できる考え方を習得することである。高度専門職業人として、実務で使える広報の考え方を習得し、PDCA を回すことのできる企業広報・行政広報における情報活用の専門家を育成する。

事業部門から依頼された情報を、右から左へ情報発信する広報では意味がない。またメディア記者からの問い合わせ対応を行うだけが広報ではない。広報には、自社の経営環境を分析し、広報目標と現状のギャップを改善していく力が求められる。VUCA の時代には、複雑なステークホルダー相互の関係理解力、将来変化を見通す予見力が極めて重要である。受け身ではない主体的な戦略的広報をマネジメントする総合的なチカラが必要不可欠になる。戦略的広報を習得することによって、履修者は組織の中で、経営の中核人材として、ポジティブ、ネガティブの両局面においても、主体的に広報および経営を先導していく姿勢を身に着けていく。

到達目標

① 履修者が、戦略的広報を実践できる広報戦略企画を自分でプランニングできるようになる。
② 履修者が、広報戦略に組織の重要ステークホルダーをターゲットに定めることができるようになる。
③ 履修者が、広報の成果指標を設定して PDCA を回すことができるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）マネジメントとは何か、広報を社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の視点から考える	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業での質問事項の検討（0.5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（1h） 課題論文へのコメント（3h）
第 2 週	（第 2 講）メディア・マネジメント：メディアリレーションズの実際。ニュースバリュー研究 （第 3 講）ニュースリリースのセオリー。実際に作成（課題）	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッション準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4 講）ニュースリリース課題の発表、討議 （第 5 講）ステークホルダー・マネジメント：ステークホルダー相互の関係性、イシューマネジメントから考える	事前	授業資料の確認（1h） ニュースリリース課題作成（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 4 週	（第 6 講）戦略思考の広報マネジメント：広報オクトパスモデル 8 領域＆価値づくり広報モデル 9 領域 （第 7 講）話題作りから価値づくりへ。討議・ディスカッション	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッション準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 5 週	（第 8 講）広報効果測定はどう考えるべきか、3 つの測定目標、バルセロナ宣言 （第 9 講）広報戦略立案マネジメント：討議	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッション準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 6 週	（第 10 講）トップ広報マネジメント：リーダーシップコミュニケーション。パブリックスピーキング （第 11 講）トップ広報シミュレーション（コーポレートコミュニケーション）	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッション準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）

第 7 週	（第 12 講）クライシス広報マネジメント : 社会関係資本と不祥事企業分析アプローチ。規範とは? （第 13 講）ブランドリカバリー、クライシス時のシミュレーショントレーニング	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッション準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 8 週	（第 14・15 講）最終課題発表、討議、ディスカッション、まとめ	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッション準備（2h） 最終課題作成（12h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義とディスカッションを中心に進行する。
また履修者は、学んだ内容が自らの実務とどう関係するか、どのように役立つ可能性があるか、といった事柄についてコメントペーパーに記入し、毎回の授業後に提出する。

教科書・参考書

教科書は特に指定しないが、レジュメ資料を Web クラスルームにて配布する。
参考書・参考論文は以下の通り。
・関谷・薗部・北見ほか（2022）『広報・PR 論－パブリックリレーションズの理論と実際 [改定版]』，有斐閣.
・企業広報戦略研究所（2015）『戦略思考の広報マネジメント』，日経 BP.
・企業広報戦略研究所（2020）『新・戦略思考の広報マネジメント』，日経 BP.
・北見幸一（2010）『企業社会関係資本と市場評価―不祥事企業分析アプローチ』，学文社.
・北見幸一（2009）「企業における社会関係資本とパブリックリレーションズ ―社会との関係構築による資本蓄積とパブリックリレーションズ定義の再考」，『メディア・コミュニケーション研究』56，pp.135-179.
https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/39034/1/56-005.pdf

評価方法

① 毎回の授業での議論への参加とコメントペーパー（ニュースリリース）の提出
② 最終課題の提出および発表
以上、①（50%）、②（50%）の総合評価により判定する。

その他の重要事項

本授業は第 1、4、6、8 週をハイフレックス、第 2、3、5， 7 週をオンラインで実施する（ゲスト講師等の日程により、週単位で内容を変更することがある）。遅刻や欠席をする場合は、Teams で事前に連絡すること。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	－	○	○	－

授業名称	IR（財務広報）			科目コード	CDPC0312L
担当教員	柴山 慎一	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	木 A
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、上場、未上場に関わらず、投資家というステークホルダーに対峙して展開する財務広報、いわゆる IR（インベスター・リレーションズ）活動についての普遍的な本質を理解し、実務的な知識と実践力を培うことにある。受講するにあたっては財務会計の基礎的な素養が求められるが、授業の前半では導入編を設定しており、初級者でも理解できる構成にしている。IR とは、株主・投資家と企業との間の「情報の非対称性」を最小化する活動である。株式という実態の不明瞭な「モノ」を取引するにあたって、企業の情報を適時かつ適切に開示することが IR の目的となる。株主・投資家、資本市場から求められる情報としては、業績を中心とした財務情報はもちろんのこと、ESG などの非財務情報も重視されてきている。企業は、株主・投資家というターゲット（Who）に対して、IR 活動というロジスティックス（How）を通じて、様々な企業情報というコンテンツ（What）を提供し、信頼関係を構築していく。IR とは、このようなコミュニケーション活動を通じたステークホルダーとの間の継続的な関係構築プロセスともいえる。

IR 活動は、企業の成長ステージによっても捉え方が異なる。創業期においては、エンジェルなどの個人投資家がターゲットになる。成長前期においては、ベンチャーキャピタルなど、財務の理論および資本の論理で意思決定する主体がターゲットになる。成長後期や成熟期においては、株式上場を経ること通じて、機関投資家や個人投資家など、幅広い投資家がターゲットになる。ステージ毎に IR 活動で意識すべき点も変化し、IR 施策にも差別化が求められてくるが、いかなる IR 活動においても、その本質は普遍である。

到達目標

① 履修者が、投資家に求められる企業価値の向上を表現する「コーポレートストーリー」、すなわち企業の成長性、将来性が伝わるような投資家向けのプレゼンテーション用のドキュメントが作成できるようになる。
② 履修者が、最低限の財務の理論、資本の論理、および IR の実務について理解できるようになる。

授業計画（カッコ内は授業内で扱うキーワード）		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）授業計画の説明と全体を通して伝えたいキーメッセージの共有（財務諸表、企業価値、日経新聞、なぜ株を買う）	事前	シラバスの理解、キーワードの確認（1h）
		事後	初見の専門用語の再確認と授業資料の復習（2h）
第 2 週	（第 2 講）企業財務の基礎 1（利益と CF、資本コスト） （第 3 講）企業財務の基礎 2（期待収益率、理論株価）	事前	キーワードの確認、参考図書による予習（5h）
		事後	初見の専門用語の再確認と授業資料の復習（2h）
第 3 週	（第 4 講）企業財務の基礎 3（DCF 法、業績と株価） （第 5 講）企業財務の基礎 4（見えざる資産、統合報告書、バランススコアカード）	事前	キーワードの確認、参考図書による予習（5h）
		事後	初見の専門用語の再確認と授業資料の復習（2h）
第 4 週	（第 6 講）IR の実務 1（情報の非対称性、ﾃﾞｨｽｸﾛｰｼﾞｬｰ） （第 7 講）IR の実務 2（アナリスト、ガバナンス、ESG）	事前	キーワードの確認、参考図書による予習（2h）
		事後	初見の専門用語の再確認と授業資料の復習（2h）、中間レポートの作成（8h）
第 5 週	（第 8 講）ベンチャー企業の IR（エンジェル、VC） （第 9 講）同ディスカッション（IR 課題と情報開示）	事前	事例企業の調査（2h）
		事後	初見の専門用語の再確認（1h）

第 6 週	（第 10 講）大企業の IR（トップマネジメント、ロードショー、コーポレートガバナンス・コード、PDCA） （第 11 講）同ディスカッション（IR 課題と情報開示）	事前	事例企業の調査（2h）
		事後	初見の専門用語の再確認（1h）
第 7 週	（第 12 講）非財務情報に基づく IR （第 13 講）同ディスカッション（ESG 投資家への対応）	事前	事例企業の調査（2h）
		事後	初見の専門用語の再確認（1h）
第 8 週	（第 14 講）企業財務の理論から IR 実務まで（コーポレート・ストーリー、ビジネス／ストラテジー／グロース） （第 15 講）総括と最終レポートに向けての解説 ※ゲスト講師の都合により第 5，6，7 週の順番が変更になる可能性あり。第 7 週のゲストは、受講生の希望次第で調整。	事前	今までの授業資料の振り返り（3h）
		事後	最終レポートの作成（18h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は、まずは IR の普遍的な基盤になる企業財務の理論の基礎について、初級者でも理解できるような機会を提供し、その上で IR の考え方と実務について学んでいく。現実の世界で起こっていることを疑似体験するために、ゲスト講師による事例研究を活用し、現実の課題解決に向けた議論も行う。2 回のレポートについては、授業の中で受講生代表の発表を通じて、受講生全員が自身のレポートに反映してブラッシュアップしていけるものとする。グループディスカッション、クラスディスカッションや質疑応答を活用しながら、履修者の発言を重視した双方向型の授業とする。授業終了時には、履修者毎の学びや疑問をチャットに記入し次回につなげる。

教科書・参考書

教科書は指定しない。参考書として

- 石野雄一（2007）『ざっくりわかるファイナンス』，光文社新書.
  あるいは、石野雄一（2022）『超ざっくりわかるファイナンス』，光文社
- 砂川伸幸（2017）『コーポレートファイナンス入門』，日経文庫.
- 佐藤淑子（2015）『IR の成功戦略』，日経文庫.

評価方法

① 授業への貢献（40%）、② 中間レポート「所属企業（あるいは関心のある組織）の SWOT 分析」（20%）、③ 最終レポート「所属企業（あるいは関心のある組織）の投資家向けコーポレートストーリー（投資を薦める会社案内）（40%）をもとに 60 点以上を合格とする。

その他の重要事項

オフィスアワーは原則土曜日（要予約）

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	○	○	−

授業名称	リスク・コミュニケーション特論 A（組織）			科目コード	CDPC0316S
担当教員	白井 邦芳	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	金 A
年間開講数	1 回	授業種別	演習	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は過去において約 3,000 事例の危機対策を講じてきた実務経験を通じて、リスク・コミュニケーションの事業戦略としての危機管理態勢や事前の取組を解説し、過去の企業の失敗事例から何が不足していたのかのヒントを得て、組織のリスク・コミュニケーションの高度専門職業人として機能する技術と卓越した能力を醸成することにある。

到達目標

① 履修者がケーススタディを通じてリスクマネジメントの理論に基づく適切なリスク・コミュニケーションの真髄を身につける。

② 履修者が、リスクイベントに対応する一連のコミュニケーション活動が、その後の再発防止、企業再生、リカレント教育、風化抑止策にも有益であることを検証し、ブランド回復と再生に大きく寄与することを可能とする実務的な専門的見識と資質を習得する。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）ガイダンス（講義計画とリスク・コミュニケーションの重要性）	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）
第 2 週	（第 2・3 講）事業戦略とリスク・コミュニケーション（講義＋模擬討議）	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（4h）
第 3 週	（第 4・5 講）失敗事例に共通する課題への取組（講義＋模擬討議）	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（4h）
第 4 週	（6・7 講）：企業再生・再発防止の視点からのリスク・コミュニケーション（講義＋模擬討議）	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（4h）
第 5 週	（8・9 講）：企業風土化の失敗事例検証（講義＋模擬討議）	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（4h）
第 6 週	（10・11 講）：内部統制欠陥の失敗事例検証（講義＋模擬討議）	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（4h）
第 7 週	（12・13 講）：隠蔽体質の失敗事例検証（講義＋模擬討議）	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（4h）
第 8 週	（14・15 講）：適切なリスク・コミュニケーションとは。総括講義とレポート課題について	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出、レポート作成（10h）

授業の進め方と方法
上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義、受講者参加型の模擬討議で行い、双方向で意見交換しながら進める。特に過去事例をベースに作成されたシナリオからの運用研修は、課題解決能力を醸成することに多いに役立つだろう。テーマによりゲスト講師による特別講義を行う。
教科書・参考書
教科書は指定しない。 参考書：危機マネジメント研究会（2002）『実践危機マネジメント：理論戦略ケーススタディ」，ぎょうせい. 小川真人・白井邦芳（2010）『「循環取引」対策マニュアル』，中央経済社. 小川真人・白井邦芳（2011）『会社の事件簿！危機管理 21 の鉄則』，東洋経済新報社.
評価方法
1.　事前に配布する講義資料の読込みと毎回行う模擬討議などに対する回答内容を評価する。 2.　毎回の授業におけるトピックス、ディスカッション等の参加度を評価する。 3.　最終レポート課題の提出を求める。 以上、1（40%）、2（30%）、3（30%）の総合評価により成績を評価する。
その他の重要事項
①　初回の授業で、オフィス・アワーについて説明する。 ②　遅刻や欠席をする場合は、メール等を通じて事前に連絡すること。 本授業は第 1 週と第 8 週をハイフレックス、第 2 週から第 7 週をオンラインで実施する。 本授業に関する疑問点や不明点は、担当教員へメールで確認すること。 本授業に先立って【CDPB0206S リスク・マネジメント】を履修していることが望ましい。
2022 年度科目との読替え
CDPC0325S　リスク・コミュニケーション特論 A

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	−	○	−

授業名称	ブランド・コミュニケーション			科目コード	CDPC0318L
担当教員	谷口 優	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	火 B
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、まずはブランド論とブランディングの方法論の基本を理解することにある。その理解をもとに、具体的な国内外のブランディングケースや事象、各種フレームワークに関する研究・議論を通じ、マーケティング活動のみならず、広報・コミュニケーションデザイン実務における今日的課題に、その知見をどう生かすべきか、までを一人ひとりが考察できるようになるまでを目指す。

到達目標

① 履修者が、ブランドの理論、実務におけるブランディングの実践論の基本を理解できるようになる。
② 履修者が、マーケティングにおけるブランドの役割のみならず、パブリックリレーションズ活動に資する効果も理解できるようになる。
③ 履修者が、主に企業ブランディング活動において広報の組織ならびにスキルがどう活かされるのか。期待される役割を理解できるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）オリエンテーション（本授業の目的・到達点・進め方の説明）／なぜ、ブランドが重視されるのか？	事前	シラバスの精読（1h），本講義に期待することのまとめ（3h）
		事後	ミニットペーパー提出（1h），講義内で触れた事例・データの関連資料を基にした講義内容の深堀（1h），講義内容を自分の研究テーマに落とし込むための考察（1h）
第 2 週	（第 2 講）ブランド・ブランド戦略の基本概念 （第 3 講）ブランディングの実践論・フレームワーク	事前	前回講義の復習・疑問点精査（2h）
		事後	ミニットペーパー提出（1h），講義内で触れた事例・データの関連資料を基にした講義内容の深堀（1h），講義内容を自分の研究テーマに落とし込むための考察（1h），講義内で取り組んだ課題の復習【講義内で終わらなかった課題がある場合にも】（3h）
第 3 週	（第 4～5 講）コーポレートブランドと広報 ・ブランドコミュニケーションにおけるステークホルダー ・インターナルブランディングと広報 ・コーポレートブランドと構築と広報の役割 ・広報活動におけるブランドの効果・役割、他	事前	前回講義の復習・疑問点精査（2h）
		事後	ミニットペーパー提出（1h），講義内で触れた事例・データの関連資料を基にした講義内容の深堀（1h），講義内容を自分の研究テーマに落とし込むための考察（1h），講義内で取り組んだ課題の復習【講義内で終わらなかった課題がある場合にも】（3h）
第 4 週	（第 6～7 講）プロダクトブランド構築における広報コミュニケーションの役割（プロダクト広報の視点から） マーケティング・コミュニケーションに期待される役割と変化／統合型マーケティング・コミュニケーションとプロダクト広報／プロダクトブランド構築における広報コミュニケーション人材・機能が果たせる役割、他	事前	前回講義の復習・疑問点精査（2h）
		事後	ミニットペーパー提出（1h），講義内で触れた事例・データの関連資料を基にした講義内容の深堀（1h），講義内容を自分の研究テーマに落とし込むための考察（1h），講義内で取り組んだ課題の復習【講義内で終わらなかった課題がある場合にも】（3h）
第 5 週	（第 8～9 講）デジタル時代のブランド戦略、課題と論点（メディア環境、生活者行動変化から） 情報の非対称性の崩壊とブランド戦略の変化／SNS、ネット広告の浸透で生まれるブランドリスク／変化する購買チャネルと消費者のブランドスイッチ（リキッド消費の視点から）への対応、他	事前	前回講義の復習疑問点精査（2h）
		事後	ミニットペーパー提出（1h），講義内で触れた事例・データの関連資料を基にした講義内容の深堀（1h），講義内容を自分の研究テーマに落とし込むための考察（1h），講義内で取り組んだ課題の復習【講義内で終わらなかった課題がある場合にも】（3h）

第 6 週	（第 10～11 講）ブランディングの実践における昨今の潮流・事象・概念 ブランディングにおける各種フレームワーク（国内外エージェンシーが提唱する各種モデル）／消費者のブランド選好・購買プロセスの変化に対応した企業ブランディングケースを基にした議論・考察、他	事前	前回講義の復習・疑問点精査（2h）
		事後	ミニットペーパー提出（1h），講義内で触れた事例・データの関連資料を基にした講義内容の深堀（1h），講義内容を自分の研究テーマに落とし込むための考察（1h），講義内で取り組んだ課題の復習【講義内で終わらなかった課題がある場合にも】（3h）
第 7 週	（第 12～13 講）ブランド資源を生かした企業変革 自社資源を生かしたブランド拡張戦略、成功・失敗事例を基にした議論・考察（ケースを基にしたディスカッション）／リブランディング戦略と事業変革、他	事前	前回講義の復習・疑問点精査（2h）
		事後	ミニットペーパー提出（1h），講義内で触れた事例・データの関連資料を基にした講義内容の深堀（1h），講義内容を自分の研究テーマに落とし込むための考察（1h），講義内で取り組んだ課題の復習【講義内で終わらなかった課題がある場合にも】（3h）
第 8 週	(第 14～15 講）企業経営とブランド（ブランディング実務経験者をゲスト講師として招聘予定）	事前	前回講義の復習・疑問点精査（2h）
		事後	ミニットペーパー提出（1h），講義内で触れた事例・データの関連資料を基にした講義内容の深堀（1h），講義内容を自分の研究テーマに落とし込むための考察（1h），全講義の振り返り・復習（1h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は履修者の積極的な発言、ならびに参加者同士のディスカッションを重視する。また履修者が、各自が所属する組織の状況あるいは研究者としての関心領域に基づき、講義内容を自身の仕事（や研究）に生かすための考察をしてもらうため、毎回ミニットペーパーの提出を課す。

教科書・参考書

教科書は特に指定しない。講師がその都度、議論のための資料や参考図書を指示する。
参考書：デビッド・アーカー（2014）『ブランド論』，ダイヤモンド社.，バイロン・シャープ（2018）『ブランディングの科学』，朝日新聞出版.，ケン・シーガル（2012）『Think Simple』，NHK 出版.，田中洋（2021）『ブランド戦略ケースブック』，同文館出版.，*齊藤*三希子（2021）『パーパス・ブランディング』，宣伝会議.，片山義丈（2021）『実務家ブランド論』，宣伝会議.，竹安聡（2019）『事業構想型ブランドコミュニケーション』，宣伝会議．その他、講義内のケース研究などに際しては、月刊『宣伝会議』，宣伝会議．より提示の予定。

評価方法

① 毎回のディスカッションへの貢献など授業内での発言。②ミニットペーパーの提出。
①　（40%）、②（60%）の総合評価とする。

その他の重要事項

オフィスアワーの予約方法などは初回講義時に説明。

2022 年度科目との読替え

CDPC0318L　ブランド・マーケティング

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	–	–	○	–

授業名称	プロダクト広報特論			科目コード	CDPC0315S
担当教員	谷口 優	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	月 B
年間開講数	1 回	授業種別	演習	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、「プロダクト広報」に関わる企業事例を題材に、その背景にあるマーケティング課題を導き出し、課題と目的に応じた戦略立案の汎用化できる部分をグループでの討論を通じて導き出していくことする。また、議論のプロセスを通じて、「プロダクト広報とは何か？」「マーケティング活動における広報の位置づけ、役割とは？」 というテーマについて履修者一人ひとりが、自分なりの仮説を持つことを到達目標と設定する。本授業で扱う「プロダクト広報」とは、マーケティング戦略のなかに位置するマーケティング・コミュニケーション戦略における「広報」活動に焦点を当てている。本学における「広報」は、主にコーポレートコミュニケーション活動が中心だが、本授業ではプロダクトやサービスのマーケティングにおける広報活動を取り上げる。 昨今、BtoC 商材では消費者の購買意思決定に際し、企業が一方的にメッセージを発する「広告」だけではなく、メディアや個人など第三者の発信の影響力が増している。この環境においては、マーケティング活動における広報をはじめとする広告以外の役割が重要度を増しており、本授業では主に BtoC 商材のマーケティングにおける広報活動の役割を考え、研究することを目的とする。消費者を対象とするマーケティング活動における広報の在り方・役割について事例を基に、探求すると同時に、それを実現するための組織や体制についても検討する。

さらに最近の企業活動を見ると、プロダクト・サービスのコモディティ化が進む中で、マーケティング活動とコーポレートコミュニケーションの垣根もなくなりつつある傾向が見られる。そこで本授業ではマーケティングやプロダクト広報のみに絞って取り上げるのではなく、最終的にはマーケティング、プロダクト広報とコーポレートコミュニケーションの融合についても今日的な課題として履修者の皆さんと議論をしていきたい。

※一部 BtoB の商材も取り扱うが、基本は BtoC のプロダクト・サービスを中心に講義を進める。

到達目標

① 履修者が、本授業内で取り上げる「プロダクト広報」のケース研究をもとに汎用可能な戦略立案の肝を導き出せる。

② 履修者が、本授業で提示される概念や事例をどう自身の仕事、あるいは研究者としての探究に応用できるかを理解できる。

③ 履修者が「プロダクト広報とは何か？」「マーケティング活動における広報の位置づけ、役割は何か？」 という本授業で考察するテーマについて、自分なりの「定義」を持つに至る。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）オリエンテーション（本授業の目的・到達点・進め方の説明、プロダクト広報概論）	事前	シラバスの精読（1h） 本授業に期待することのまとめ（1h） 授業を受ける前の段階のプロダクト広報に関する自分なりの定義の考察（5h）
		事後	コメントペーパー提出（1h），講義内で触れた事例・データの関連資料を基にした講義内容の深堀（1h），講義内容を自分の研究テーマに落とし込むための考察（1h）
第 2 週	（第 2・3 講）消費行動の変化に対応して変容するマーケティング活動	事前	前回講義の復習・講師への疑問点精査（1h）
		事後	コメントペーパー提出、他第 1 週と同様（3h）
第 3 週	（第 4・5 講）消費者のメディア接触行動の変化とその変化に対応するマーケティング・コミュニケーション活動	事前	前回講義の復習・講師への疑問点精査（1h）
		事後	コメントペーパー提出（1h），講義内で触れた事例・データの関連資料を基にした講義内容の深堀（1h），講義内容を自分の研究テーマに落とし込むための考察（1h），講義内で取り組んだ課題の復習【講義内で終わらなかった課題に講義外で取り組む】（3h）

第 4 週	（第 6・7 講）BtoC 商材（プロダクト・サービス）における消費者の購買意思決定のプロセスとプロダクト広報の役割	事前	前回講義の復習・疑問点精査（1h）
		事後	コメントペーパー提出、第 3 週と同様（6h）
第 5 週	（第 8・9 講）: BtoB 商材（プロダクト・サービス）における購買意思決定のプロセスとプロダクト広報の役割	事前	前回講義の復習・疑問点精査（1h）
		事後	コメントペーパー提出、他第 3 週と同様（6h）
第 6 週	（第 10・11 講）プロダクト広報における情報コンテンツ戦略（実践／ワークショップ実施）	事前	前回講義の復習・疑問点精査（1h）
		事後	コメントペーパー提出、他第 3 週と同様（6h）
第 7 週	（第 12・13 講）: プロダクトライフサイクルのステージに応じたマーケティング・コミュニケーション戦略	事前	前回講義の復習・疑問点精査（1h）
		事後	コメントペーパー提出、他第 3 週と同様（6h）
第 8 週	（第 14 講）: 市場創出型商品における統合的コミュニケーション（ゲスト講師予定） （第 15 講）プロダクト広報とコーポレートコミュニケーションの融合	事前	前回講義の復習・疑問点精査（1h） ゲスト講師への質問内容の検討（2h）
		事後	ゲスト講師講義の感想＆コメントペーパー提出（3h），講義内で触れた事例・データの関連資料を基にした講義内容の深堀（1h），講義内容を自分の研究テーマに落とし込むための考察（1h），プロダクト広報についての定義考察【レポート提出は不要】（3h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は履修者同士のディスカッションを重視する。
また履修者が、各自が所属する組織の状況あるいは研究者としての関心領域に基づき、講義内容を自身の仕事（や研究）に生かすための考察をしてもらうため、毎回ミニットペーパーの提出を履修者に課す。

教科書・参考書

教科書は指定しない。
参考書：月刊『宣伝会議』（株式会社宣伝会議発行）
月刊『広報会議』（株式会社宣伝会議発行）
音部大輔（2021）『The Art of Marketing―マーケティングの技法』，宣伝会議.

評価方法

① 毎回のディスカッションへの貢献など授業内での発言。
② コメントペーパーの提出。
①（40%）、②（60%）の総合評価とする。

その他の重要事項

オフィスアワーなど、授業外での個別面談については授業内にて説明する。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	－	○	○	－

授業名称	スタートアップ・コミュニケーション			科目コード	CDPC0314L
担当教員	佐藤 直樹	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	1 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	夏季集中	曜日	–
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、昨今注目されている短期間で急成長しイノベーションに挑戦する「スタートアップ」におけるコミュニケーションについて学ぶことにある。対象はスタートアップの広報担当者のみならず、中小企業や大企業でスタートアップと共創事業に取り組む企業の広報担当者においても役立つ内容にしていく。
スタートアップを取り巻く環境としてベンチャーキャピタル等の金融機関によるエコシステムにより資金調達はしやすい環境になっているものの、既に認知されている大企業と違いスタートアップは出来たばかりの企業が多いため認知を獲得していく必要がある。
そのため起業家や革新的なプロダクトについて広報・PR（パブリック・リレーションズ）で社会との関係構築をはかり、認知度を上げ、売上や採用等に貢献し会社を成長させることが多い。
しかしながらスタートアップはまだ歴史も浅く、スタートアップの広報・PR の実務経験がある人も少ない。またスタートアップは人員上、複数の広報担当を置くことが出来ずひとりで行うことも多いことから知識の共有や教育体制、評価方法等が整っていないことが多い。
本授業ではスタートアップの広報・PR の実例を通じながらスタートアップのコミュニケーション論について考察したい。重点的に取り扱う具体的なテーマについては履修者の関心を踏まえ調整していく。

到達目標

① 履修者が、スタートアップを取り巻く動向を継続的に獲得できるようになる。
② 履修者が、スタートアップの広報・PR に関する知見を修得する。
③ 履修者が、スタートアップ・コミュニケーションについて討議できるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週 9/1（金）	（第 1 講）スタートアップ・コミュニケーションとは	事前	シラバスの精読(0.5h) 質問事項の検討(0.5h)
		事後	コメントペーパーの提出(1h) ディスカッションの復習(2h)
第 2 週 9/7（木）	（第 2・3 講）スタートアップのメディア・リレーションズ：ゲスト講師招聘回	事前	授業資料の確認(1h) ディスカッション準備(1h)
		事後	コメントペーパーの提出(1h) ディスカッションの復習(2h)
第 3 週 9/8（金）	（第 4・5 講）スタートアップのコミュニケーション戦略	事前	授業資料の確認(1h) ディスカッション準備(1h)
		事後	コメントペーパーの提出(1h) ディスカッションの復習(2h)
第 4 週 9/11（月）	（第 6・7 講）スタートアップ・コミュニケーション実務と経営戦略との連携	事前	授業資料の確認(1h) ディスカッション準備(1h)
		事後	コメントペーパーの提出(1h) ディスカッションの復習(2h)
第 5 週 9/15（金）	（第 8 講）授業のまとめ、最終ディスカッション（課題発表）	事前	最終課題発表の準備（8h）
		事後	最終課題の提出(1h) ディスカッションの復習(2h)

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は毎回の授業を講義とディスカッションにより構成する。

教科書・参考書
教科書は指定しない。 参考書： • 堀新一郎,琴坂将広, 井上大智（2020）『STARTUP 優れた起業家は何を考え、どう行動したか』, NewsPicks パブリッシング. • 後藤直義（2022）『ベンチャー・キャピタリスト 世界を動かす最強の「キングメーカー」たち』, NewsPicks パブリッシング.
評価方法
① 各回講義でのコメントペーパーの提出 ② 最終課題の提出 以上、①を 70%、②を 30%で総合評価する。
その他の重要事項
初回の授業でオフィス・アワーについて説明する。 遅刻や欠席をする場合は、メール等を通じて事前に連絡すること。 本授業に関する疑問点や不明点については、担当教員まで問い合わせること。 本授業は第 1 週と第 5 週をハイフレックス、第 2 週から第 4 週をオンラインで実施する。
2022 年度科目との読替え
なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	○	○	−

授業名称	パブリック・アフェアーズ			科目コード	CDPC0323S
担当教員	北島 純	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	火 A
年間開講数	1 回	授業種別	演習	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、履修者が「パブリック・アフェアーズの基本的知識」を身につけることにある。

これまで、「企業・団体」から「行政」（中央省庁・地方自治体）や「議会」（国会議員・地方議会議員）へどう働きかけるかという「ロビイング」（法改正・予算獲得・規制緩和/強化等に関わる陳情・働き掛け等の渉外活動や情報収集等）や「アドボカシー」（政策提案等）の観点、あるいは企業・団体が「市民」（消費者）といかに良好な関係を構築するかという「広報」の観点から理解されることが多かった「パブリック・リレーションズ」（Public Relations）は現在、グローバル化の進展に伴って、グローバル・パブリック・アフェアーズ（Global Public Affairs）として再定義されつつある。

そこでは、グローバル社会の進展に伴って勃興した「シビル・ソサエティ」（Civil Society）が重要な役割を果たす形で、企業（Private Sector）や政府（Government Sector）との間で、「公的事象」（Public Affairs）に関わる相互コミットメント（Mutual Commitment）が広範に行われている。例えば、GX（グリーン・トランスフォーメーション）における環境関係規制（EU タクソノミー等）や再生可能エネルギー、EV 導入を巡る政策決定、ESG インベストメントの隆盛、新冷戦に伴う経済安全保障や人権デューデリジェンス等のルール・メイキングはいずれも、このような「国境を超えたパブリック・アフェアーズ」に関わる政策課題であり、企業の経営戦略・広報戦略にとって無視することが出来ない関心事項になっている。そうした重要事項（マテリアリティ）を理解するために、グローバル・パブリック・アフェアーズの基礎的知識はこれから必要不可欠となろう。

本授業では、我が国における政策決定や法令執行のプロセス、政策に関わるビジネス法の基礎的知識や、グローバル広報の成功例・失敗例、ポリティカル・コンプライアンスのケース紹介を織り交ぜながら、パブリック・アフェアーズの実践的技法を検討していく。

社会構想の実現のためには、「個人・組織・社会・国家間における政策実現過程にどのようにコミットしていくか」という戦略的な視座と、「自らの社会構想をいかにして社会実装していくか、具体化させるか」という政策デザイン力が必要であるが、ともに基礎となるのは「パブリック・アフェアーズの知識」である。

到達目標

① 履修者が、パブリック・アフェアーズの基本的知識を習得できるようになる。
② 履修者が、習得したパブリック・アフェアーズの基本的知識をもとに、自ら（または自らの属する組織）に関わる政策的課題を客観的に分析・評価し、その解決方法を提言できるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）なぜ「パブリック・アフェアーズ」が必要か	事前	シシラバスの精読（0.5h） 授業における質問事項の検討（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）
第 2 週	（第 2・3 講）パブリック・アフェアーズの基礎 I ―ロビイング・アドボカシー等のパブリック・リレーションズ	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4・5 講）パブリック・アフェアーズの基礎 II ―グローバル・パブリック・アフェアーズと国際ルール形成戦略	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）
第 4 週	（第 6・7 講）パブリック・アフェアーズの基礎 III ―グローバル・パブリック・アフェアーズの限界と法規制	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）

第 5 週	（第 8・9 講）パブリック・アフェアーズのケース研究 I ―日本の立法・政策・法執行における「意図」の解析	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）
第 6 週	（第 10・11 講）パブリック・アフェアーズのケース研究 II―EU/USA 主導のコンプライアンス規制	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）
第 7 週	（第 12・13 講）パブリック・アフェアーズのケース研究 III ―理想を社会実装する広報・コミュニケーション戦略	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）
第 8 週	（第 14・15 講）パブリック・アフェアーズと倫理 ―政治と説明責任及び倫理	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h） 最終レポート課題（21h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義及びディスカッション（ディベート含む）を中心に進行する。履修者は、学んだ内容が「自らの実務や社会構想と具体的にどのように関係するか」等の事柄についてコメントペーパーに記入し、毎回の授業終了後に提出する。

なお、専門家をゲスト講師として招聘し議論を深める予定である。

教科書・参考書

教科書：指定しない。

参考書：アニュ・ブラッドフォード（2022）『ブリュッセル効果 EU の覇権戦略』，白水社．，クレメンス・ヨース、フランツ・ヴァルデンベルガー（2005）『EU におけるロビー活動』，日本経済評論社．官澤康平、南知果、徐東輝、松田大輝（2021）『ルールメイキングの戦略と実務』，商事法務．，多摩大学ルール形成戦略研究所（2017）『世界市場で勝つルールメイキング戦略 技術で勝る日本企業がなぜ負けるのか』，朝日新聞出版．，久米郁男, 川出良枝, 古城佳子, 田中愛治, 真渕勝（2011）『補訂版 政治学』，有斐閣.

評価方法

① 毎回の授業における議論への参加とコメントペーパーの提出

② 最終課題の提出

総合的な評価（①60%、②40%）により判定する。

その他の重要事項

担当教員のオフィスアワー・予約方法については、初回の授業で説明する。

2022 年度科目との読替え

CDPC0304L　政策情報論と CDPC0323S　パブリック・アフェアーズを 2022 年度までに履修で読替え。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	－	○	－

授業名称	シティ・プロモーション			科目コード	CDPC0306S
担当教員	牧瀬 稔	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	土 A（1・2 限）
年間開講数	1 回	授業種別	演習	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、地方自治体が展開するシティ・プロモーションの背景を確認し、動向、意義、成果などを把握することにある。また、シティ・プロモーションの現状を認識することにより、現代社会におかれている地方自治体の立ち位置を理解する。そうすることで、履修生自身が取り組む調査研究の洞察力や構想力等を深めていく。

到達目標

① 履修者がシティ・プロモーションの事例から現場志向を学び説明できるようになる（現場力・説明力）。
② 履修者が地方自治体のシティ・プロモーションを比較することで考察を深められるようになる（考察力）。
③ 履修者が実際の政策展開を知ることで、分析や実現の能力を高められるようになる（分析力・実現力）。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）ガイダンス、シティ・プロモーションの定義・必要性	事前	シラバスの精読（1h） 授業での質問事項の検討（1h）
		事後	授業の復習（2h）
第 2 週	（第 2 講）シティ・プロモーションの経緯・背景 （第 3 講）シティ・プロモーションの具体的事例	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 3 週	（第 4 講）事例研究 : 地方自治体のシティ・プロモーション（ゲスト講師予定） （第 5 講）事例研究をもとに意見交換、討論	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 4 週	（第 6 講）地域ブランドの構築 （第 7 講）成功するシティ・プロモーション、失敗するシティ・プロモーション	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 5 週	（第 8 講）新しいシティ・プロモーションの潮流 （第 9 講）履修生の政策提言案の発表（中間発表）、意見交換	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h） 発表資料準備・作成（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 6 週	（第 10 講）フィールドとする自治体のシティ・プロモーションの研究 （第 11 講）履修生の政策提言案の発表（中間発表）、意見交換	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h） 発表資料準備・作成（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 7 週	（第 12 講）シティ・プロモーションの可能性と展望 （第 13 講）履修生の政策提言案の発表（中間発表）、意見交換	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h） 発表資料準備・作成（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 8 週	（第 14 講）フィールド自治体への政策提言（最終発表） （第 15 講）本授業のまとめ	事前	授業資料の精読（2h） ディスカッション準備（2h） 最終発表資料準備・作成（2h）
		事後	本授業全体の復習（3h） 最終発表資料の修正（5h）

授業の進め方と方法
上記目的・到達目標を達成するため、本授業は最終的に地方自治体に対して履修生が政策提言を行う。過年度は、日光市（栃木県）、西条市（愛媛県）等の市長からテーマ（課題）を提示していただき、最終回に履修生が直接、市長、副市長等に対して政策提言を行った。今回も自治体と連携して、政策提言を進める予定である。 毎回の授業は、原則として講師による講義と意見交換（ディスカッション）の双方向性を基本とする。 授業計画（15 講）の前半は講師の講義をもとに、履修生と意見交換を中心に進める。実際にシティ・プロモーションを推進している当事者をゲスト講師として招き、共同で講義を実施する。後半は、フィールドとした自治体から提示されたテーマについて履修生が発表し、意見交換を中心に進める。 別講義「公共コミュニケーション」との関係を言及しておく。公共コミュニケーションは、地方自治体の「内」を対象としており既存住民が中心である。一方で本授業は地方自治体の「外」が対象となる。自治体の外にいる潜在住民を対象に政策展開を進めていくことになる。
教科書・参考書
教科書は指定しない。参考書は、下記のとおりである。 ・牧瀬稔著（2022）『市町村議員のための地域創生ガイドブック』，中央文化社. ・牧瀬稔著（2021）『地域づくりのヒント 地域創生を進めるためのガイドブック』，社会情報大学院大学出版部. ・牧瀬稔編（2018）『地域ブランドとシティプロモーション』，東京法令出版. ・牧瀬稔著（2017）『地域創生を成功させた 20 の方法』，秀和システム. ・牧瀬稔・板谷和也編（2008）『地域魅力を高める「地域ブランド」戦略』，東京法令出版.
評価方法
① 毎回の授業での議論の参加（30%） ② 中間的な政策提言資料（20%） ③ 最終的な政策提言資料（50%）
その他の重要事項
担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回の授業で説明する。 本授業は第 1 週と第 8 週をハイフレックス、第 2 週から第 7 週をオンラインで実施する。 なお、ゲスト講師を招致する回は、ゲスト講師の希望によりハイフレックスになることがある（改めて授業でアナウンスする）。
2022 年度科目との読替え
なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	–	–	○	–

授業名称	ソーシャル・コミュニケーション			科目コード	CDPC0309L
担当教員	坂本 文武	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	火 B
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、広義における非営利組織（NPO）の情報戦略を理解することで、組織とステークホルダーとの「対話と協働」のコミュニケーションを設計できるようになることにある。非営利組織は、社会課題解決もしくは社会変革のために、個人や組織から財や労役を無償で借り受け社会運動に発展させる経営戦略をとることが多い。社会課題を中心に据え周囲から支援行動を引き出すコミュニケーションのあり方は、営利組織がサステナビリティ経営を、行政がローカル SDGs を推進する際、もしくは、営利組織の「ファンづくり」「ファンの組織化」において参考になることが多い。本授業を通して、「ステークホルダーと共感の関係をどう築くのか」、「組織活動への愛着をどう増長するのか」、「組織を支援する人をどうコミュニティ化するのか」といった問いに応えていく。基盤として非営利組織の組織特性および社会戦略を理解する知識を習得すること、応用として企業コミュニケーションに適用できるポイントを探ることを射程に講義および議論を展開する。

到達目標

① 履修者が非営利組織の組織特性とそれが立脚する事業環境を理解する。
② 非営利組織が立案、実行するソーシャル・コミュニケーション戦略の本質を履修者が説明できる。
③ 履修者がソーシャル・コミュニケーションの要素を自組織の広報戦略に組み込める。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）NPO への基礎理解―日本における市民社会と非営利組織の社会的役割の理解	事前	シラバスの精読と授業での質問事項の検討（0.5h）
		事後	ディスカッションの復習（1h）
第 2 週	（第 2 講）NPO の組織類型と経営原則―営利企業との比較を通して組織の類型と経営の原則を理解する （第 3 講）NPO の組織構造―営利企業との比較を通してガバナンスの特性を理解する	事前	授業資料の確認（1.5h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4 講）NPO の財務戦略―NPO の資金調達および財務管理の基本を理解する （第 5 講）NPO の社会戦略―社会を変える NPO のコミュニケーション戦略を考察する	事前	授業資料の確認（1.5h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 4 週	（第 6・7 講）実践事例研究―NPO の役員もしくは職員をゲスト講師として招聘し実践事例を分析する（予定）	事前	授業資料の確認（1.5h） ゲスト講師の所属団体の理解（1.5h）
		事後	ディスカッションの復習（2h） グループで事例研究と発表準備（20h）
第 5 週	（第 8 講）事例研究①－履修者による事例報告とそれに基づくソーシャル・コミュニケーションの要点に関する討議 （第 9 講）事例研究②－前講の続き	事前	発表資料の確認（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 6 週	（第 10・11 講）実践事例研究―ソーシャル・コミュニケーションを外部から支援する専門家をゲスト講師として招聘し、社会を動かすコミュニケーションの要件を議論する（予定）	事前	発表資料の確認（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）

第 7 週	（第 12・13 講）振り返り討議―演習目的に設定された社会課題を解決するためのソーシャル・コミュニケーション戦略を講義時間内にて検討し発表、相互批判する	事前	演習テーマの事前学習（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 8 週	（第 14・15 講）総括討議―社会を変えるソーシャル・コミュニケーションの本質と企業や行政への応用	事前	過去講義資料とノートの確認（3h）
		事後	ディスカッションの復習（1.5h） 最終レポート課題の作成（10h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は基礎知識の習得を狙いとする講義と、派生する問いに関するディスカッションを中心に進行する。なお、重点的に取り扱う具体的なテーマについては、履修者の関心を踏まえて調整していく。

教科書・参考書

教科書は指定しない。
参考書：SSIR JAPAN（2021）『これからの「社会の変え方」を、探しにいこう。――スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー ベストセレクション 10』，SSIR Japan.

評価方法

① 講義中もしくは Teams でのディスカッションへの貢献
② 最終課題の提出（文字数は 3,000 文字程度、提出期限は第 8 週後 2～3 週間程度）
以上、①（40%）、②（60%）の総合評価により判定する。

その他の重要事項

担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回の授業で説明する。
ハイフレックス形式にて開講するが、教員の都合等により一部オンラインのみで開講する可能性がある。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	－	○	○	－

授業名称	サイエンス・コミュニケーション			科目コード	CDPC0324L
担当教員	山口 健太郎	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	金 B
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、高度な専門知識なくしてはその運営が成り立たない現代社会において、いかにして専門知と社会との信頼関係を構築・維持していくべきかについての考察を通じて、履修者それぞれのサイエンス・コミュニケーションに関する実務及び研究の方向性を見出すことにある。
サイエンス・コミュニケーション分野では、いまだ実務・実践に資する定まった理論が存在せず、あるのは文脈に強く依存した実例か、「学問分野としてのサイエンス・コミュニケーション」論のみである。そのため、本授業では、できる限り具体的なケースを取り上げつつ、履修者とともにそれらを分析することによって、各自の実践活動に資する知識の導出を目指したいと考える。

到達目標

① 履修者が、サイエンス・コミュニケーションに関する主要なキーワードについて説明できるようになる。
② 履修者が、サイエンス・コミュニケーションと広報・PR の共通点／違いについて説明できるようになる。
③ 履修者が、②の理解に基づいて、サイエンス・コミュニケーションの戦略を立案できるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）オリエンテーション：本授業の趣旨と進め方について説明する。	事前	シラバスの内容について理解する。（1h）
		事後	本授業の進め方について復習し、自身の業務や研究上の関心との接点を確認する。（1h）
第 2 週	（第 2 講）多種多様なサイエンス・コミュニケーションの捉えられ方：サイエンス・コミュニケーションに関わる一般的なキーワードについて解説する。 （第 3 講）サイエンス・コミュニケーションのためのツールボックス：サイエンス・コミュニケーションの実践手法について解説する。	事前	講義資料を事前に確認する。（1h） 自身が追究したい「サイエンス・コミュニケーション」的課題とはどのようなものか、イメージする。（2h）
		事後	講義資料を復習し、個人の関心に応じて追加的に学習を行う。（2h） 自身が追究したい「サイエンス・コミュニケーション」的課題について、言葉として表現する。（2h）
第 3 週	（第 4 講）サイエンス・コミュニケーションに関わる実務・キャリア①（ゲスト講師）（予定）：サイエンス・コミュニケーションの実務について紹介する。 （第 5 講）ケーススタディ①：第 3 講を参考に、履修者は、自身の業務や研究の関心に合うものを取り上げ、サイエンス・コミュニケーションの企画案を発表する。それらについて、履修者相互に批評を行う。	事前	ゲスト講師の実績等について調べ、確認したい事柄を整理する。（1h） 中間レポートを作成する。（4h）
		事後	ゲスト講師の資料について復習し、自身の業務や研究上の関心との接点を明らかにする。（2h） 課題の発表において受けた批評を確認し、良かったところ、改善すべきところを整理する。（2h）
第 4 週	（第 6・7 講）社会学的視座におけるサイエンス・コミュニケーションについて：サイエンス・コミュニケーションを社会学的視座から解きほぐしたうえで、サイエンス・コミュニケーションと広報・PR の共通点と違いについて検討する。	事前	事前に配布する講義資料・文献を確認する。（4h）
		事後	講義資料を復習し、個人の関心に応じて追加的に学習を行う。（2h） 重要なキーワード、特に「理解」「専門知」「信頼」の内容を理解する。（2h）

第 5 週	（第 8・9 講）ケーススタディ②：前週までの理解に基づき、実際のサイエンス・コミュニケーション事例を取り上げ、批評を行う。	事前	事前に配布する講義資料・文献を確認する。(4h)
		事後	講義資料を復習し、個人の関心に応じて追加的に学習を行う。(1h) 発表について受けた批評を確認し、良かった点、改善点を整理する。(3h)
第 6 週	（第 10・11 講）ケーススタディ③：想定ケースや実例に基づき、単なるプレスリリースやサイエンスカフェの設計に留まらない、広義のサイエンス・コミュニケーション戦略の設計を疑似体験する。これを通じて、履修者は最終週のプレゼンテーションに向けた構想をまとめる。	事前	事前に配布する講義資料・文献を確認する。(4h)
		事後	講義資料を復習し、個人の関心に応じて追加的に学習を行う。(1h) グループ発表において受けた批評を確認し、良かったところ、改善すべきところを整理する。(3h)
第 7 週	（第 12 講）サイエンス・コミュニケーションに関わる実務・キャリア②（ゲスト講師）（予定）：サイエンス・コミュニケーションの実務について紹介する。 （第 13 講）授業のまとめ：ミニット・ペーパーに寄せられた意見等を紹介し、本授業のまとめ及び履修者との議論を行う。	事前	ゲスト講師の実績等について調べ、確認したい事柄を整理する。(1h) これまでの授業資料を確認し、再確認したいポイントを整理する。(3h)
		事後	講義資料を復習し、個人の関心に応じて追加的に学習を行う。(1h) ディスカッションにおける論点を確認し、最終プレゼンテーションに向けた構想をまとめる。(3h)
第 8 週	（第 14・15 講）最終プレゼンテーション：履修者各自が関心をもつ専門知と社会との信頼関係に係る問題を取り上げ、それを改善するためのサイエンス・コミュニケーションの戦略について発表を行う。	事前	最終レポートを作成する。(5h)
		事後	発表において受けた批評を確認し、良かったところ、改善すべきところを整理し、自身の実務や研究へのリフレクションを行う。(5h)

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義とディスカッションを中心に進行する。上述の通り、「実践」に役立つ定まった理論が存在しない分野なので、特に履修者とのディスカッションを重視する。

教科書・参考書

授業中に適宜紹介するが、参考図書としてハリー・コリンズ，ロバート・エヴァンス（2007＝2020）『専門知を再考する』，名古屋大学出版会．、齋藤純一（2000）『公共性』，岩波書店．を、また映像資料としてアダム・マッケイ監督・脚本（2021=2021）『ドント・ルック・アップ』，Netflix.、同（2015=2016）『マネー・ショート 華麗なる大逆転』，東和ピクチャーズ．を挙げておく。

評価方法

① 議論への参加やミニット・ペーパーの提出等を通じた授業への貢献
② 中間・最終レポートの提出
以上、①（50%）、②（25%×2）の総合評価により判定する。

その他の重要事項

講義内容や各自の研究内容についての相談がある場合は、Teams チャット等で個別にご連絡ください。
なお、教員の事情により一部オンラインとなる可能性があります。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	–	○	–

授業名称	リスク・コミュニケーション特論 B（災害）			科目コード	CDPC0325S
担当教員	橋本 純次	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	月 A
年間開講数	1 回	授業種別	演習	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、学術理論と先行事例の批判的分析を通じて、現代社会における科学技術と災害をめぐるリスク・コミュニケーションのあり方について考えるための知識と方法を身につけることにある。科学技術や災害をめぐるに関するリスク・コミュニケーションにおいては、「相互コミュニケーション」ないし「共考」が肝要であるとされる。しかしながら国内では、地震・原発事故・台風・COVID-19 など、不確実性の高い災害が起こるたびにリスク・コミュニケーション不全を経験している。

本授業では、なぜ国内社会においてリスク・コミュニケーションの理想像が達成されないか、どのような条件のもとであればそうした事柄が達成しうるのかといった事柄について、メディア環境、情動と感情、サイエンスとポピュリズムの相克などの論点から検討していく。なお、本授業ではリスクの民主的管理としての「リスク・コミュニケーション」と、パニックを抑えるための「クライシス・コミュニケーション」を区別し、あくまでも前者の実現可能性を探究していく。公共分野で同様のコミュニケーションに従事する学生のみならず、組織のリスクマネジメントについてこれまでと異なる観点から検討したい学生による履修も歓迎する。

到達目標

① 履修者が、科学技術や災害をめぐるリスク・コミュニケーションに関連する理論について自分の言葉で説明できるようになる。

② 履修者が、科学技術や災害をめぐるリスク・コミュニケーションを実現するためにこれまでに実施されてきた方法論について説明できるようになる。

③ 履修者が、科学技術や災害をめぐるリスク・コミュニケーションを実現するための効果的なコミュニケーション方法を考案し、その限界も含めて自分の言葉で説明できるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）科学技術と災害をめぐるリスク・コミュニケーションの思想と技術：U, Beck『危険社会』から考える	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業での質問事項の検討（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） 指定された文献の精読（1.5h）
第 2 週	（第 2・3 講）疑似科学と災害デマはなぜ信頼されるのか／災害時の「行動変容」はなぜ起こらないのか：行動経済学・科学教育・防災教育・メディアリテラシー教育の限界	事前	授業資料の確認（1h） 指定された文献の精読（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4・5 講）リスク・コミュニケーション理論とメディア論の接続：人間主体のリスク・コミュニケーションのために	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッションの準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 4 週	（第 6・7 講）科学技術をめぐるリスク事案の歴史的展開から考える「予防」の可能性（文献講読 ①）	事前	指定された文献の精読（6h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 5 週	（第 8・9 講）科学技術と災害のリスクにまつわる政策決定における合意形成のあり方	事前	授業資料の確認（1h） 指定された文献の精読（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）

第 6 週	（第 10・11 講）「不確実な災害」をめぐる報道はなにを伝え、なにを伝えないか：東日本大震災と COVID-19 を事例として	事前	授業資料の確認（1h） 指定された文献の精読（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 7 週	（第 12・13 講）文化論や哲学の視点からリスク・コミュニケーションを語るということ：（文献講読 ②）	事前	指定された文献の精読（6h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 8 週	（第 14・15 講）最終プレゼンテーション：リスク事案において「行動変容」を促すコミュニケーションの提言	事前	プレゼンテーションの準備（12h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義、ディスカッションおよび文献講読により進行する。
また履修者は第 14・15 講におけるプレゼンテーション発表に向けた準備に取り組む。課題は「教員の指定した条件において人々に『行動変容』を促す具体的なコミュニケーション手段について、その限界を含めて提言してください」という内容を想定している。

教科書・参考書

教科書は指定しない。文献講読で扱う書籍等については初回の授業で案内する。
参考書：塚原東吾ほか 編著（2022）『よくわかる 現代科学技術史・STS』，ミネルヴァ書房.
青山太郎（2022）『中動態の映像学：東日本大震災を記録する作家たちの生成変化』，堀之内出版.
欧州環境庁（2005 年）『レイト・レッスンズ 14 の事例から学ぶ予防原則』，七つ森書館.

評価方法

① 毎回の授業での議論への貢献とコメントペーパーの提出
② 文献講読での発表
③ 最終プレゼンテーション
以上、①（20%）、②（40%）、③（40%）の総合評価により判定する。
※ 最終プレゼンテーションに出席できない場合は、別日で調整する。

その他の重要事項

担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回授業で説明する。
本授業では、災害経験を呼び起こす内容・記述・画像等を扱う可能性がある。気分が悪くなった場合には適宜退出してかまわない。それにより履修者が評価の面で不利益を被ることはない。
本授業は第 1 週と第 8 週をハイフレックス、第 2 週から第 7 週をオンラインで実施する。

2022 年度科目との読替え

CDPC0325S　リスク・コミュニケーション特論 B

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	–	–	○	–

授業名称	ICT と広報			科目コード	CDPC0311L
担当教員	鶴野 充茂	実施方法	一部オンライン	単位数	1 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	春季集中	曜日	–
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、ICT の発達による急激な時代変化の中で、広報業務をどのように対応させていくかを自ら考えられるように、また業務に ICT をどのように活用していくかについて具体性をもって語れるようになることである。ICT の発達によって広報担当者はデジタル空間や新しいテクノロジーを理解・活用した取組みを進める必要に迫られている。本授業では、広報活動を進める上で ①踏まえておきたい現象とその特性を学び、②時代の変化に対応した広報活動を考える。具体的な最近の事例を数多く見ていき、また、議論を通して、実務において効果的な取り組みにつなげられる知見を得ることをめざす。

到達目標

進化を続ける IT や SNS の現状を踏まえ、

① 履修者がこれからの広報活動におけるインターネット活用のアイデアや応用展開を検討できるようになる。

② 履修者が未来の広報活動の展望を自ら具体的に説明できるようになる。

③ 履修者が、仮に広報経験が乏しかったとしても、IT/SNS が広報業務に与える影響を説明できるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週 2/14（水）	（第 1 講）インターネットと SNS の発展 （第 2 講）SNS の特性理解	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業での質問事項の検討（0.5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習・オンライン議論の参加（2h）
第 2 週 2/21（水）	（第 3 講）デジタルメディアと広報における ICT 活用① （第 4 講）デジタルメディアと広報における ICT 活用②	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッション準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習・オンライン議論の参加（2h）
第 3 週 2/28（水）	（第 5 講）ウェブリスクと危機管理広報① （第 6 講）ウェブリスクと危機管理広報②	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッション準備（1.5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習・オンライン議論の参加（2h）
第 4 週 3/6（水）	（第 7 講）ICT と広報の課題解決と未来展望① （第 8 講）ICT と広報の課題解決と未来展望②	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッション準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習・オンライン議論の参加（2h） 最終レポート執筆（8h）

授業の進め方と方法

- 上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義と討議を併用し、受講生の業種および関心領域に基づく問題提起と全員参加型の討議を行う。また、テーマごとに具体的でタイムリーな事例を紹介するなどして今までの知識を検証し、より深い示唆を得る場とする。
- 授業にタイムリーな話題や事例を盛り込むため、履修者にもデジタル×広報の領域に関連するニュースの情報収集を期待する。
- オンライン議論も組み合わせる。授業での疑問や意見などを授業後に Teams 上でコメントするなどしてオンライン議論も進め、より多面的な見方ができるようにする。
- 授業外の課題として最終レポートの提出を求める。現実の広報課題と ICT を踏まえた解決策の提示、あるいは広報の未来展望をテーマに A4 用紙 2 ページ以下にまとめたものを提出する。最終授業後に〆切を設定。具体的な〆切日や評価の観点などは授業内で提示する。

教科書・参考書
教科書は指定しない。 参考書は以下に加えて授業テーマに即して紹介する。 ・株式会社宣伝会議『月刊広報会議』. ・（公社）日本パブリックリレーションズ協会『広報・マスコミハンドブック PR 手帳』.
評価方法
① 発表、授業への貢献（オンライン議論含む）とコメントペーパーの提出 ② 最終レポート課題 以上の①と②の総合評価（比率は 1:1 とし、対面開講の場合には遠隔地からの受講生、留学生など個別の事情には配慮する）とし、60 点を合格点とする。リアルタイム参加ができない場合も、Teams 上で新たな視点・情報や議論の活性化につながるコメントを評価する。積極的な発言や情報提供を期待する。
その他の重要事項
• オフィスアワーおよび予約の方法については、初回授業で説明する。 • 受講生の広報経験、および IT/SNS の知見それぞれに大きな差があることを踏まえて、授業内では経験を問わずに理解できる事例と考え方や観点の紹介を中心に進める。 • 集中授業の授業間隔の短さの補完を意図して Teams 上のオンラインコメントを有効活用するため、事業時間外のオンライン議論に積極的な参加を求めたい。 • 第 1 週（最初）および第 4 週（最後）はハイフレックス、第 2 週および第 3 週はオンラインで実施予定。
2022 年度科目との読替え
なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	−	○	−

授業名称	グローバル・コミュニケーション			科目コード	CDPC0313L
担当教員	伴野 崇生・関 正雄	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	木 A
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、グローバル・コミュニケーションと履修者自身や所属組織、現代日本社会との関わりについて理論と実践の両面から捉え直し、自らのグローバル・コミュニケーションの実践をよりよいものとしていくことにある。

複雑化・多様化する現代社会において、画一的で紋切り型の文化観、言語観、グローバル観、コミュニケーション観、あるいはグローバル・コミュニケーション観では現実の問題に対処することは難しい。その場、そのとき、その人間関係においてその都度立ち上がるコミュニケーションのリアリティとダイナミクスを捉えていく必要があるわけであるが、だからと言って全て「出たとこ勝負」というのではよりよい実践を目指すことはできない。では、何をどのように考え、どのような態度・姿勢で、どのような方法・関わり方ができるようになっていく必要があるだろうか。本授業では、学期を通じてこの問いについて考えていく。

到達目標

① 履修者がグローバル・コミュニケーションと履修者自身や所属組織、現代日本社会との関わりについて言語化し、グローバル・コミュニケーションをどのように捉えているか他者に説明することができる。
② 履修者がこれまで行ってきたグローバル・コミュニケーション実践について評価し、その実践について意識的に改善を試みることができる。
③ 履修者が、「サステナビリティの経営への統合」や「企業のサステナブル戦略とコミュニケーション」に関する理論や事例について理解し、自らの実務や研究の領域と関連づけながら他者に説明できる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）：グローバルとは、コミュニケーションとは、グローバル・コミュニケーションとは	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッション準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 2 週	（第 2 講）：グローバル人材とコミュニケーション （第 3 講）：グローバル・コミュニケーションと言語・文化	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッション準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4 講）：文化に属する人・人に属する文化 （第 5 講）：認識のフレームとステレオタイプ	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッション準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 4 週	（第 6 講）：サステナビリティの経営への統合とは （第 7 講）：企業のサステナブル戦略とコミュニケーション	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッション準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 5 週	（第 8 講）：ナイキのサステナブル・イノベーション戦略 （第 9 講）：ナイキのサステナビリティレポートを読む	事前	サステナビリティレポートの読解（2h） 発表準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 6 週	（第 10 講）：ユニリーバのサステナブル・リビング・プラン戦略 （第 11 講）：ユニリーバのサステナビリティレポートを読む	事前	サステナビリティレポートの読解（2h） 発表準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 7 週	（第 12 講）：日本における多言語・多文化共生 （第 13 講）：多言語・多文化共生とコミュニケーション	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッション準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）

第 8 週	（第 14 講）: グローバル・コミュニケーション再考 （第 15 講）: よりよいグローバル・コミュニケーションに向けて	事前	授業資料の確認（1.5h） ディスカッション準備（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h） 学期末レポート課題（15h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業はまず第 1 週において、「グローバルとは」「コミュニケーションとは」「グローバル・コミュニケーションとは」について考え、履修者自身の学期開始時における意識や価値観について言語化を行う。これが履修者自身の学期前後の変化・変容を知るための基礎資料となる。
続いて、第 2 週・第 3 週にかけてグローバル・コミュニケーションに関わる政策や理論について概観し、第 4 週、第 5 週、第 6 週にかけて「サステナビリティの経営への統合」「企業のサステナブル戦略とコミュニケーション」に関する理論や実例について学んでいく。また、第 7 週には「内なる国際化」や「多言語多文化社会(化)」について学び、日本国内でのグローバル・コミュニケーションについて考えていく。
第 8 週には、改めてグローバル・コミュニケーションについて考え、学期を通じて何を学び、履修者自身がどのように変わったのか（変わらなかったのか）について言語化・意識化した上で、よりよいグローバル・コミュニケーションについて考えることで未来に向けた展望を得る。
なお、本授業は第 4 週、第 5 週、第 6 週を関が、それ以外を伴野が担当する。毎回の授業は講義だけでなく、グループディスカッションや様々なワークを行っていくので積極的に参加してほしい。

教科書・参考書

教科書は特に指定しない。参考書としては以下を推薦する。

- 関正雄（2011）『ISO26000 を読む -人権・労働・環境･･･社会的責任の国際規格 ISO/SR とは何か』，日科技連.
- 関正雄（2018）『SDGs 経営の時代に求められる CSR とは何か』，第一法規.
- 塚本一郎・関正雄 編（2020）『インパクト評価と社会イノベーション―SDGs 時代における社会的事業の成果をどう可視化するか―』，第一法規.

評価方法

毎回の授業貢献度（20%）、毎回のコメントペーパー（40%）、学期末レポート（40%）による総合評価。

その他の重要事項

オフィスアワーの予約方法など、詳しくは初回の授業で説明いたします。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	–	○	–

授業名称	SDGs の理論と実践			科目コード	CDPC0307L
担当教員	鶴田 佳史	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	火 A
年間開講数	1 回	授業種別	講義	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、①SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）についての基礎的な知識を得ること、②最新の情報を通じて SDGs についての理解を深めること、③SDGs の社会実装について考察することである。さらに、SDGs の概念を活用したステークホルダーとのコミュニケーション（SDGs コミュニケーション）について一緒に検討していく。

到達目標

① 履修者が SDGs の 17 のゴールと 167 のターゲットについて説明できるようになる。
② 履修者が SDGs の国内外の最新情報にアクセスできるようになる。
③ 履修者が社会において SDGs が活用されている事例をあげることができるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）SDGs とはなにか：SDGs の背景、概念の整理	事前	授業資料の確認（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 2 週	（第 2 講）SDGs は実現できるのか①：SDGs の目的について考える （第 3 講）SDGs は実現できるのか②：SDGs の射程について考える	事前	授業資料の確認（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4 講）SDGs の社会実装とは①：SDGs の社会実装とは何かについて考える （第 5 講）SDGs の社会実装とは②：SDGs の社会実装の活動事例について考える	事前	授業資料の確認（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h） 小レポート課題（6h）
第 4 週	（第 6 講）SDGs と企業①：企業における活動事例について考える （第 7 講）SDGs と企業②：企業における活動事例を整理する	事前	授業資料の確認（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 5 週	（第 8 講）SDGs と情報開示とは①：非財務情報の開示について考える （第 9 講）SDGs と情報開示とは②：ESG 投資やインパクトファイナンスについて考える	事前	授業資料の確認（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 6 週	（第 10 講）SDGs コミュニケーションとは①：SDGs コミュニケーションの目的について考える （第 11 講）SDGs コミュニケーションとは②：SDGs コミュニケーションの位置づけとその展開について考える	事前	授業資料の確認（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 7 週	（第 12 講）SDGs の実践とは①：SDGs は現在どのように社会で実践されているのかについて考える （第 13 講）SDGs の実践とは②：SDGs を今後どのように社会で実践されていくのかについて考える	事前	授業資料の確認（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h） 最終レポート課題（16h）

第 8 週	（第 14 講）まとめ①：履修者によるレポート発表を通じて自らの業務と SDGs との関係について考える （第 15 講）まとめ②：講義の総括を通じて SDGs について理解を深める	事前	最終レポート発表の準備（5h）
		事後	自分と他の履修者の最終レポートのふりかえり（5h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は主に講義とディスカッションにより進める。
また、ディスカッションでは、履修者は、自らの業務等と SDGs との関係を意識して自由に話し合うことで、SDGs の社会実装についての具体的なヒントやアイデアを得ることを目的としている。
授業終了 1 週間後を目処に、感想、質問を記入したミニットペーパーを提出する。

教科書・参考書

教科書は指定しないが、適宜、レジメや資料を配付する。
参考書・参考資料：
・国際連合（2015）「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」.
・GRI、国連グローバル・コンパクト、持続可能な開発のための世界経済人会議（2016）「SDG Compass」.
・蟹江憲史（2020）『SDGs（持続可能な開発目標）』，中央公論新社.
・ロックストローム，J.，M.クルム，武内和彦・石井菜穂子監修，谷淳也翻訳（2018）『小さな地球の大きな世界 プラネタリー・バウンダリーと持続可能な開発』，丸善出版.
・斎藤幸平（2020）『人新世の“資本論”』，集英社.
・村上芽・渡辺珠子（2019）『SDGs 入門』，日本経済新聞出版.

評価方法

①授業・ディスカッションへの参加度（授業内でのディスカッション、授業後のミニットペーパー）（50%）
②最終レポート（50%）
以上、①・②により総合的に成績を評価する。

その他の重要事項

担当教員のオフィスアワーおよび連絡方法については、初回の授業で案内する。
授業は、原則ハイフレックスで行う。オンラインで実施する場合には、事前に案内する。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	○	○	−

授業名称	オーディエンス・リサーチ			科目コード	CDPC0319S
担当教員	橋本 純次	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	後期	曜日	木 A
年間開講数	1 回	授業種別	演習	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、学術理論と先行研究の批判的分析を通じて、複雑化した現代社会において「オーディエンス」を捉えるための方法を身につけることにある。オーディエンス、あるいは「受け手」なるものは、もはや固定的・集合的な存在ではなく、その多様性を前提とした調査を設計しなければ、説得力のある適切な結果を得ることは不可能である。本授業は、オーディエンス・受け手・消費者を対象とした研究成果報告書を執筆したいと考える 1 年次院生、現在執筆している研究成果報告書にこうした視点を付加したい 2 年次院生のほか、学術領域としてのオーディエンス・リサーチに関心を持つすべての院生による履修を歓迎する。

到達目標

① 履修者が、オーディエンス・リサーチの理論に関する基礎知識を修得する。
② 履修者が、オーディエンスを捉えるための研究方法を修得する。
③ 履修者が、特定のオーディエンスを対象とした調査を設計できるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）オーディエンスの多様性とオーディエンス・リサーチの歴史的展開	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業での質問事項の検討（0.5h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 2 週	（第 2・3 講）オーディエンス・リサーチの理論：メディア効果論、利用と満足研究、カルチュラル・スタディーズ	事前	授業資料の確認（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4・5 講）オーディエンス・リサーチの分析方法：コーディングの基礎／SCAT と M-GTA の実践を中心に	事前	授業資料の確認（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h） 調査設計書の作成（1.5h）
第 4 週	（第 6・7 講）オーディエンス・リサーチの設計方法：「絞り込み」、「想像する」ための視点	事前	授業資料の確認（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h） 調査設計書の作成（1.5h）
第 5 週	（第 8・9 講）先行研究の分析Ⅰ：ファン・オーディエンスの理論的系譜	事前	授業資料の確認（1h） 指定された論文の精読（3h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h） 調査設計書の作成（1.5h）
第 6 週	（第 10・11 講）先行研究の分析Ⅱ：「情報社会」と「デジタル・ネイティヴ」の批判的検討	事前	授業資料の確認（1h） 指定された論文の精読（3h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h） 調査設計書の作成（1.5h）
第 7 週	（第 12・13 講）先行研究の分析Ⅲ：オーディエンス・リサーチのデザイン	事前	授業資料の確認（1h） 論文の検索および精読（3h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h） ディスカッションの復習（2h） 調査設計書の作成（2h）

第 8 週	（第 14・15 講）最終プレゼンテーション：調査設計書の発表および議論	事前	調査設計・調査趣意書の完成（14h）
		事後	コメントペーパーの提出（1h）

授業の進め方と方法
上記目的・到達目標を達成するため、本授業は第 1 週から第 4 週までを講義とディスカッション、第 5 週以降を演習形式で行う。また、オーディエンス・リサーチに関連する論文を精読する演習を設ける。最終的に各履修者においてオリジナルの「調査設計書」と「調査趣意書」を完成させるための指導を行う。
教科書・参考書
教科書は指定しない。講読するための論文等については授業の中で適宜示す。 参考書として以下の二冊を推薦する。 ・Brooker, W. (ed.) (2002) *The Audience Studies Reader*. London: Routledge. ・バージニア・ナイチンゲール, カレン・ロス（2007）『メディアオーディエンスとは何か』, 新曜社.
評価方法
① 毎回の授業での議論への参加とミニットペーパーの提出 ② 第 8 週に行う個人プレゼンテーションでの発表 以上、①（40%）、②（60%）の総合評価により判定する。 ※ 個人プレゼンテーションに出席できない場合は、別日で調整する。
その他の重要事項
担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回の授業で説明する。 授業内容のほか、履修者が各自の研究成果報告書で用いる研究方法についての相談も受けつける。 本授業は第 1 週と第 8 週をハイフレックス、第 2 週から第 7 週をオンラインで実施する。
2022 年度科目との読替え
なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	−	−	○

授業名称	情報戦略論			科目コード	CDPC0321L
担当教員	北島 純	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期	曜日	水 A
年間開講数	1 回	授業種別	演習	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、履修者が「社会情報を収集・分析・評価する技法」（インテリジェンス）の基本的な知識および処理フレームを身につけることにある。国内外の事例（ケース）を題材にしながら、「公開情報」をいかに収集し、客観的な分析を加え、適切に評価するかという技法（OSINT）や「人的情報」の処理技法（HUMINT）を、関連する国際政治・外交、危機管理・リスクマネジメント、コンプライアンス、広報・情報発信等の基礎知識とともに学んでいく。

膨大な情報があふれる現代社会で、フェイクニュースに惑わされることなく冷静沈着かつ適切に情報を処理していくためには、インテリジェンスの技法と戦略は不可欠である。特にビジネスパーソンにとって、インテリジェンスはマーケティングと並ぶ武器となる。例えば企業の広報戦略はインテリジェンスなしにはあり得ない。コミュニケーションを基軸とした社会構想の実現のためには、個人・組織・社会・国家間のコミュニケーション（情報交通）をどうデザインするかという「俯瞰的、戦略的な視点」と、公開情報や人的情報の「真意」を措定し、情報の「含意」を構想する「個別的な情報処理の技法」が不可欠である。本授業では、外交・安全保障等においてこれまで蓄積されてきた戦略論と情報論の知見を参照しつつ、各種のメディア（新聞・雑誌・テレビ・ラジオ・ネット等）で報じられた社会的事件に関する具体的なケーススタディを通じて、戦略性を志向した情報処理と情報発信の実践的技法を検討していく。

到達目標

① 履修者が、社会情報を収集・分析・評価する基本的処理フレームを習得できるようになる。
② 履修者が、習得した社会情報処理フレームをもとに、社会事象を客観的に分析できるようになる。
③ 履修者が、自らや自らの属する組織が採るべき方針を立案できるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）なぜ「情報戦略」が必要か（インテリジェンス論の基礎）	事前	シラバスの精読（0.5h） 授業における質問事項の検討（1h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）
第 2 週	（第 2・3 講）情報収集の基礎 I ―フェイクニュース時代において膨大な公開情報をいかにして効率的に活用するか（OSINT）	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4・5 講）情報収集の基礎 II ―仮想化時代において人的情報をいかに活用するか（HUMINT）	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）
第 4 週	（第 6・7 講）情報分析の基礎 I ―原典に遡って社会情報を分析する技法（遡及的分析）	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）
第 5 週	（第 8・9 講）情報分析の基礎 II ―他事例、外国事例、歴史事例と比較しながら社会情報を分析する技法（比較分析）	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）
第 6 週	（第 10・11 講）情報評価の基礎 I ―社会情報に潜む意図を見抜く評価技法（真意の措定）	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）

第 7 週	（第 12・13 講）情報評価の基礎 II ―社会情報を社会構想につなげる評価技法（含意の構想）	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h）
第 8 週	（第 14・15 講）情報戦略と倫理 ―情報の戦略的処理と倫理	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	コメントペーパーの提出（0.5h） ディスカッションの復習（2h） 最終レポート課題（21h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は講義及びディスカッション（ディベート含む）を中心に進行する。履修者は、学んだ内容が「自らの実務や社会構想と具体的にどのように関係するか」等の事柄について「コメントペーパー」に記入し、毎回の授業終了後、速やかに提出する。

なお、専門家をゲスト講師として招聘し議論を深める予定である。

教科書・参考書

教科書：指定しない。

参考書：小林良樹（2014）『インテリジェンスの基礎理論』，立花書房.

：小林良樹（2021）『なぜ、インテリジェンスは必要なのか』，慶應義塾大学出版会.

小谷賢（2012）『インテリジェンス ―国家・組織は情報をいかに扱うべきか』，筑摩書房.

マーク・ローエンタール（2011）『インテリジェンス ―機密から政策へ』，慶應義塾大学出版会.

評価方法

① 毎回の授業における議論への参加とコメントペーパーの提出

② 最終課題の提出

総合的な評価（①60%、②40%）により判定する。

その他の重要事項

担当教員のオフィスアワー・予約方法については、初回の授業で説明する

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	○	−	−	−

授業名称	コミュニケーションデザイン演習 1			科目コード	CDPD04n1T
担当教員	川山 竜二	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位・2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期・後期	曜日	月 B
年間開講数	2 回	授業種別	演習	授業区分	選択必修

授業の目的

本授業の目的は、履修者がコミュニケーションデザイン研究科の修了要件となっている「研究成果報告書」を執筆し完成させること（の支援・教育研究指導）である。この演習では、履修者の問題関心に基づいて議論することにくわえて、自身が実践の場において還元しようとする「実践の理論」を履修者自身の手で創造することを目指している。

想定されるテーマとしては、人的資本（人的資源）、教育・研修、知識経済、コミュニケーションを学問的観点から俯瞰することなどに関するものなどは特に歓迎するが上記の限りではない。履修を希望する者は、あらかじめ相談すること。

到達目標

① 履修者が「研究成果報告書」を執筆し完成させること、また口頭試問に耐えうる知見を蓄えること。
② 履修者の「研究成果報告書」を第三者が読んだときに「この研究成果報告書の書き手は、コミュニケーションデザインの高度専門職業人である」と認識させるような実務的な研究能力を身につけていること。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	**（第 1 講）前期イントロダクション** 現在の問題関心や各履修者の研究構想を確認する。また、研究進捗状況の共有や 1 年間のスケジュールを確認する。	事前	前期研究計画書の執筆（3h）
		事後	履修生同士の相互レビュー（1h）
第 2 週	**（第 2・3 講）研究成果報告書の研究計画** 各履修者の研究計画をレビューし、今後の研究の方向性について討議する。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）
第 3 週	**（第 4・5 講）先行研究レビュー１** 各履修者の問題関心に応じて、一編の論文・報告書（それに相当する書籍の 1 章分相当）を読み、発表する。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）
第 4 週	**（第 6・7 講）先行研究レビュー２** 各履修者の問題関心に応じて、一編の論文・報告書（それに相当する書籍の 1 章分相当）を読み、討議する。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）
第 5 週	**（第 8・9 講）研究成果報告書のスケルトン１** 各履修者の研究成果報告書のスケルトンを発表し、論文の構造をより精緻なものにするために討議する。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）
第 6 週	**（第 10・11 講）研究成果報告書のスケルトン２** 各履修者の研究成果報告書のスケルトンを発表し、論文の構造をより精緻なものにするために討議する。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）
第 7 週	**（第 12・13 講）主要仮説の検討１** 研究成果報告書における主要な仮説を整理し、その妥当性について議論する。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）

第 8 週	**（第 14・15 講）主要仮説の検討２** 研究成果報告書における主要な仮説を整理し、その妥当性について議論する。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）
第 9 週	**（第 16 講）後期イントロダクション** 夏季休暇や中間報告会などでの助言を踏まえ、研究成果を共有する。	事前	後期研究計画書の執筆（3h）
		事後	履修生同士の相互レビュー（1h）
第 10 週	**（第 17・18 講）研究成果報告書のスケルトン再検討１** 各履修者の研究成果報告書のスケルトンについての変更状況について検討する。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）
第 11 週	**（第 19・20 講）研究成果報告書のスケルトン再検討２** 各履修者の研究成果報告書のスケルトンについての変更状況について検討する。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）
第 12 週	**（第 21・22 講）研究成果報告書指導１** 各履修者の残された課題を抽出し、具体的にどのように論文に落とし込むのかを検討する。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）
第 13 週	**（第 23・24 講）研究成果報告書指導２** 各履修者の残された課題を抽出し、具体的にどのように論文に落とし込むのかを検討する。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）
第 14 週	**（第 25・26 講）研究成果報告書指導３** 各履修者の残された課題を抽出し、具体的にどのように論文に落とし込むのかを検討する。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）
第 15 週	**（第 27・28 講）研究成果報告書指導４** 各履修者の残された課題を抽出し、具体的にどのように論文に落とし込むのかを検討する。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）
第 16 週	**（第 29・30 講）研究発表準備** 口頭発表練習を通じて、1 年間の成果を確認しつつ、自身の研究を他者に伝える。	事前	プログレスレポートの執筆（2h）
		事後	履修者同士の相互レビュー（1h） リサーチワーク（5h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業はそれぞれの履修者の関心にあわせた研究の進捗状況の管理と助言指導が主となる。研究成果報告書は、演習に出席すれば自動的に完成するものではなく履修者が自律的に執筆するものである。履修者の人数により変動はあるものの、9 回は発表することになる。初回授業で詳しく述べるが、授業ごとにプログレスレポート（A４サイズ 1〜2 枚）を作成することを求める。また、自身の発表だけでなく、他者の発表に対してもコメントをすること。くわえて演習の進行は、履修者が行う。課外指導として、月 1 回 30 分の研究指導日を設ける。

教科書・参考書

教科書は指定しない。
以下、研究手法や論文執筆についての参考図書を列記する。
ウェイン・C・ブースら（2018）『リサーチの技法』、ソシム。
デイビッド・コフラン（2021）『実践アクションリサーチ』、碩学舎。

松浦年男・田村早苗（2022）『日本語パラグラフ・ライティング入門』、研究社。
小熊英二（2022）『基礎からわかる 論文の書き方』、講談社現代新書。
近江幸治（2022）『学術論文の作法 第３版』、成文堂。
スティーヴン・ヴァン・エヴェラ（2009）『政治学のリサーチ・メソッド』、勁草書房。
川﨑剛（2010）『社会科学系のための「優秀論文」作成術――プロの学術論文から卒論まで』、勁草書房。

評価方法

「研究成果報告書」にあわせた研究、執筆について評価をする。前期の中間評価については、発表時に用意したレジュメに基づいて評価する。精確（精密で的確）なレジュメを評価する。
《前期の中間評価》
１，自分自身の発表内容（50%）
２，プログレスレポート（30%）
３，他者との討議（20%）
《後期・総合評価》
１，研究成果報告書の完成度（70%）：ルーブリックに準拠
２，中間評価と同様の基準（30%）

その他の重要事項

コンタクトならびにオフィスアワーについて
〇メールではなく、Microsoft Teams のチャット機能で連絡をすること（相談内容については問わない）。
〇授業 Team のタブにオフィスアワー予約ページを作成しているので、そちらから予約を取ること（予約優先）。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	－	－	－	○

授業名称	コミュニケーションデザイン演習 2			科目コード	CDPD04n2T
担当教員	柴山 慎一	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位・2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期・後期	曜日	木 B
年間開講数	2 回	授業種別	演習	授業区分	選択必修

授業の目的

本授業の目的は、企業等の組織における様々なステークホルダーとの間のコミュニケーション戦略のあり方について学び合い、研究成果報告書を取りまとめることである。あらゆる組織にとって、コミュニケーションは組織をマネジメントするうえで最重要なテーマである。組織内部を効率的かつ効果的にマネジメントするためにはインターナルコミュニケーション（IC）が経営の中核テーマとなる。トップマネジメントが IC を経営の中核的企業活動の一つに捉え、日常的な経営の仕組みに組み込み、経営戦略を効果的に実行できるようにしていることを「IC 経営」と呼んでいる。また、同様にして、組織内部はもちろんのこと、顧客や社会などの組織外部をも巻き込んだマネジメントを展開するうえで必要なコーポレートコミュニケーション（CC）を経営の中核に据えて仕組み化しているような経営を「CC 経営」と呼んでいる。

いずれの考え方も、広報活動をより広範に捉え、マネジメントの中核に位置付けて組織運営、企業経営に有機的に結びつけるような考え方である。このような枠組みで、企業などの組織体におけるコミュニケーションをマネジメントと一体として考えるような研究活動を進めていく。

研究テーマは、組織全般における、ステークホルダー全体に対するコミュニケーションを対象にするようなものから、ステークホルダーを、株主・投資家に絞り込んだ研究であれば「IR」をテーマにすることもある。

到達目標

履修者が上記のような考え方の下で、各自の研究テーマを設定し「研究成果報告書（2 年次）」「研究計画書（1 年次）」を仕上げること。「研究成果報告書」は、所属組織、関連業界に対して実務的に提言できるレベルのコミュニケーション戦略等の立案、コミュニケーション理論・モデル等の構築を目指すものとする。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）オリエンテーション　～各自の関心領域、研究テーマの共有（秋入学生については、半年シフトした進行となる）	事前	研究計画のとりまとめ（2h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（2h）
第 2 週	（第 2・3 講）専門書読破とゼミ内共有①　～各自の関心テーマ、研究テーマの中核に位置付けられるバイブルとなるような一人 1 冊の報告と議論	事前	専門書読破と内容の整理（5h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（3h）
第 3 週	（第 4・5 講）専門書読破とゼミ内共有②　～各自の関心テーマ、研究テーマの中核に位置付けられるバイブルとなるような一人 1 冊の報告と議論	事前	専門書読破と内容の整理（5h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（3h）
第 4 週	（第 6・7 講）研究成果報告書（研究計画書）の発表１～仮説と研究計画の確定（中間発表準備と夏休みの活動計画まで）および調査活動の方法論確定	事前	発表準備（3h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（2h）
第 5 週	（第 8・9 講）研究成果報告書（研究計画書）の発表２～仮説と研究計画の確定（中間発表準備と夏休みの活動計画まで）および調査活動の方法論確定	事前	発表準備（3h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（2h）
第 6 週	（第 10・11 講）研究成果報告書（研究計画書）の発表３～初期調査結果の進捗報告および調査活動の修正・確認	事前	発表準備（5h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（5h）

第 7 週	（第 12・13 講）研究成果報告書（研究計画書）の発表４～初期調査結果の進捗報告および調査活動の修正・確認	事前	発表準備（5h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（5h）
第 8 週	（第 14・15 講）同演習修了生参加の拡大オープンゼミでの発表	事前	発表準備（5h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（5h）
第 9 週	（第 16 講）夏季休暇中の進捗報告会	事前	発表準備（5h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（2h）
第 10 週	（第 17・18 講）研究成果報告書（1 年次は研究計画書）の完成を目指した発表と議論①：主に前半部分～調査結果部分について	事前	発表準備・背景～先行研究（5h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（2h）
第 11 週	（第 19・20 講）研究成果報告書（1 年次は研究計画書）の完成を目指した発表と議論②：主に前半部分～調査結果部分について	事前	発表準備・背景～先行研究執筆（5h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（2h）
第 12 週	（第 21・22 講）研究成果報告書（1 年次は研究計画書）の完成を目指した発表と議論①：主に仮説・検証部分について	事前	発表準備・調査周辺執筆（5h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（2h）
第 13 週	（第 23・24 講）研究成果報告書（1 年次は研究計画書）の完成を目指した発表と議論②：主に仮説・検証部分について	事前	発表準備・調査周辺執筆（5h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（2h）
第 14 週	（第 25・26 講）研究成果報告書（1 年次は研究計画書）の完成を目指した発表と議論①：主に結論部分について	事前	発表準備・終章までの執筆（5h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（2h）
第 15 週	（第 27・28 講）研究成果報告書（1 年次は研究計画書）の完成を目指した発表と議論②：主に結論部分について	事前	発表準備・終章までの執筆（5h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（2h）
第 16 週	（第 29･30 講）同演習修了生参加の拡大オープンゼミでの発表（模擬発表会）	事前	発表準備（5h）
		事後	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ事項の整理と再構築（6h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は研究領域に関する専門書を各自一冊読破し、その内容を共有することからスタートする。中盤には、先行研究から事例研究、取材、アンケートなどのフィールドワークを経て結論の導出を目指す。いずれも、ゼミ生個人の自主的な研究が中心となるが、ゼミ生同志の切磋琢磨を通じてチームとしてのゼミ全体のレベル向上を目指す。ゼミ活動は、個人戦というよりは団体戦である。

特に、1 年次においては基礎力の充実を図りつつ、研究計画書を策定していく。その際、2 年次の研究の進捗を伴走することを通じて、自らの研究に対して参考にできるものが定着することを目指す。修了生の参加する「オープンゼミ」では、初見の専門家が感じる疑問や課題からの示唆を得ることができる。ここから得るものは多く、本ゼミ修了者は、縦のつながりにおいて、後輩に「恩送り」していくことの大切さも学んでほしい。

教科書・参考書

必要に応じて個別に提示する。

評価方法

「研究成果報告書（2 年次）」、「研究計画書（1 年次）」（80%）。他のゼミ員の研究への貢献（20%）

その他の重要事項

ゼミ活動は「団体戦」であると認識し、相互に貢献し合うこと。
オフィスアワーは土日（要予約）に実施。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	–	–	–	○

授業名称	コミュニケーションデザイン演習 3			科目コード	CDPD04n3T
担当教員	伊吹 英子	実施方法	一部ハイフレックス	単位数	2 単位・2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期・後期	曜日	土 B（3・4 限）
年間開講数	2 回	授業種別	演習	授業区分	選択必修

授業の目的

本授業の目的は、各履修者が着目する自身の研究テーマについて、履修者間による相互討議と本授業におけるアドバイスを踏まえて研究内容の改善及び充実を図り、「研究成果報告書」を完成させることである。併せて、履修者が討議を交わすことにより、多様な研究テーマへの相互理解を深め、各自の研究テーマへの学びとすることも期待する。なお、1 年次の履修者は、「研究成果報告書執筆計画」を対象として進める。

近年、企業と社会の関係性に関わる研究テーマは、急速な進展を迫られている。気候変動をはじめとする多様な社会課題が深刻化・複雑化し、企業を取り巻く外部動向は刻々と変化している。CSR、SDG s 、ESG、サステナビリティ、気候変動、パーパス等のテーマは、近年、経営・事業・コミュニケーション戦略上の中核テーマとして位置づけられ、企業経営や事業展開においても、考慮せざるを得ない重要テーマとなっている。企業には、従来に増して社会性をより重視した各種の対応が求められている。当然のことながら、組織内外のコミュニケーション活動においても社会性を重視する必要が生じている。更に、当該テーマをより積極的に捉え、ブランディングやマーケティング、従業員エンゲージメント、IR などの各経営テーマにおけるコミュニケーション・ゴールを達成するために戦略的に活用・応用していくこともできるようになった。

本授業では、担当教員の過去 20 年にわたる当該分野でのコンサルティング経験や調査・研究活動で蓄積された知見等を踏まえ、研究課題設定の妥当性や研究分析方法、研究成果の活用可能性などの観点からアドバイスを行う。なお、本授業は上記を中心テーマとして展開するが、履修者の研究テーマは上記のみに特化することなく、実務面での応用を目指し、各自の関心・行う領域を中心に幅広なスコープから設定して構わない。

到達目標

①履修者が、実務面で発展的に応用・活用できる水準の研究成果報告書を完成させる。

②履修者が、授業内での履修者相互のコミュニケーションを通じて、自身の研究への示唆を得ると共に、他履修者による研究プロセスに積極的に関わることにより、関連分野での知見や見識を深める。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）各履修者の「研究成果報告書執筆計画」の共有 （1 年次は、開始時における関心領域）	事前	研究成果報告書執筆計画もしくは各自の関心領域の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（3h）
第 2 週	（第 2・3 講）論点設定と研究成果報告書の骨格検討① （1 年次は、研究成果報告書執筆計画、以下同様）	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）
第 3 週	（第 4・5 講）論点設定と研究成果報告書の骨格検討②	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）
第 4 週	（第 6・7 講）論点設定と研究成果報告書の骨格検討③	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）
第 5 週	（第 8・9 講）論点設定と研究成果報告書の骨格検討④	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）

第 6 週	（第 10・11 講）論点討議と中間報告会に向けた経過報告①	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）
第 7 週	（第 12・13 講）論点討議と中間報告会に向けた経過報告②	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）
第 8 週	（第 14・15 講）論点討議と中間報告会に向けた経過報告③	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）
第 9 週	（第 16 講）中間報告会を踏まえた研究課題および対応方針の確認	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）
第 10 週	（第 17・18 講）研究課題の深化および研究成果報告書の執筆経過の共有①	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）
第 11 週	（第 19・20 講）研究課題の深化および研究成果報告書の執筆経過の共有②	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）
第 12 週	（第 21・22 講）研究課題の深化および研究成果報告書の執筆経過の共有③	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）
第 13 週	（第 23・24 講）研究成果報告書の執筆経過の共有および完成に向けた最終課題の確認①	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）
第 14 週	（第 25・26 講）研究成果報告書の執筆経過の共有および完成に向けた最終課題の確認②	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）
第 15 週	（第 27・28 講）研究成果報告書の執筆経過の共有および完成に向けた最終課題の確認③	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	討議内容の各自の研究成果への反（4h）
第 16 週	（第 29・30 講）研究成果の実務への展開・展望に関する討議	事前	研究報告内容の検討（3h） 他履修者の研究経過の事前確認（1h）
		事後	研究成果報告書／研究計画書の完成（必要に応じて）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は、履修者による「研究成果報告書」（1 年次の場合は「研究成果報告書執筆計画」）の研究・執筆状況の報告および、履修者による内容討議により構成する。また、17 講以降は、状況に応じて個別相談を中心として推進することも想定している。

教科書・参考書				
教科書は使用しないが、参考となる文献やレポートは授業内で、適宜紹介する。参考図書として、 ・伊吹英子（2014）『新版 CSR 経営戦略:「社会的責任」で競争力を高める』，東洋経済新報社. ・伊吹英子・古西幸登（2022）『ケースでわかる 実践パーパス経営』，日本経済新聞出版.				
評価方法				
到達目標に掲げる観点を踏まえた上で、①「研究成果報告書」（1 年次の場合は「研究成果報告書執筆計画」）の完成に向けた研究・執筆内容、②各回授業における討議参加による貢献による。 以上、①（60%）、②（40%）の総合評価により判定する。				
その他の重要事項				
必要があれば、授業時間外での研究・執筆の相談に応じる。履修者の状況を踏まえ、適宜、相談の上、進めることとする。本授業は年 4 回程度（予定では第 1 週、第 8 週、第 9 週、第 16 週）をハイフレックス、他をオンラインで実施する。				
2022 年度科目との読替え				
なし。				
本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	−	−	○

授業名称	コミュニケーションデザイン演習 4			科目コード	CDPD04n4T
担当教員	牧瀬 稔	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位・2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期・後期	曜日	土 A（3・4 限）
年間開講数	2 回	授業種別	演習	授業区分	選択必修

授業の目的

本授業の目的は、次の３点である。①研究成果報告書を完成させる。②研究成果報告書の口頭諮問において十分に説明できるようにする。③①と②の前提として十分な研究計画書を完成させる。今日、コミュニケーションデザインは多様な捉え方がある。その中で、本授業は地方自治体と関係者との関係性に重きを置く。キーワードは地方創生、地域づくり、地域振興などである。特に、本授業は社会実装を目指した研究に力点を置く。

到達目標

① 履修者が事象を的確に考察し分析できるようになる（考察力・分析力）。
② 履修者が正しい文章で相手に対して説明できるようになる（文章力・説明力）。
③ 履修者①と②を踏まえ、課題解決に向けた社会実装の能力を高められるようになる（社会実装力）。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）ガイダンス（前期の進め方の確認）、論文の意味	事前	シラバスの精読（1h） 授業での質問事項の検討（1h）
		事後	授業の復習（2h）
第 2 週	（第 2 講）問題視角の捉え方 （第 3 講）研究成果報告書案の発表・意見交換 ①	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 3 週	（第 4 講）調査研究の分析方法 （第 5 講）研究成果報告書案の発表・意見交換 ②	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 4 週	（第 6 講）先行研究の視点 （第 7 講）研究成果報告書案の発表・意見交換 ③	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 5 週	（第 8 講）アンケート調査の視点 （第 9 講）研究成果報告書案の発表・意見交換 ④	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 6 週	（第 10 講）ヒアリング調査の視点 （第 11 講）研究成果報告書案の発表・意見交換 ⑤	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 7 週	（第 12 講）文章作成の視点 （第 13 講）研究成果報告書案の発表・意見交換 ⑥	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 8 週	（第 14 講）プレゼン資料作成の視点 （第 15 講）前期授業のまとめ	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案準備（2h）
		事後	本授業全体の復習（8h） 研究成果報告書案の修正（8h）
第 9 週	（第 16 講）ガイダンス（後期の進め方の確認）、進捗状況の確認	事前	シラバスの精読（1h） 授業での質問事項の検討（1h）
		事後	授業の復習（2h）
第 10 週	（第 17 講）研究視点の確認 （第 18 講）研究成果報告書案の発表・意見交換 ①	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 11 週	（第 19 講）調査分析手法の確認 （第 20 講）研究成果報告書案の発表・意見交換 ②	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）

第 12 週	（第 21 講）論理展開の確認 （第 22 講）研究成果報告書案の発表・意見交換 ③	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 13 週	（第 23 講）文章及び論理構成の確認 （第 24 講）研究成果報告書案の発表・意見交換 ④	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 14 週	（第 25 講）結論の妥当性の確認 （第 26 講）研究成果報告書案の発表・意見交換 ⑤	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 15 週	（第 27 講）研究成果報告書案の実現性の確認 （第 28 講）研究成果報告書案の発表・意見交換 ⑥	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案準備（2h）
		事後	授業の復習（2h）
第 16 週	（第 29 講）研究成果報告書案の最終報告 （第 30 講）本授業の全体まとめ	事前	授業資料の精読（2h） 研究成果報告書案準備（2h）
		事後	本授業全体の復習（8h） 研究成果報告書案の完成（8h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業の 30 講は前期（第 1 週から第 8 週まで）と後期（第 9 週から第 16 講）に分けて実施する。前期は基本的に履修生全員が集まり演習を実施する。研究の技法等を講師から講義を行い、同時に履修生が発表し、意見交換（ディスカッション）を行う。ゲスト講師として、シンクタンク研究員による調査手法の講義や、PowerBI あるいは Tableau の活用方法の講義も予定している。
後期は履修生と個別に対応していく予定である。原則、ゼミナールの時間帯に行うが、適宜、別途時間を設定し、履修生と個別に対応し、研究成果報告書を作成していく。
研究成果報告書は、既存研究に新しい知見を与え、かつ読まれることを意識したい。そのために、論理展開に関する指導に加え、文章の書き方、アンケート調査やヒアリング調査の作法なども指導する。過去の履修生の中には、学会（学術団体）の発表を行った。別の履修生は雑誌等に論考を寄稿した。今年度も履修生と相談して、学会発表等に取り組みたい（前向きに取り組んでいただけたら幸いである）。

教科書・参考書

教科書は指定しない。参考書は、①伊丹敬之（2001）『創造的論文の書き方』，有斐閣．②妹尾堅一郎（1999）『研究計画書の考え方』，ダイヤモンド社．とする。

評価方法

前期・後期ともに、①研究成果報告書に関する発表２～３回程度（60%）、②研究成果報告書の作成（40%）、とする。授業出席（特に前期）と、演習での意見交換への参加は前提である。

その他の重要事項

担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、第 1 週と第 9 週の授業で説明する。
本授業は、第 1 週、第 8 週、第 9 週、第 16 週をハイフレックスとする。残りの週は、原則として、オンラインで実施する。ただし、履修生と相談して、ハイフレックスの週（回）を設定することがある。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	－	－	－	○

授業名称	コミュニケーションデザイン演習 5			科目コード	CDPD04n5T
担当教員	広木 隆	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位・2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期・後期	曜日	土 B（1・2 限）
年間開講数	2 回	授業種別	演習	授業区分	選択必修

授業の目的

本授業の目的は履修者が「コミュニケーションデザイン修士（専門職）」の学位を授与されるにふさわしい研究成果報告書を完成させること、またはその前提として十分な研究計画書を完成させることにある。専門職大学院において説得力・実効性のある研究成果報告書を作成するためには、「理論と実践の融合」の発想が必要不可欠であり、本授業では経済全般を研究対象としつつ、中でも企業活動や企業経営の分野における様々なテーマについて、「理論と実践」の両者を架橋するための視座と能力を院生相互の学び合いのなかで提供する。
担当教員の専門は金融資本市場の分析であるが、マーケットには経済のあらゆる事象や側面が反映される。従って、担当教員自身のこれまでの研究領域は企業の生産性分析や人的資本などの無形資産投資、デジタル・トランスフォーメーション（ＤＸ）、ＥＳＧ、資本のリターンと格差など多岐にわたり、分析のフレームワークも典型的なファンダメンタルズ分析から計量経済学的なアプローチ、行動ファイナンスに至るまで幅広くカバーしている。履修者の研究テーマも「コミュニケーションデザイン」を根幹に位置付けることを前提に、広範なスコープで探求されることが望ましい。履修者が研究成果報告書/研究計画書を作成するための調査手法については、担当教員の調査実務経験を活かして履修者に的確にアドバイスしていく。

到達目標

① 履修者が自身の関心に応じて実務上ないし理論上の課題を自ら発見し、論理的かつ実効的な解決方法を提言できるようになる。
② 履修者が研究成果報告書（2 年次）または研究計画書（1 年次）を完成する。
③ 履修者が研究成果報告書（2 年次）の作成を通じて、修了後も自分自身の実務・研究に活かせる理論や分析能力を確固たるものにする。または研究計画書（1 年次）の作成を通じて、その素地を確立する。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）前期オリエンテーション：研究テーマの共有	事前	出願時点の研究計画、または作成した研究計画書を発表資料の形式に整理（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（4h）
第 2 週	（第 2 講）論文執筆の基礎I：論文とはなにか （第 3 講）論文執筆の基礎II：先行研究調査演習	事前	自身の研究テーマの重要性を端的に説明できるよう準備（2h）
		事後	自身の研究に関連する先行研究の整理（4h）
第 3 週	（第 4・5 講）「研究の背景」のまとめ方	事前	自身の研究テーマの重要性を端的に説明できるよう準備（2h）
		事後	「研究の背景」の執筆（4h）
第 4 週	（第 6・7 講）論点整理／先行研究の検討とディスカッションI：先行研究でわかっていることを把握する	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	「研究の背景」の執筆（4h）
第 5 週	（第 8・9 講）論点整理／先行研究の検討とディスカッションII：研究の独自性を把握する	事前	先行研究の調査と整理（4h）
		事後	「先行研究」の執筆（4h）
第 6 週	（第 10・11 講）論点整理／先行研究の検討とディスカッションIII：「研究の背景」と「先行研究」の完成	事前	先行研究の調査と整理（4h）
		事後	「研究の背景」と「先行研究」の執筆（6h）

第 7 週	（第 12・13 講）研究方法の検討と調査の準備	事前	自身の研究にふさわしい研究方法を検討し、発表資料の形式に整理（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（2h）
第 8 週	（第 14・15 講）前期のまとめ ・2 年次中間報告会 ・後期演習に向けた準備とディスカッション（模擬中間発表）	事前	報告会用発表資料のドラフト作成（2h）
		事後	指摘された点の修正・改善および報告会用資料の完成（8h）
第 9 週	（第 16 講）後期イントロダクション	事前	自身の研究および調査を進行し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（4h）
第 10 週	（第 17・18 講）調査結果の解釈に係るディスカッションI	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（4h）
第 11 週	（第 19・20 講）調査結果の解釈に係るディスカッションII	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（4h）
第 12 週	（第 21・22 講）研究成果報告書／研究計画書執筆指導I	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（4h）
第 13 週	（第 23・24 講）研究成果報告書／研究計画書執筆指導II	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（4h）
第 14 週	（第 25・26 講）研究成果報告書／研究計画書執筆指導III	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（4h）
第 15 週	（第 27・28 講）研究成果報告書／研究計画書執筆指導IV	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（4h）
第 16 週	（第 29・30 講）模擬最終審査会／模擬中間報告会	事前	最終審査会／中間報告会用発表資料のドラフト作成（4h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の完成（14h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は履修者（指定報告者）からの報告を基礎として実施する。報告日程は初回授業にて調整する。また、模擬報告を随時実施することで、研究内容の質を担保する。

※ 9 月修了予定者（後期入学者）に対しては、【1～8 週】【9～16 週】の内容を入れ替えて指導を行う。

教科書・参考書

教科書は指定せず、各テーマに対応した文献を適宜提示する。

参考書として、

- ティモシー・テイラー(著),池上彰(監訳),高橋璃子(翻訳)（2013）『スタンフォード大学で一番人気の経済学入門　マクロ編・ミクロ編』,かんき出版.
- 公益社団法人日本アナリスト協会編（2020）『企業価値向上のための資本コスト経営　投資家との建設的対話のケーススタディ』,日本経済新聞出版.
- 大竹文雄（2019）『行動経済学の使い方』,岩波新書.
- 楠木　建（2010）『ストーリーとしての競争戦略 ―優れた戦略の条件』,東洋経済新報社.

評価方法				
研究成果報告書／研究計画書の執筆課程全体を評価する。2 年次院生は最終審査会における研究成果報告書の内容と過程を総合的に評価して、1 年次院生は 1 年次中間報告会での発表に至るまでの過程を総合的に評価して、単位を認定する。				
その他の重要事項				
担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回の授業で説明する。				
2022 年度科目との読替え				
なし。				
本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	−	−	−	○

授業名称	コミュニケーションデザイン演習 6			科目コード	CDPD04n6T
担当教員	高広 伯彦	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位・2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期・後期	曜日	水 A
年間開講数	2 回	授業種別	演習	授業区分	選択必修

授業の目的

本授業の目的は、マーケティング、広報研究、社会学、メディア論、情報理論などの諸理論を学ぶことを通じ、院生自身が実務的な視点だけではなく、理論的な視点をもってして自らの研究対象にアプローチすることを可能にすることにある。実務の世界を研究対象にすると、ある一つの discipline（学術領域）のモノサシだけでは考察も判断もできないことはままある。そこで限られた時間ではあるが、上述したような複数の discipline を横断的に学び、interdisciplinary（学際的）な複眼を持って研究対象に向き合う必要がある。
そのため演習参加者の研究内容の発表を主たるものとしながら、現在の社会経済環境の中で起きている各種事象を遡上に載せ議論を行うことによって、理論をもって事象を見ること、事象をもって理論を理解することを行き来することを毎回体験してもらう。そしてこれらをもとに各履修者の研究成果報告書を発展させ完成させることがこのゼミの主たる目的である。

到達目標

本授業の到達目標は、履修者が社会科学等の諸理論と実践の場の視野を融合させ、研究成果報告者を執筆～完成させることによって高度専門職職業人であることが認められるようになることにある。結果として、修士課程修了後も、実務と学術の世界を往来できるような人材を育成することを目的とする。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）オリエンテーション～ガイダンス ・履修者各自の「研究計画書」の共有と今後の研究におけるスケジュールを検討する。	事前	出願時点の研究計画、または作成した研究計画書を発表資料の形式に整理（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（2h）
第 2 週	（第 2・3 講）研究成果報告書執筆指導 I 各ゼミ生の研究発表と討議を教員と全参加者で行う。	事前	発表内容の準備（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（4h）
第 3 週	（第 4・5 講）研究成果報告書執筆指導 II 各ゼミ生の研究発表と討議を教員と全参加者で行う。	事前	発表内容の準備（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（2h）
第 4 週	（第 6・7 講）研究成果報告書執筆指導 III 各ゼミ生の研究発表と討議を教員と全参加者で行う。	事前	発表内容の準備（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（2h）
第 5 週	（第 8・9 講）研究成果報告書執筆指導 IV 各ゼミ生の研究発表と討議を教員と全参加者で行う。	事前	発表内容の準備（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（2h）
第 6 週	（第 10・11 講）研究成果報告書執筆指導 V 各ゼミ生の研究発表と討議を教員と全参加者で行う。	事前	発表内容の準備（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（2h）
第 7 週	（第 12・13 講）研究成果報告書執筆指導 VI 各ゼミ生の研究発表と討議を教員と全参加者で行う。	事前	発表内容の準備（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（2h）
第 8 週	（第 14・15 講）研究成果報告書執筆指導 VII 及び前期のまとめ 中間報告会に向けた模擬報告を報告予定者に行ってもらい、討議する。	事前	報告会用発表資料のドラフト作成（10h）
		事後	指摘された点の修正・改善および報告会用資料の完成（6h）

第 9 週	（第 16 講）オリエンテーション～ガイダンス ・夏季休暇中の進捗や中間報告会後の研究成果をまとめ各履修者が報告を行う。	事前	自身の研究および調査を進行し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の修正・執筆（2h）
第 10 週	（第 17・18 講）研究成果報告書執筆指導Ⅷ	事前	発表内容の準備（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（2h）
第 11 週	（第 19・20 講）中間審査会に向けた模擬報告会 ・中間審査会に向け、履修者各人が研究成果を発表し、内容について検討する。	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（6h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（4h）
第 12 週	（第 21・22 講）研究成果報告書執筆指導Ⅸ	事前	発表内容の準備（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（2h）
第 13 週	（第 23・24 講）研究成果報告書執筆指導Ⅹ	事前	発表内容の準備（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（2h）
第 14 週	（第 25・26 講）研究成果報告書執筆指導Ⅺ	事前	発表内容の準備（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（2h）
第 15 週	（第 27・28 講）研究成果報告書執筆指導Ⅻ	事前	発表内容の準備（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（2h）
第 16 週	（第 29・30 講）研究発表準備 ・2 年次生）研究発表（最終審査会）に向けて、履修者各人の模擬研究発表行う。1 年次生）次年度に向けた研究計画の発表を行う。	事前	最終審査会／中間報告会用発表資料のドラフト作成（10h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の完成（6h）

授業の進め方と方法

1 年次生・2 年次生の区別なく、ゼミ参加者が研究発表を行い、その内容について参加者全員で討議を行う。期の最初に発表者の発表順を決めるので、それに基づいて各人のスケジュールを持って発表に望まれたい。なお、ゼミ生それぞれの研究に応じた理論や方法論については必要に応じて都度紹介・説明し、ゼミ参加者全員が、それらを学び・共有できるようにする。なお本演習は特別な事情がない限りは対面型での実施とする。

教科書・参考書

以下は研究成果報告書執筆に関する参考文献であるが、本演習の参加者は以下すべてを読んで理解することを必須とする。

NHK『ロンリのちから』制作班（2015）『ロンリのちから：「読み解く・伝える・議論する」論理と思考のレッスン』，三笠書房.

白木 湊・東大ケーススタディ研究会（編）（2022）『東大ケーススタディ研究会 伝説の「論理思考」講座』，東洋経済新報社.

福沢一吉(2012)『文章を論理で読み解くためのクリティカル・リーディング』，NHK 出版.

大出 敦 ・ 慶應義塾大学教養研究センター（2015）『クリティカル・リーディング入門:人文系のための読書レッスン』，慶應義塾大学出版会.

宮野公樹(2021)『問いの立て方』，筑摩書房.

小熊英二(2022)『基礎からわかる 論文の書き方』，講談社.

松浦年男・田村早苗（2022）『日本語パラグラフ・ライティング入門：読み手を迷わせないための書く技術』，研究社.

滝浦真人(2022)『日本語アカデミックライティング〔改訂版〕』，放送大学教育振興会.

滝浦真人(2021)『日本語リテラシー〔改訂版〕』，放送大学教育振興会.

評価方法
本演習における評価は、発表と討議への積極的な参加が対象となる。 発表 60 %・討議への参加 40% ※特に討議への参加については、発言の回数を参加者の中で相対的に評価する。
その他の重要事項
Teams 他を用いオンライン上でのコミュニケーションを中心に行うため、定期的なオフィスアワーは設けないが、履修者の希望により時間を設けて随時オフィスアワーを設定する。具体的な方法については、第 1 講にて説明する。
2022 年度科目との読替え
なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	–	–	–	○

授業名称	コミュニケーションデザイン演習 7			科目コード	CDPD04n7T
担当教員	白井 邦芳	実施方法	オンライン	単位数	2 単位・2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期・後期	曜日	火 A
年間開講数	2 回	授業種別	演習	授業区分	選択必修

授業の目的

講師はリスクマネジメントの分野で 35 年以上、また、上場企業を中心に実務として約 3,000 件以上の対応経験を有する。現在も司法・法曹界・広報・リスクマネジメントの学会に所属し、多くの具体的事例に係っている。本授業の目的は、講師の経験を活かし、研究成果報告書を作成するための視点と考え方を紹介することにある。

到達目標

① 履修者が研究成果報告書（2 年次）または研究計画書（1 年次）において、現実に運用可能で読み手にとって有益な内容を提案できること。

② 履修者が時代の変化に十分耐えうる柔軟な発想の下に技術的にも高度で精緻なコミュニケーションデザインを構築できること。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）ガイダンス、イントロダクション 履修者の研究成果報告書執筆計画の確認、進捗状況の共有。	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）
第 2 週	（第 2・3 講）研究計画の概要と検討 1 リスクイベントの抽出、ステークホルダーマネジメント、ヘリコプタービュー、プライオリティジャッジメントの理論を学ぶ。履修者ごとに研究成果報告書の進捗報告・議論を行う。	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）
第 3 週	（第 4・5 講）研究計画の概要と検討 2 実践の理論を考察するために、具体的な事例をもとに考究する。履修者ごとに研究成果報告書の進捗報告・議論を行う。	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）
第 4 週	（第 6・7 講）研究計画の概要と検討 3 実践の理論を考察するために、具体的な事例をもとに考究する。履修者ごとに研究成果報告書の進捗報告・議論を行う	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）
第 5 週	（第 8・9 講）中間発表会に向けての論点整理及び経過報告 1 研究成果報告書を執筆するために依拠する理論を履修者ごとにまとめて報告・議論を行う。履修者ごとに研究成果報告書の中間報告会のための進捗報告・議論を行う。	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）
第 6 週	（第 10・11 講）中間発表会に向けての論点整理及び経過報告 2 研究成果報告書を執筆するために依拠する理論を履修者ごとにまとめて報告・議論を行う。履修者ごとに研究成果報告書の中間報告会のための進捗報告・議論を行う。	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）
第 7 週	（第 12・13 講）中間発表会に向けての論点整理及び経過報告 3 研究成果報告書を執筆するために依拠する理論を履修者ごとにまとめて報告・議論を行う。履修者ごとに研究成果報告書の中間報告会のための進捗報告・議論を行う。	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）

第 8 週	（第 14・15 講）中間発表会に向けての論点整理及び経過報告 4 研究成果報告書を執筆するために依拠する理論を履修者ごとにまとめて報告・議論を行う。履修者ごとに研究成果報告書の中間報告会のための進捗報告・議論を行う。	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）
第 9 週	（第 16 講）中間発表会での課題と後期のイントロダクション 夏季休暇や 2 年次中間報告会での助言を踏まえ、研究成果を共有する。	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出、レポート作成（10h）
第 10 週	（第 17・18 講）課題の展開及び研究成果報告書執筆の経過報告 1 リスクマネジメント及びリスク・コミュニケーション分野における高度専門職業人の要件について議論し、履修者ごとに研究成果報告書の一部を執筆し発表・議論を行う。	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出、レポート作成（10h）
第 11 週	（第 19・20 講）課題の展開及び研究成果報告書執筆の経過報告 2 リスクマネジメント及びリスク・コミュニケーション分野における高度専門職業人の要件について議論し、履修者ごとに研究成果報告書の一部を執筆し発表・議論を行う。	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）
第 12 週	（第 21・22 講）課題の展開及び研究成果報告書執筆の経過報告 3 リスクマネジメント及びリスク・コミュニケーション分野における高度専門職業人の要件について議論し、履修者ごとに研究成果報告書の一部を執筆し発表・議論を行う。	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）
第 13 週	（第 23・24 講）研究成果報告書執筆の報告 1 履修者ごとに残された課題を抽出し、年末年始休暇中の研究成果報告書の完成に向けた計画・指導を行う。	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）
第 14 週	（第 25・26 講）研究成果報告書執筆の報告 2 履修者ごとに残された課題を抽出し、年末年始休暇中の研究成果報告書の完成に向けた計画・指導を行う。	事前	事前配布資料の確認（2h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出（3h）
第 15 週	（第 27・28 講）研究成果報告書執筆の報告 3 履修者ごとに研究成果報告書の口頭発表とそれについての議論を行う。	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出、レポート作成（10h）
第 16 週	（第 29・30 講）最終発表会 企業並びに社会に対する成果と今後の展望に関する総括討論	事前	事前配布資料の確認（3h）
		事後	講義後の自分事としての課題抽出、レポート作成（10h）
授業の進め方と方法			
上記目的・到達目標を達成するため、本授業は本授業は、ゼミ参加者による発表と討議を主軸とする。			
教科書・参考書			
参考図書は、各自の選択する領域に伴い随時紹介する。			

評価方法				
研究成果報告書執筆に合わせた研究、執筆、ディスカッション態度、発言内容などに照らし合わせて総合的に評価する。				
その他の重要事項				
③　初回の授業で、オフィス・アワーについて説明する。 ④　遅刻や欠席をする場合は、メール等を通じて事前に連絡すること。 本授業に関する疑問点や不明点は、担当教員へメールで確認すること。				
2022 年度科目との読替え				
なし。				
本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	－	－	－	○

授業名称	コミュニケーションデザイン演習 8			科目コード	CDPD04n8T
担当教員	北島 純	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位・2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期・後期	曜日	水 B
年間開講数	2 回	授業種別	演習	授業区分	選択必修

授業の目的

本授業の目的は、「研究成果報告書」および「研究計画書」の執筆・完成を支援することにある。「研究課題をどう設定すればよいか」、「研究をどう実践していけばよいか」、「成果をどう発表すればよいか」等に必要な技法を、講義（レクチャー）と議論（ディスカッション）を通じてお互いに学び合い、習得していく。各自の研究成果のプレゼンテーションと質疑応答だけではなく、思考を鍛える訓練として、例えば、リアルタイムで生起している各種事件を題材に「誰が取材し、どのように記事化され、いかなる社会的反応があったか」といったメディア分析や、「企業不祥事で、広報担当者が発したプレスリリースを採点する」といった広報評価、あるいは企業法務（ビジネス法）やコンプライアンスで問題となる課題についての討議も適宜行う。また、「メディア情報・学術情報の収集方法」、「インフォーマル・ロジックによる論証」、「フェルミ推定」、「オシント（OSINT）」、「ヒュミント（HUMINT）」、「グローバル・パブリックアフェアーズ（GPA）」、「ディベート」、「ライティング」等の技術を必要に応じて伝授する。各自の問題関心を研ぎ澄ませ、明晰に言語化する訓練の場として、互いに切磋琢磨しあえるような場として、ゼミを活用してもらいたい。

到達目標

① 履修者が、それぞれの関心に応じて実務上及び理論上の課題を自ら発見し、論理的かつ実効的な解決方法（社会実装手段）を提言できるようになる。

② 履修者が、各自の「研究成果報告書」（2 年次）または「研究計画書」（1 年次）を完成させ、審査の場で説得力のある発表を行うことができるようになる。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）「研究成果報告書」とは何か	事前	シシラバスの精読（0.5h） 演習における質問事項の検討（0.5h）
		事後	ディスカッションの復習（1h）
第 2 週	（第 2・3 講）研究テーマの選定	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 3 週	（第 4・5 講）先行研究の調査方法	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 4 週	（第 6・7 講）研究プレゼンテーションの技法	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 5 週	（第 8・9 講）研究計画ディスカッション I	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 6 週	（第 10・11 講）研究計画ディスカッションⅡ	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 7 週	（第 12・13 講）研究計画ディスカッションⅢ	事前	授業資料の確認（1h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）

第 8 週	（第 14・15 講）模擬発表	事前	授業資料の確認（1h） 発表の準備（23h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 9 週	（第 16 講）研究倫理	事前	授業資料の確認（0.5h） ディスカッションの準備（0.5h）
		事後	ディスカッションの復習（1h）
第 10 週	（第 17・18 講）予行発表Ⅰ	事前	授業資料の確認（1h） 発表の準備（2h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 11 週	（第 19・20 講）予行発表Ⅱ	事前	授業資料の確認（1h） 発表の準備（2h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 12 週	（第 21・22 講）予行発表Ⅲ	事前	授業資料の確認（1h） 発表の準備（2h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 13 週	（第 23・24 講）研究論文の執筆技法	事前	授業資料の確認（1h） 発表の準備（2h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 14 週	（第 25・26 講）予行発表Ⅳ	事前	授業資料の確認（1h） 発表の準備（5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 15 週	（第 27・28 講）予行発表Ⅴ	事前	授業資料の確認（1h） 発表の準備（5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）
第 16 週	（第 29・30 講）予行発表Ⅵ	事前	授業資料の確認（1h） 発表の準備（5h） ディスカッションの準備（2h）
		事後	ディスカッションの復習（2h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本演習は、履修者による発表とディスカッション（ディベート含む）を中心に行う（秋入学者については半年分シフトした進行となる）。

教科書・参考書

教科書：指定しない。

参考書：小熊英二（2022）『基礎からわかる論文の書き方』，講談社現代新書.

古賀史健（2021）『取材・執筆・推敲 書く人の教科書』，ダイヤモンド社.

東香名子（2021）『「バズる記事」にはこの 1 冊さえあればいい 超ライティング大全』，プレジデント社.

小林良樹（2014）『インテリジェンスの基礎理論［第二版］』，立花書房.

高松智史（2021）『ロジカルシンキングを超える戦略思想 フェルミ推定の技術』，ソシム.

野中郁恵・三輪裕美子編（2021）『図説 企業の論点』，旬報社.

評価方法

① 研究成果報告書に対する取り組み

② 毎回の演習における議論への参加

総合的な評価（①60%、②40%）により判定する。

その他の重要事項				
担当教員のオフィスアワー・予約方法については、初回の授業で説明する。				
2022 年度科目との読替え				
なし。				
本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	–	–	–	○

授業名称	コミュニケーションデザイン演習 9			科目コード	CDPD04n9T
担当教員	谷口 優	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位・2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期・後期	曜日	月 A
年間開講数	2 回	授業種別	演習	授業区分	選択

授業の目的

本授業の目的は、第一には研究成果報告書の作成・完成にある。
ただし、そのプロセスの中で自身の研究テーマに関する「仮説構築」、「仮説検証方法の決定」「仮説検証のためのファクト集め（インタビューなどを含む）、自身の論のわかりやすいプレゼンテーションの方法（企画・構成・文章力）を身に着けてもらうことも副次的な目的として設定する。
授業においては講師が実務において月刊メディアの編集をしている立場から、先行研究をもとにした各自の理論展開においてその理論の裏付けとなる各種事例のサジェスチョンを行ったり、またメディア編集のノウハウの一つである仮説をもとにした論旨展開について実地的に指導を行うことも想定している。
また、メディア編集者としてのネットワークも用い、履修者の研究テーマを深堀りする上で、ゲスト講師の招聘が適切と考えられる際には、演習ではあるがゲスト講師の招聘も行うことがある。
また研究成果報告書の作成を通じて、本学修了後に広報コミュニケーションに携わる実務家・専門家としての自信の探求領域に関する自分なりの理念・哲学を持てるよう、「その研究テーマに取り組む意味」を掘り下げて検討してもらうことも期待する。それによって専門職大学院大学で自ら探求したことを修了後も、個々人の仕事の糧として生かしてもらうことを目指す。

到達目標

① 履修者が研究成果報告書を完成させる。
② 履修者が研究成果報告書の作成のプロセスにおいて、仮説構築・検証の一連のプロセスを身に着ける。
③ 履修者が研究成果報告書の作成のプロセスにおいて、自身の広報領域における理念・哲学を構築する。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）前期イントロダクション ・本演習の進め方、方針についての説明 ・各履修者の研究テーマについての発表・確認	事前	研究テーマの計画（3h） シラバスの精読（1h）
		事後	研究テーマの精査（3h） 演習を通じた学び・気づきレポート<他の履修者の発表含む）（2h）
第 2 週	（第 2 講・第 3 講）仮説テーマ設定と検証について ・研究テーマを明確にすることを目的に、多様な事象・理論から共通項、相違点を導き出し、仮説をつくるプロセスについて	事前	研究テーマの背景にある課題・事象の整理（3h）
		事後	指摘事項の精査・テーマの再考（2h） 演習を通じた学び・気づきレポート<他の履修者の発表含む）（2h）
第 3 週	（第 4 講・第 5 講）研究計画の発表 1 ・各履修者が研究成果報告書完成までの研究計画を発表 （研究テーマ、検証すべき仮説、先行研究、仮説を検証する手段、執筆の各項目についての方針とスケジュールの発表）	事前	研究計画の作成（5h）
		事後	指摘事項の精査（2h） 演習を通じた学び・気づきレポート<他の履修者の発表含む）（2h）
第 4 週	（第 6 講・第 7 講）研究計画の発表 2 ・各履修者が研究成果報告書完成までの研究計画を発表 （研究テーマ、検証すべき仮説、先行研究、仮説を検証する手段、執筆の各項目についての方針とスケジュールの発表）	事前	研究計画の作成（3h）
		事後	指摘事項の精査（2h） 演習を通じた学び・気づきレポート<他の履修者の発表含む）（2h）

第 5 週	（第 8 講・第 9 講）先行研究レビュー1 ・各履修者が先行研究の中から 1 点選び、要点をまとめて発表。他の履修者と議論を行う。	事前	先行研究の探索（3h）
		事後	指摘事項の精査・追加の先行研究の探索・精読（2h） 演習を通じた学び・気づきレポート＜他の履修者の発表含む）（2h）
第 6 週	（第 10 講・第 11 講）先行研究レビュー2 ・各履修者が先行研究の中から 1 点選び、要点をまとめて発表。他の履修者と議論を行う。	事前	先行研究の探索（3h）
		事後	指摘事項の精査・追加の先行研究の探索・精読（2h） 演習を通じた学び・気づきレポート＜他の履修者の発表含む）（2h）
第 7 週	（第 12 講・第 13 講）仮説検証と理論・フレームワーク ・研究テーマの検証、論の展開に際して依拠する考え、理論、フレームワークを検討。各自が持ち寄り発表して議論を行う。	事前	研究の探索・資料作成（3h）
		事後	指摘事項の精査・追加の理論、フレームワークの探索（2h） 演習を通じた学び・気づきレポート＜他の履修者の発表含む）（2h）
第 8 週	（第 14・15 講）前期のまとめ ・2 年次中間報告会・後期演習に向けた準備とディスカッション（模擬中間発表）	事前	報告書ラフの作成（3h）
		事後	指摘事項の精査（2h） 演習を通じた学び・気づきレポート＜他の履修者の発表含む）（2h）
第 9 週	（第 16 講）後期イントロダクション ・前期の指摘を踏また研究の成果と今後の研究計画を発表。	事前	研究計画の作成（3h）
		事後	指摘事項の精査（2h） 演習を通じた学び・気づきレポート＜他の履修者の発表含む）（2h）
第 10 週	（第 17 講・第 18 講）研究成果報告書執筆　実践指導 1 ・各履修者が探求したいと考えているテーマを基軸に、研究成果報告書の完成までのプロセスを通じ、そのテーマに合致した検証・研究ができているかを検討する。	事前	教員・他の履修者への相談事項の整理（2h）
		事後	指摘事項の精査・研究成果報告書の執筆（4h）演習を通じた学び・気づきレポート＜他の履修者の発表含む）（2h）
第 11 週	（第 19 講・第 20 講）研究成果報告書執筆　実践指導 2 ・各履修者が探求したいと考えているテーマを基軸に、研究成果報告書の完成までのプロセスを通じ、そのテーマに合致した検証・研究ができているかを検討する。	事前	教員・他の履修者への相談事項の整理（2h）
		事後	指摘事項の精査・研究成果報告書の執筆（4h）演習を通じた学び・気づきレポート＜他の履修者の発表含む）（2h）
第 12 週	（第 21 講・第 22 講）研究成果報告書執筆　実践指導 3 ・各履修者が探求したいと考えているテーマを基軸に、研究成果報告書の完成までのプロセスを通じ、そのテーマに合致した検証・研究ができているかを検討する。	事前	教員・他の履修者への相談事項の整理（2h）
		事後	指摘事項の精査・研究成果報告書の執筆（4h）演習を通じた学び・気づきレポート＜他の履修者の発表含む）（2h）
第 13 週	（第 23 講・第 24 講）研究成果報告書執筆　実践指導 4 ・各履修者が探求したいと考えているテーマを基軸に、研究成果報告書の完成までのプロセスを通じ、そのテーマに合致した検証・研究ができているかを検討する。	事前	教員・他の履修者への相談事項の整理（2h）
		事後	指摘事項の精査・研究成果報告書の執筆（4h）演習を通じた学び・気づきレポート＜他の履修者の発表含む）（1h）

第 14 週	（第 25 講・第 26 講）研究成果報告書執筆　実践指導５ ・各履修者が探求したいと考えているテーマを基軸に、研究成果報告書の完成までのプロセスを通じ、そのテーマに合致した検証・研究ができているかを検討する。	事前	教員・他の履修者への相談事項の整理（2h）
		事後	指摘事項の精査・研究成果報告書の執筆（4h）演習を通じた学び・気づきレポート＜他の履修者の発表含む）（2h）
第 15 週	（第 27 講・第 28 講）サマリー作成・口頭発表　実践指導 ・サマリーの作成・発表を通じて、研究成果報告書を通じて自身が探求したいと考えるテーマをより精緻にする。	事前	研究成果報告書を通じた自身の学びについての発表資料作成（3h）
		事後	指摘事項の精査（3h） 演習を通じた学び・気づきレポート＜他の履修者の発表含む）（2h）
第 16 週	（第 29 講・第 30 講）口頭発表に向けた最終確認 ・口頭発表練習を通じた演習活動の成果の確認。	事前	発表資料の作成（3h）
		事後	指摘事項の精査（3h）

授業の進め方と方法

・履修者人数、履修者同士の議論などにより、発表のある講義については当初計画のスケジュール通りにいかないこともあるため、同じテーマの発表事項の指示があった際は、全履修者が発表できるよう準備を進めておく。
・本授業では後期においては、個別指導の場面もあるが、履修者同士が多様なバックグラウンド、視座、探求心をもとに議論をし、研究成果報告書完成までのプロセスを通じ、自分の考えに対する第三者の視点、論点を取り入れていけることを目指すため、他者の発表に対する積極的な意見を求める。
・ゲスト講師の招聘など履修者の要望に合わせて、より高い学習効果が見込めることがあれば、対応していく。

教科書・参考書

教科書は特に指定なし。
参考書籍:月刊『宣伝会議』, 宣伝会議.

評価方法

総合評価としては「研究成果報告書」の完成度を重視するが、前期ではそこに至るプロセスでの仮説設定、検証能力、他の履修者の研究に対して示唆を提示するような発言・働きかけについても評価の対象とする。
〇前期・中間評価
・発表内容（70%）
・他履修者との討論（30%）
〇後期・総合評価
・研究成果報告書の完成度（70%）
・研究成果報告書完成を通じた履修者なりの理論・哲学・考えの構築（30%）

その他の重要事項

オフィスアワー、その予約方法については初回講義（前期イントロダクション）にて説明するが、
演習においては、各自の研究成果報告書の進捗に合わせ、演習以外の時間においても履修者の要望に応じ、個別での指導を行う方針。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	–	–	–	○

授業名称	コミュニケーションデザイン演習 10			科目コード	CDPD04n0T
担当教員	橋本 純次	実施方法	ハイフレックス	単位数	2 単位・2 単位
配当年次	1・2 年次	開講学期	前期・後期	曜日	金 A
年間開講数	2 回	授業種別	演習	授業区分	選択必修

授業の目的

本授業の目的は、履修者が「コミュニケーションデザイン修士（専門職）」の学位を授与されるにふさわしい研究成果報告書を完成させること、またはその前提として十分な研究計画書を完成させることにある。専門職大学院において説得力・実効性のある研究成果報告書を作成するためには、「理論と実践の融合」の発想が必要不可欠であり、本授業ではメディア、オーディエンス、社会情報学、公共コミュニケーション（とりわけリスク・コミュニケーション、サイエンス・コミュニケーション）、公共空間論、公共政策といったテーマについて、両者を架橋するための視座と能力を院生相互の学び合いのなかで提供する。

到達目標

① 履修者が自身の関心に応じて実務上ないし理論上の課題を自ら発見し、論理的かつ実効的な解決方法を提言できるようになる。

② 履修者が研究成果報告書（2 年次）または研究計画書（1 年次）を完成する。

授業計画		授業外の学習	
第 1 週	（第 1 講）前期オリエンテーション：研究テーマの共有	事前	出願時点の研究計画、または作成した研究計画書を発表資料の形式に整理（2h）
		事後	指摘された点の修正・改善（3h）
第 2 週	（第 2 講）論文執筆の基礎Ⅰ：論文とはなにか （第 3 講）論文執筆の基礎Ⅱ：先行研究調査演習	事前	指定された文献の講読（2h）
		事後	自身の研究に関連する先行研究の整理（4h）
第 3 週	（第 4・5 講）「研究の背景」のまとめ方	事前	自身の研究テーマの重要性を端的に説明できるよう準備（2h）
		事後	「研究の背景」の執筆（4h）
第 4 週	（第 6・7 講）論点整理／先行研究の検討とディスカッションⅠ：先行研究でわかっていることを把握する	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	「研究の背景」の執筆（4h）
第 5 週	（第 8・9 講）論点整理／先行研究の検討とディスカッションⅡ：研究の独自性を把握する	事前	先行研究の調査と整理（3h）
		事後	「先行研究」の執筆（4h）
第 6 週	（第 10・11 講）論点整理／先行研究の検討とディスカッションⅢ：「研究の背景」と「先行研究」の完成	事前	先行研究の調査と整理（3h）
		事後	「研究の背景」と「先行研究」の執筆（6h）
第 7 週	（第 12・13 講）研究方法の検討と調査の準備	事前	自身の研究にふさわしい研究方法を検討し、発表資料の形式に整理（4h）
		事後	指摘された点の修正・改善（2h）
第 8 週	（第 14・15 講）2 年次中間報告会／後期に向けた準備とディスカッション：模擬中間発表	事前	報告会用発表資料のドラフト作成（5h）
		事後	指摘された点の修正・改善および報告会用資料の完成（10h）
第 9 週	（第 16 講）後期オリエンテーション：夏季休暇中の研究遂行状況の共有	事前	自身の研究および調査を進行し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（4h）

第 10 週	（第 17・18 講）調査結果の解釈に係るディスカッションⅠ	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（4h）
第 11 週	（第 19・20 講）調査結果の解釈に係るディスカッションⅡ	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（4h）
第 12 週	（第 21・22 講）研究成果報告書／研究計画書執筆指導Ⅰ	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（5h）
第 13 週	（第 23・24 講）研究成果報告書／研究計画書執筆指導Ⅱ	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（5h）
第 14 週	（第 25・26 講）研究成果報告書／研究計画書執筆指導Ⅲ	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（5h）
第 15 週	（第 27・28 講）研究成果報告書／研究計画書執筆指導Ⅳ	事前	相談したい事項を検討し、発表資料の形式に整理（2h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の執筆（5h）
第 16 週	（第 29・30 講）模擬最終審査会／模擬中間報告会	事前	最終審査会／中間報告会用発表資料のドラフト作成（4h）
		事後	研究成果報告書または研究計画書の完成（10h）

授業の進め方と方法

上記目的・到達目標を達成するため、本授業は履修者（指定報告者）からの報告を基礎として実施する。報告日程は初回授業にて調整する。また、模擬報告を随時実施することで、研究内容の質を担保する。

※ 9 月修了予定者（後期入学者）に対しては、【1～8 週】【9～16 週】の内容を入れ替えて指導を行う。

教科書・参考書

教科書は指定しない。

参考書：グレアム・ターナー（1999）『カルチュラル・スタディーズ入門　理論と英国での発展』，作品社.
ロジャー・シルバーストーン（2003）『なぜメディア研究か　経験・テクスト・他者』，せりか書房.
ジグムント・バウマン（2008）『リキッド・ライフ　現代における生の諸相』，大月書店.
ウェイン・ブースほか著・川又政治訳（2018）『リサーチの技法』，ソシム.
ウド・クカーツ（2018）『質的テキスト分析法：基本原理・分析技法・ソフトウェア』，新曜社.
サトウタツヤほか（2019）『質的研究法マッピング　特徴をつかみ、活用するために』，新曜社.

評価方法

研究成果報告書／研究計画書の執筆課程全体を評価する。2 年次院生は最終審査会における研究成果報告書の内容と過程を総合的に評価して、1 年次院生は 1 年次中間報告会での発表に至るまでの過程を総合的に評価して単位を認定する。

その他の重要事項

担当教員のオフィスアワーおよび予約の方法については、初回の授業で説明する。

2022 年度科目との読替え

なし。

本科目と対応するディプロマ・ポリシー	DP ①	DP ②	DP ③	DP ④
	－	－	－	○